

一般国道432号道路改良工事予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 V

谷ノ奥遺跡

平成14(2002)年3月

島根県八雲村教育委員会

一般国道432号道路改良工事予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 V

たに の おく い せき
谷 ノ 奥 遺 跡



平成14(2002)年3月

島根県八雲村教育委員会

序

八雲村教育委員会では、島根県松江土木建築事務所の委託を受けて、平成6年度より、一般国道432号道路改良工事予定地内（八雲村東岩坂地区）に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しておりますが、このほど調査報告書第V集を刊行する運びとなりました。

本書は平成9年度に行った谷ノ奥遺跡の調査成果をとりまとめたものです。

平成9年4月より開始しました現地調査では、山腹から縄文時代と考えられる落とし穴、古墳時代中期の古墳、中世末から近世にかけての土壙墓、時期不明の掘立柱建物跡などが見つかりました。また、谷部の水田からは弥生時代に起ったと考えられる洪水の跡が確認されています。

この報告書が地域の歴史を解明するうえでの糸口になることを期待すると共に、郷土の歴史と文化に対する理解と関心を高める一助としてお役に立てば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたりまして、ご協力いただきました島根県松江土木建築事務所、島根県教育庁文化財課、並びに関係者の皆様、また、直接発掘調査に携わっていただきました作業員の皆様に衷心より感謝の意を表します。

平成14年3月

八雲村教育委員会

教育長 泉 和夫

例 言

1. 本書は、島根県松江土木建築事務所の委託を受けて、八雲村教育委員会が平成9(1997)年度に実施した、一般国道432号道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2. 本書で扱う遺跡の所在地及び調査面積は次の通りである。

谷ノ奥遺跡 調査面積 1,683 m²

(第I調査区) 島根県八束郡八雲村大字東岩坂3415番地外 面積 1,035 m²

(第II調査区) 島根県八束郡八雲村大字東岩坂308-3番地外 面積 648 m²

3. 調査組織は以下の通りである。

[平成9年度] 現地調査

調査主体 八雲村教育委員会(教育長 佐原通司)

調査指導者 東森市良(八雲村文化財保護審議会委員)

西尾克己(島根県教育庁文化財課主幹)

柳浦俊一(島根県教育庁文化財課文化財保護主事)

岩橋孝典(島根県教育庁文化財課主事)

事務局 長島幸夫(教育次長)、藤田節子(嘱託)

調査担当者 川上昭一(社会教育係主任主事)

作業員 安部直義、安部当了、安部益子、石倉恒雄、石倉睦子、石原君子、石原多鶴
石原政子、石原幸恵、近藤仁一、桜出 豊、高尾万里子、田中和美、藤原秀子
山根 隆、山根利子

遺物整理 武田裕子、深津光子

[平成13年度] 報告書作成

調査主体 八雲村教育委員会(教育長 泉和夫)

調査指導者 間野大丞(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター文化財保護主事)

事務局 三好 淳(教育次長)、藤田節子(嘱託)

調査担当者 川上昭一(社会教育係主任主事)

調査補助員 田中和美(臨時職員)、深津光子(臨時職員)

遺物整理 善家幸子、高尾万里子

4. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては以下の方々から有益なご助言、ご協力、資料の提供を頂いた。記して感謝の意を表する。(順不同、敬称略)

足立克己(島根県教育委員会)、池淵俊一(同)、内田律雄(同)、椿 真治(同)、守岡正司(同)

赤坂正秀(島根大学総合理工学部教授)、安部吉弘(島根県銃砲刀剣類登録審査委員)

江川幸子(松江市教育文化振興事業団)、大谷晃二(島根県立松江北高等学校教諭)

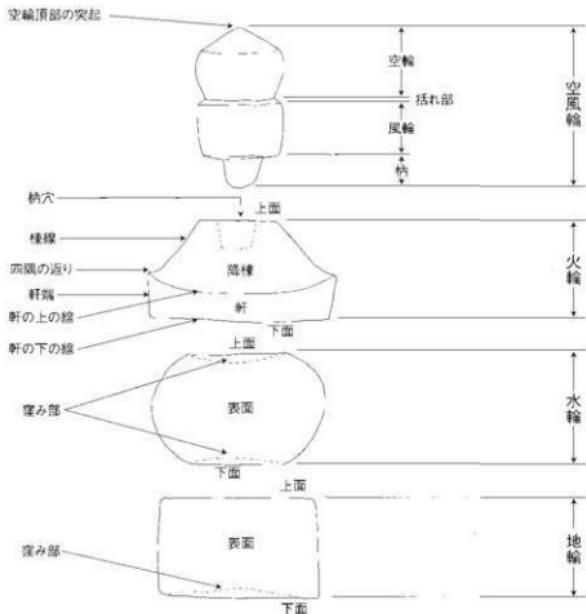
勝部正郊(国立民族学博物館国内資料調査委員)、宍道年弘(斐川町教育委員会)、松本堅吾(同)

中村唯史(島根県立三瓶自然館指導員)、今岡 稔(島根考古学会)、村上 勇(広島県立美術館)

勝部 衛(玉湯町立出雲玉作資料館)、平野邦雄(島根県立八雲立つ風土記の丘資料館)

宮沢明久(同)、曾田辰雄(平田市教育委員会)、西本豊弘(国立歴史民族博物館)

5. 本報告書の編集と執筆は、上記の調査指導者や協力者の指導と助言を得ながら調査員が協議して行った。
6. 本書で使用した方位は磁北を示す。
7. 本書に掲載した「第2図：位置と周辺の遺跡」は建設省国土地理院発行のものを使用し、「第1図：八雲村位置図」・「第3図：調査遺跡位置図」・「第4図・第81図：調査区配置図」については島根県松江土木建築事務所の管内図及び工事図面を墨書きして使用した。
8. 「第2図：位置と周辺の遺跡」の遺跡番号は島根県教育委員会発行の『増補改訂島根県遺跡地図』I（出雲・隠岐編）1993年3月と対応している。
9. 土壌および遺物の色調には農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1996年版を参考にした。
10. 出土鉄器の保存処理は株式会社京都科学及び株式会社吉田生物研究所に委託し、これを行った。
11. 本遺跡出土遺物及び調査記録は八雲村教育委員会で保管している。
12. 遺物実測図で使用したスクリーントーンは、次の意味を示す。
- …赤色顔料を示す。 □…欠損部を示す。 ■…鐵器に残った布目を示す。
- このほかの意味で使用したものについては、図中に記載した。
13. 本書で使用した五輪塔の各部の呼称は次の通りである。（調査指導を参考に間野大丞「中世石造物の調査方法について」『来待ストーン研究』1 来待ストーンミュージアム 1998年の五輪塔各部の名称を一部改変して使用した。）



目 次

I 位置と環境	1
II 調査に至る経緯	7
III 調査の経過	9
IV 第Ⅰ調査区	11
第1章 調査の経過と概要	11
第2章 調査の結果	13
1節 落とし穴	13
2節 古墳	15
3節 挖立柱建物跡	29
4節 中・近世墓	30
5節 その他の遺構及び遺構外出土遺物	67
V 第Ⅱ調査区	73
第1章 調査の経過と概要	73
第2章 調査の結果	77
VI 結語	80

I 位置と環境

八雲村は鳥取県の東部、松江市の南にあたり、北と西は松江市(北:旧大庭村・西:旧忌部村)、南西部は大原郡大東町(旧海潮村)、南東部は能義郡広瀬町(旧山佐村・旧広瀬町)、北東部は八束郡東出雲町(旧意東村・旧出雲郷村)に隣まれている。松江駅よりバスを利用して約26分で八雲村役場に、34分で熊野大社前に到着する。松江市街地への利便性に恵まれ、そのベッドタウンとして近年急速に宅地化が進み、県下市町村の中で高い人口増加率を示す村である。

村の規模は東西8km・南北10km・面積約55.41km²を測り、総面積の80%以上が山林で占められる。この山間にヤツデの葉を広げたように(図版1)谷が形成されているが、これらはすべて意宇川本支流の浸食堆積作用によるものである。大きな谷には意宇川、桑並川、東岩坂川、川原川の谷があるが、その谷筋の沖積地には余すところなく水田が開かれている。平野はあまり発達をみせず、川が合流する村の北側(意宇川の中流域)部分に盆地状に展開している。

遺跡はこの谷と平野を取り囲む部分に集中し、谷ノ奥遺跡も東岩坂川が作り出した谷の水田中及び、この谷を見下ろす丘陵斜面に位置している。以下、時代毎に八雲村の遺跡の概略を記す。

旧石器時代の遺跡としては空山遺跡(F62)が熊野空山山頂に位置する。1971年に実施された学術調査により、前期旧石器時代と考えられる握槍、握斧、盤状石器、削器が出土した。しかし、これらの石器の剥離痕が自然に生じる破碎痕とする意見もあり、この石器が果たして人為的に加工されたものなのか自然石であるのかの結論は出ていない。この他、真ノ谷遺跡(106)や折原上堤東遺跡(88)からも旧石器時代にさかのばる可能性のある石器が出土している。

縄文時代になると遺物の調査例は増加するが、遺構に伴うものは少ない。その中にあって、西ノ谷遺跡(F73)からはサヌカイト製ポイント形石器、黒曜石の一次加工のある剥片石器とともに82個のピット状の落ち込みが検出されている。これらのうちP-1~P-15は長軸5m、短軸3.5mを測る楕円を描き、その中央にP-16~P-20が方形に配置され、上層構造を推定することも可能である。また、前田遺跡(97)では川辺から晩期のドングリの貯蔵穴が見つかっている。実際にドングリが出土した土坑は4個であったが、立地や規模から貯蔵穴と考えられる土坑が多数検出されている。この他、底部中央に小さなピットをもつ土坑が発見された。遺物は出土していないが、形態などから縄文時代の落とし穴と思われるものであり、折原上堤東遺跡、折原峠遺跡(101)、青木遺跡(98)、真ノ谷遺跡からも同様の土坑が検出されている。

弥生時代の遺跡は縄文時代に比べると少なく、各遺跡から出土する遺物の量も僅かである。前期の遺物としては前田遺跡から壺と壺の破片が数点出土している。併し、河川堆積層からの出土であり、遺構は見つかっていない。後期の遺跡としては折原峠遺跡が存在する。後世の掘削により大部分が失われているが、竪穴住居跡の床面から後期中葉の草田2期に含まれる甕が出土している。また、同丘陵上には折原上堤東遺跡(第II調査|X)が位置し、弥生時代後期後葉から古墳時代前期初頭の竪穴住居跡5棟が見つかっている。この他、村内からは熊野大社々地出土と伝えられている銅鐸が1個あるが、正確な出土場所は特定できていない。外縁付紐式に属するものであり、現存する高さ19.9cm(身高16.4cm、鉛高3.5cm)、鉛厚2~3mm、重量648gを測る。文様は全体に不鮮明であるが、紐は綾杉文、鐸は鋸歯文、身は4回文となる袈裟襷文(四区袈裟襷文)で飾られている。

古墳時代になると遺跡数が増加し、遺跡の7割以上がこの時期のもので占められる。前期の古墳としては、3基の方墳からなる小屋谷古墳群(22)が存在する。埋葬主体は箱式石棺と壺棺及び組合式木棺であり、副葬品としては3号墳の組合式木棺内から刀子1本と四地鏡1面が出土している。

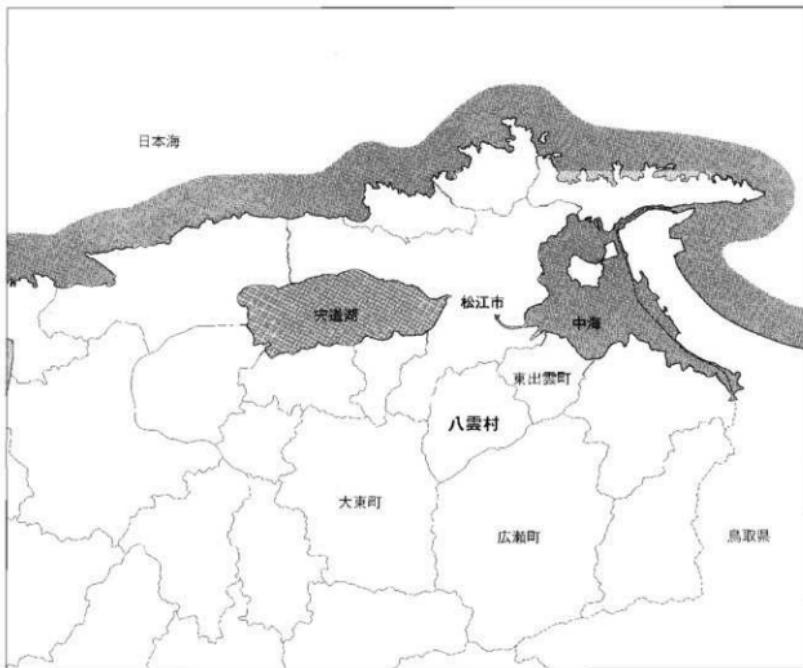
中期以降になると小規模な古墳群が丘陵上に造られるようになる。谷ノ奥遺跡の北東には、増福寺古墳群(42)・土井古墳群(19)・増福寺裏山古墳群(41)が分布している。増福寺古墳群は一辺6.0~14.5mの方墳26基によって構成されている。特筆すべきは、20号墳から出土した須恵器子持鏡の親壺と、前田遺跡から出土した子壺とが接合できたことである。本来は親壺の肩部に4個の子壺が取り付けられていたものであり、このうちの1個が前田遺跡の河川内から、もう1個が親壺と一緒に20号墳の西側平垣面からつぶされた状態で出土している。残る2個の子壺は発見されていない。土井古墳群は、増福寺古墳群の北側に位置する古墳群で、一辺7.0~11.0mの方墳13基によって構成されている。増福寺裏山古墳群は土井古墳群と同じ丘陵に立地し、一辺10m前後の方墳8基からなる。これらは尾根により便宜上3つに分けられているものの、本来は同一の群と考えられる。総数47基を数えるこれらの古墳群は、密集度において、松江市大草町にある西石塚山古墳群と同一の群をなしていたと考えられる八雲西石塚山古墳群(21)に次ぐものである。この2つの古墳群が村内では密集度の高いものである。この時期の住居跡には、折原上堤東遺跡(第I調査区)があげられる。方形の堅穴住居跡4棟が見つかり、このうちS I-03からは多数の土師器に混じり住居内祭祀に用いられた泥岩製有孔円板4点が出土している。

古墳時代後期に入ると、出雲地方東部に多い石棺式石室をもつ池ノ尻古墳(5)、雨乞山古墳(1)が築かれる。池ノ尻古墳は東岩坂川が造り出した谷の水田中に位置する。墳丘は水田耕作の際に削られ、現在では石室がむき出しになっている。原位置から動いている石材もあるが、現状での石室の規模は内法幅1.9m、奥行き1.3m、高さ1.6mを測る。雨乞山古墳は平野北東にそびえる雨乞山南麓に築かれたものである。墳丘は現状で一辺7.5×8.0m、高さ2.5mを測り、方墳と考えられる。意宇川下流域の古墳の影響を受けたこの古墳は、八雲村最大規模の石室を有し、この地域の有力な豪族の存在が窺われる。一方、同時期の横穴墓は丘陵斜面に数基から十数基の単位で営まれている。密集度の高いものに四歩市横穴墓群(3)がある。増福寺古墳群の南側の丘陵山腹に分布するものであり、確認できる横穴だけで28穴を数える。玄室の平面プランは、大部分が方形で犬井は丸犬井形をなしでいるが、非常に丁寧な四注式正整家形のものも数穴見られる。この他、後期の遺構として前田遺跡から検出された貼石遺構がある。川辺に自然石を並べたものであり、遺構周辺からは、勾玉、切子玉、土鈴、手捏ね土器、琴、白玉が入った須恵器の壺、赤色顔料が塗布された土師器の高杯、瓢箪、多量の桃核等が出土している。また、付近の河川内からは頭椎式の木製刀把装具や赤色顔料により優美な文様が描かれた木片などが出土していることから、有力首長による川辺の祭祀遺跡と考えられる。

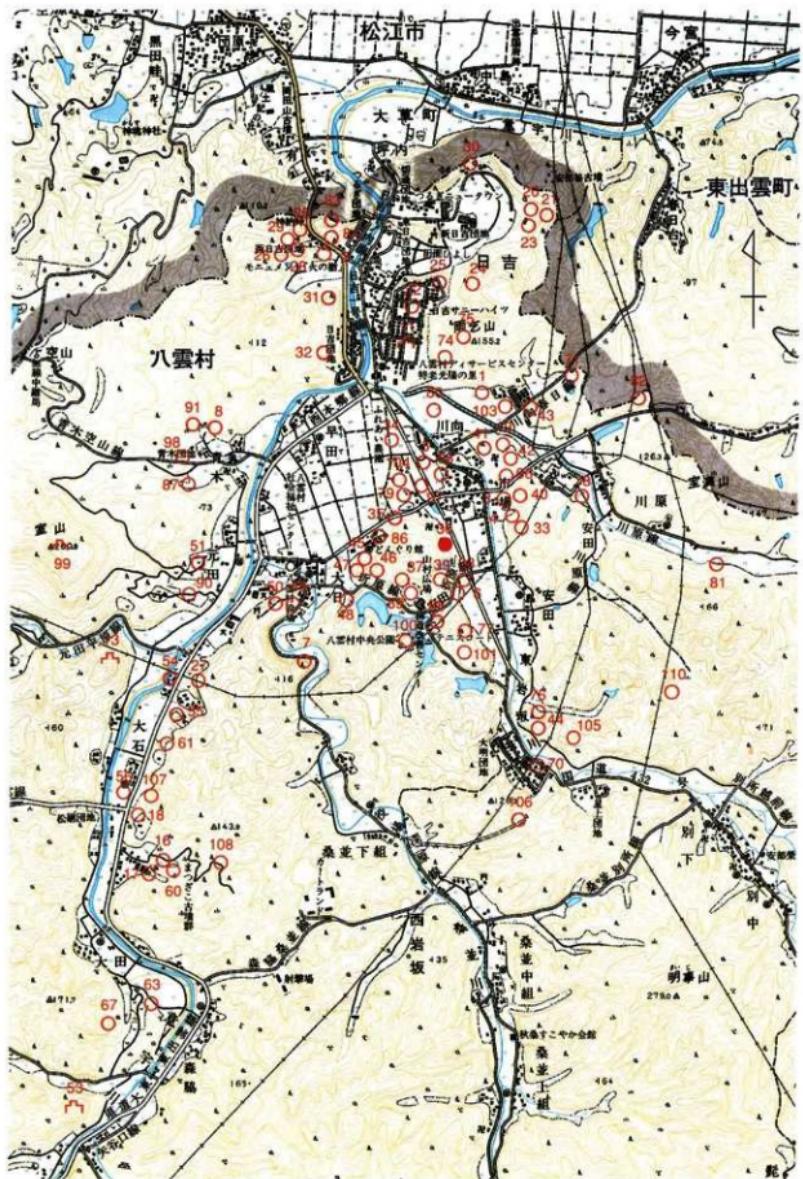
奈良時代の遺跡としては青木遺跡があげられる。第I調査区で発掘された掘立柱建物跡の床面からは須恵器の壺蓋内面に「社邊」と刻まれたヘラ唐土器(転用便)が出土している。付近からは須恵器の灯明皿、「林」と書かれた墨書き器2点なども見つかり、注目される。八雲村は、733年に編纂された『出雲國風土記』によると、出雲国守や意宇郡家が置かれていた「意宇郡大草郷」に含まれ、八雲村域だけで1つの郷を形成し得ないほど人口は希薄だったようである。それでも当地域には中央の神祇官の神名帳に登録されている官社が9社(熊野大社・久米社・宇流布社・前社・田中社・詔門社・楯井社・速玉社・石坂社)、国守だけに登録されている国社7社(毛弥社・那富乃夜社・国原社・田村社・

河原社・笠納社・志多儂社)が存在していた。このことは、村域の各地に集落が形成され、それぞれが祭祀を行っていたことを裏付けている。

中世以降の遺跡の調査例は僅かであるが、熊野大社近くにある叶サコ遺跡(F58)からは常滑系の甕を使用した鎌倉時代の墓が見つかっている。この他、谷ノ奥遺跡の同丘陵には墳頂部より五輪塔の基壇が検出された中山2号墳(35)や、多数の石塔が散在する中山五輪塔群(79)が存在する。中山五輪塔群は低丘陵上に位置し、畑地開墾の折りに45基以上の五輪塔が掘り出されている。村内各所には多くの五輪塔が点在しており、今後全村的な検討が必要である。本村は尼子氏の居城月山富田城のあった広瀬町と接し、中海・宍道湖が近いという地理的条件から要衝には山城が築かれ、熊野の地には尼子十旗の中に数えられる熊野城跡(F12)が存在する。戦国時代頃の伝承・文化財が数多く残り、今後中世の遺跡の増加と重要な遺構の発見も予想される。



第1図 八雲村位置図 (1 : 40,000)



第2図 位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	名 称	種 別	概 要	番号	名 称	種 別	概 要
1	雨乞山古墳	古 墓	方墳、石室式石室	50	岩坂神社横穴墓群	横穴墓群	須恵器
2	岩坂陥落参考地	古 墓	円墳	51	古城遺跡	散 布 地	住居跡、土師器、繩文土器
3	四歩市横穴墓群	横穴墓群	28穴確認、須恵器	53	舛形山城	城 路	—
4	高丸横穴墓群	横穴墓群	4穴確認	54	雲場古墳	古 墓	—
5	池ノ尻古墳	古 墓	石室式石室、須恵器	55	掛合遺跡	散 布 地	須恵器
6	安田横穴墓群	横穴墓群	2穴	56	田中社跡	神 社 路	—
7	岩屋山横穴墓群	横穴墓群	8穴	60	松園古跡	上 墓	須恵器
8	青木横穴墓群	横穴墓群	2穴確認	61	人石塚跡	墓 路	須恵器
11	東岩板要寄山城跡	城 路	山城、石垣、消滅	63	恩部遺跡	散 布 地	須恵器、土師器、黒曜石
13	人石城跡	城 路	山城	67	恩部山横穴墓群	横穴墓群	—
16	松園古跡群	古 墓 群	方墳4基以上	68	紙吹遺跡	散 布 地	磨製石斧
17	松側横穴墓群	横穴墓群	8穴以上	70	伊谷遺跡	散 布 地	陶器、人形埴地
18	高野横穴墓群	横穴墓群	直刀、鉄瓶、斧他	71	穴川遺跡	散 布 地	円筒埴輪、土師器
19	土井古墳群	古 墓 群	方墳13基	74	南乞山古墳群	古 墓 群	方墳2基
20	大円寺上古墳群	古 墓 群	円墳2基	75	雨乞山遺跡	土師器	—
21	八雲内百塚山古墳群	古 墓 群	方墳47基	76	細田古墳群	古 墓 群	方墳2基確認
22	小屋谷古墳群	古 墓 群	方墳3基、消滅	77	松ノ井古墳	古 墓	方墳
23	大円寺遺跡	散 布 地	上師器	78	浜井扇遺跡	散 布 地	須恵器、土師器
24	人谷古墳群	古 墓 群	方墳2基、子持草	79	中山五輪塔群	古 墓	石塔、現位置移動
25	御崎谷遺跡	散 布 地	須恵器、上師器、埋没	80	宇波遺跡	住居跡他	須恵器、陶磁器、漆器
26	神納遺跡	散 布 地	須恵器、土師器	81	星谷数々輪塔群	古 墓	五輪塔
27	松廻遺跡	散 布 地	須恵器、土師器他	82	喜三郎谷横穴墓群	横穴墓群	8穴
28	神納横穴墓	横 穴 墓	—	83	浜井古墳群	古 墓 群	方墳10基確認
29	神納古墳群	古 墓 群	5基	84	喜井東横穴墓群	横 穴 墓	1穴開口
30	和田平横穴墓群	横穴墓群	3穴、埋没	85	喜井西横穴墓群	横穴墓群	11穴以上
31	岩海古墳群	古 墓 群	方墳1基、円墳1基	86	禪定寺遺跡	住 居 路	陶磁器、須恵器、石器
32	勝負谷古墳群	古 墓 群	方墳2基、円墳2基	87	青木谷遺跡	散 布 地	須恵器、上師器、勾玉
33	高丸古墳群	古 墓 群	円墳2基	88	折原上荒東遺跡	住 居 路	堅穴住居・掘立柱建物跡
34	山崎遺跡	散 布 地	須恵器	89	折原中荒北遺跡	散 布 地	須恵器
35	中山古墳群	古 墓 群	方墳5基	90	上元田遺跡	散 布 地	須恵器、土師器、黒曜石
36	谷ノ奥遺跡	古 墓 群	方墳2基、円墳1基	91	椎木谷遺跡	散 布 地	須恵器、土師器
37	北折原遺跡	古 墓 他	方墳1基、横穴2穴	96	増福寺横穴墓群	横穴墓群	2穴確認
38	安田古墳群	古 墓 群	円墳2基	97	前川遺跡	祭祀遺跡	自然河川跡、木製琴
39	舛輪谷横穴墓群	横穴墓群	12穴、刀	98	青木遺跡	住 居 路	堅穴住居・掘立柱建物跡
40	四歩市古墳群	古 墓 群	方墳6基	99	室山城跡	城 路	—
41	増福寺裏山古墳群	古 墓 群	方墳8基	100	折原中堤遺跡	住 居 路	堅穴住居跡、土師器
42	増福寺古墳群	古 墓 群	方墳26基	101	折原町遺跡	住 居 路	堅穴住居跡、弥生土器
43	原ノ前横穴墓群	横穴墓群	須恵器、鍍金	103	赤坂遺跡	散 布 地	須恵器、土師器
44	細田横穴墓群	横穴墓群	半人家形	104	中山遺跡	散 布 地	須恵器、土器
45	禪定寺横穴墓群	横穴墓群	6穴	105	宮谷遺跡	生業遺跡	製炎跡
46	禪定寺古墳群	古 墓 群	方墳10基	106	真ノ谷遺跡	住 居 路	加工段、落とし穴
47	折原横穴墓群	横穴墓群	3穴	107	反田遺跡	散 布 地	須恵器
48	折原下堤遺跡	散 布 地	須恵器、上師器	108	藏谷貴遺跡	散 布 地	土師器
49	人日堂横穴墓群	横穴墓群	4穴確認、須恵器	110	鶴唐遺跡	住居跡?	須恵器、磨製石斧

[註]

- 註1 「増補改訂鳥根県遺跡地図」I (出雲・隱岐編)鳥根県教育委員会発行1993年3月 (P-1)
- 註2 赤沢秀則「1.出土遺物・時期_『南構武草田遺跡 講武地区県営開拓整備事業発掘調査報告書5』」
1992年3月 鳥取県教育委員会 (P-1)
- 註3 谷ノ奥遺跡の北東150mの水田中に位置する現在の「毛社神社」に比定されている。 (P-3)

[参考文献]

- ・『空山遺跡発掘調査概報』 八雲村教育委員会 1972年3月
- ・『八雲村の遺跡』 八雲村教育委員会 1978年3月
- ・『土井13号墳発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 1979年3月
- ・『御崎谷遺跡_小塙谷古墳群発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 1981年3月
- ・『増福寺古墳群発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 1981年3月
- ・『増福寺古墳群発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 1982年3月
- ・『中山2号墳・中山五輪塔群』 八雲村教育委員会 1982年3月
- ・『折原上堤東遺跡発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 1994年3月
- ・『折原町遺跡終了報告』 八雲村教育委員会 1995年8月
- ・『古城遺跡発掘調査終了報告』 八雲村教育委員会 1995年2月
- ・『山崎遺跡_前田遺跡(第Ⅰ調査区)発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 1999年12月
- ・『青木遺跡第Ⅰ調査区終了報告』 八雲村教育委員会 1996年8月
- ・『谷の奥古墳群発掘調査終了報告』 八雲村教育委員会 1997年11月
- ・『真ノ谷遺跡発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 2000年3月
- ・『前田遺跡(第Ⅱ調査区)発掘調査報告書』 八雲村教育委員会 2001年3月
- ・『八雲村誌』 八 雲 村 1998年12月
- ・『石棺式石室の研究』 山溪考古学研究会 1987年10月
- ・『神々の国 悠久の遺産』-古代出雲文化展- 島根県教育委員会 1998年3月
- ・『北松江幹線新設工事・松江連絡幹線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(西の谷遺跡)
島根県教育委員会 1987年3月
- ・勝部 昭 「出雲・隱岐発見の青銅器」『古文化談叢8』 1981年
- ・宮本徳昭 「八雲村・叶ザコ遺跡出土の常滑窯」『松江考古 第8号』 松江考古学談話会 1992年12月

II 調査に至る経緯

一般国道432号線は、広島県竹原市の国道2号道路を起点とし、島根県能義郡広瀬町を経由して島根県松江市で国道9号線に接続する総延長208km(県内延長70km)の道路であり、中国縦貫自動車道に連絡する筋骨道路として沿線各地域の開発、産業、文化の交流を促進するために非常に重要な役割を果たしている。

特に、八雲村においては近年新興住宅地として人口が増加する中、地域の活性化を支える基幹道路として、この路線の重要性が増してきている。しかし、現状での国道432号は、自動車のすれ違いに支障をきたすような狭小な道路であり、かつ梅雨と秋の長雨時に土砂災害も多い。このため島根県松江土木建築事務所では、地形的な制約のある松江市、広瀬町に優先して八雲村東岩坂地内から口吉地内の約8.1km区間をバイパスで整備することになった。

この事業に先立ち、平成4年12月17日に松江土木建築事務所より島根県教育庁文化課(現在の文化財課)あてに、八雲村別所地区から口吉地区にかけての3.0km区間における埋蔵文化財の有無について照会があった。文化課より連絡を受けた八雲村教育委員会では、平成5年1月22日に合同で対象地の分布調査を実施した。

調査の結果、工事予定地内に周知の遺跡3カ所(安田古墳群1号墳・谷ノ奥古墳群・山崎遺跡)と、より詳細な試掘調査を必要とする地域4カ所(安田地区の水田・綱田古墳群東の山頂・外輪谷横穴墓群北の斜面・別所問夏堂跡)を確認した。

その後、遺跡保護のための協議がなされたが、計画変更は困難との結論に達し、平成6年度から八雲村教育委員会が主体となり発掘調査を行うこととなった。

当初、谷ノ奥古墳群の本調査は平成7年度事業として契約を締結し、平成7年5月31日より樹木の伐採作業や地形測量等の諸準備に取りかかっていた。しかし、事業者より工事の工程上、平成6年度末の試掘調査により新たに発見された前田遺跡の調査を優先的に実施して欲しいとの要望があり、谷ノ奥古墳群は平成9年度に先送りされることになった。

第2表 一般国道432号道路改良工事に伴う発掘調査作業年次工程表

道 路 名	発見の経緯	調 査 方 法						
		平成6年度	平成7年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度
安田古墳群1号墳	周知	本発掘調査			報告書作成			
外輪谷12号横穴墓	外輪谷横穴墓群北の斜面	試掘・本調査			報告書作成			
山 崎 道 路	周知		本発掘調査			報告書作成		
前田遺跡第1調査区	安田地区的水田試掘	試掘調査	本発掘調査			報告書作成		
前田遺跡第2調査区	安田地区的水田試掘	試掘調査	本発掘調査		遺物発掘作業	報告書作成		
谷 ノ 奥 遺 跡	周知		地形測量	試掘・本調査				報告書作成
古 谷 道 路	綱田古墳群東の山頂試掘			試掘・本調査	報告書作成			
別 所 真 夏 堂 跡	本調査							

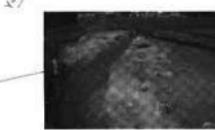


平成 7 年度調査
山崎遺跡

X=65.50
Y=85.50

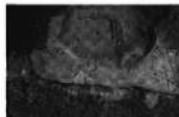


平成 7 年度調査
前田遺跡第 I 調査区



平成 7 年度調査
前田遺跡第 II 調査区

X=66.50
Y=85.50



平成 9 年度調査
谷ノ奥遺跡第 I 調査区

X=66.00
Y=85.50



平成 9 年度調査
前田遺跡第 II 調査区

X=66.00
Y=85.50



平成 9 年度調査
外輪谷横穴墓群12号穴

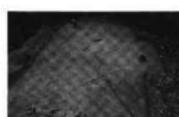
X=65.50
Y=85.50

平成 9 年度調査
谷ノ奥遺跡第 II 調査区



平成 6 年度調査
安田古墳群 1 号墳

X=66.50
Y=85.50



平成 10 年度調査
宮谷遺跡

X=65.50
Y=85.50

0 400m

第 3 図 一般国道 432 号道路改良工事予定地内の調査遺跡位置図（1 : 8,000）

III 調査の経過

平成9年度の調査は、斜面下の水田中から須恵器・土師器の細片が採取されることや、明治22(1889)年の『八雲村大字東岩坂切図』によると、調査予定地の小字名が「法正寺」であり、星上寺の末寺が置かれていたという口承が残る場所であることから、遺跡の範囲を確認する作業からはじめた。範囲確認調査は 2×5 mトレンチを丘陵斜面、及び水田中に任意に設定し、平成9年4月14日から掘削作業を開始した。必要が認められた場合は随時試掘トレンチを拡幅・増設し、最終的には国道工事予定地内80mの \times 間に9個のトレンチを設定した。

確認調査の結果、丘陵平坦面に設定したトレンチから五輪塔の部材や土師質土器を検出したほか、水田中に設定したトレンチからは遺存状態の良好な縄文土器が発見された。よって、それまで「谷ノ奥古墳群」と呼称していたものを「谷ノ奥遺跡」と遺跡の名称を改め、丘陵部を谷ノ奥遺跡第I調査区、丘陵下に広がる水田中を谷ノ奥遺跡第II調査区として同時に発掘調査を実施する事となった。しかし、実態としてI区は標高47.00~54.00mを測る斜面上にあり、II区は標高35.50~36.50mを測る水田中に位置し、遺跡の区域が分かれている。更に遺跡の内容も異なることから、報告書においては別個に取り扱うこととした。

第I区の調査は範囲確認調査の結果を基に調査区を決定し、グリッドの設定から行った。基準杭C-5杭(X=-6585.00; Y=8502.00)の上にトランシットを建て、D-5杭(X=-6585.00; Y=8503.00)を睨み直線を設け、これと直交するように 10×10 mの方眼を組み、北西の交点をグリッド名とした。次に、土層觀察用の畦を設定し、4月16日より掘削作業を開始した。随時遺構の精査・実測作業を行い、11月5日に全体写真と航空写真的撮影、11月6日に地形測量、11月16日に現地説明会を行いつての調査を終了した。なお、土坑内の埋土はすべて持ち帰り、11月5日から11月14日の間に水洗い作業を行った。

第II区の調査は4月22日に範囲確認調査が終了し、直ちに耕作土を重機により剥ぎ取った。次に、第I区と同様の方法でグリッドを設定し、掘削作業に取りかかった。6月12日に写真撮影と地形測量を行い調査を終了し、山頂部(古墳群)の調査に合流した。この後、6月13日に取り扱いの協議を兼ねて調査指導会を開催している。

第3表 平成9年度一般国道432号道路改良工事に伴う調査工程表

名 称	調査内容	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
谷ノ奥 遺 路	範囲確認調査	4/14~4/22											
谷ノ奥遺跡第I調査区	本 調 査						4/16~11/16						
谷ノ奥遺跡第II調査区	本 調 査			4/22~6/13									
谷ノ奥 遺 路	水洗い作業								11/5~11/14				



第Ⅰ調査区発掘作業風景



第Ⅱ調査区発掘作業風景



発掘調査参加者



土壤埋土の水洗い風景



現地説明会



現地説明会（遺物見学会）



現地説明会（発掘現場）



報告書作成作業風景

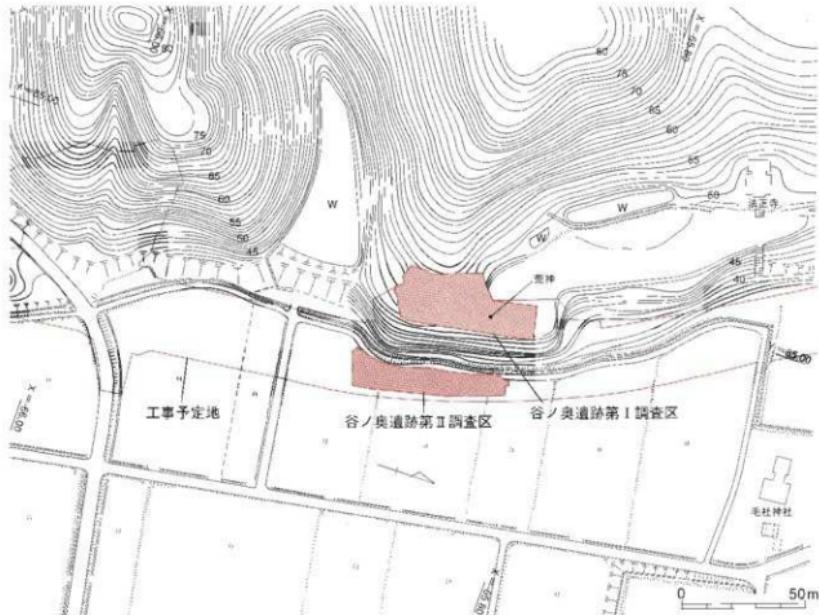
IV 第Ⅰ調査区

第1章 調査の経過と概要

谷ノ奥遺跡第Ⅰ調査区は、八雲村最大の早田平野に向かって舌状に突き出した尾根の東向き斜面に位置し、調査地で標高47.00m～54.00mを測る。

昭和52(1977)年度に村内の遺跡の分布調査を行い、主要遺跡についてその概要をまとめた「八雲村の遺跡」(八雲村教育委員会)によると、「1号墳は径5.5m、高さ0.5mの円墳で、北側が半壊している。2号墳は径5.5m、高さ0.5mの円墳である。3号墳は丘陵突端に位置し、一辺9.5m、高さ2mの方墳で、東側の一部が壊れている。」とあり、古墳群として周知されるようになった。また、明治22(1889)年の『八雲村大字東岩坂切図』によると、当地の小字名は法正寺であり、星上寺の末寺が置かれていたという口承も残る場所である。この法正寺は、『雲陽誌』や『寺院明細帳』に記載はなく、地名のみが残っている。

今回の第Ⅰ区の調査では、古墳4基の他に落とし穴3個(SK-01～03)、土壙墓21個(SK-04～24)、掘立柱建物跡(SB-01)1棟、杭列1列、性格不明遺構1個(SX-01)、溝3本(SD-01～03)、加工段2段(第1・第2加工段)と多数の土坑及びピットを検出した。この内、SD-01とSD-02は、旧土地所有者によると竹根の進入を防ぐために掘削した溝のことである。また、第2加工段は土の採掘場であったことから本文中の説明は割愛した。



第4図 谷ノ奥遺跡調査区配置図 (1:2,000)



第5図 遺構位置図 (1 : 250)

第2章 調査の結果

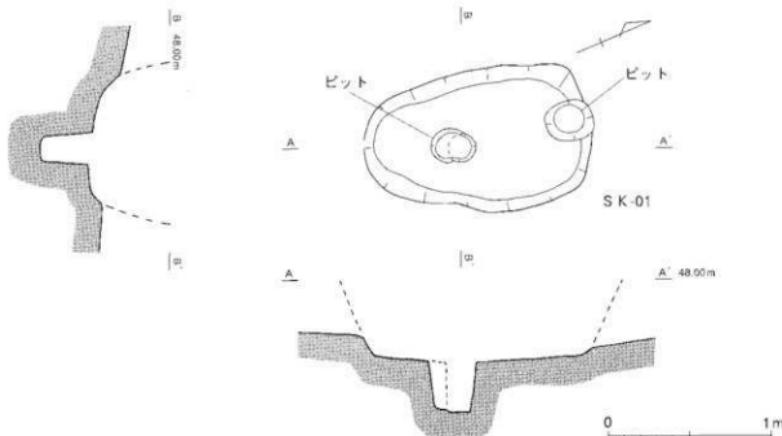
1節 落とし穴

土坑の底部中央付近にビットが掘られているものを落とし穴として取り扱った。第I調査区からは北側の斜面及び平坦面から3個が検出された。この平坦部は畑として開墾されていた場所で、土坑上面がかなり削られているものもある。時期は、遺物が出土していないため不明である。

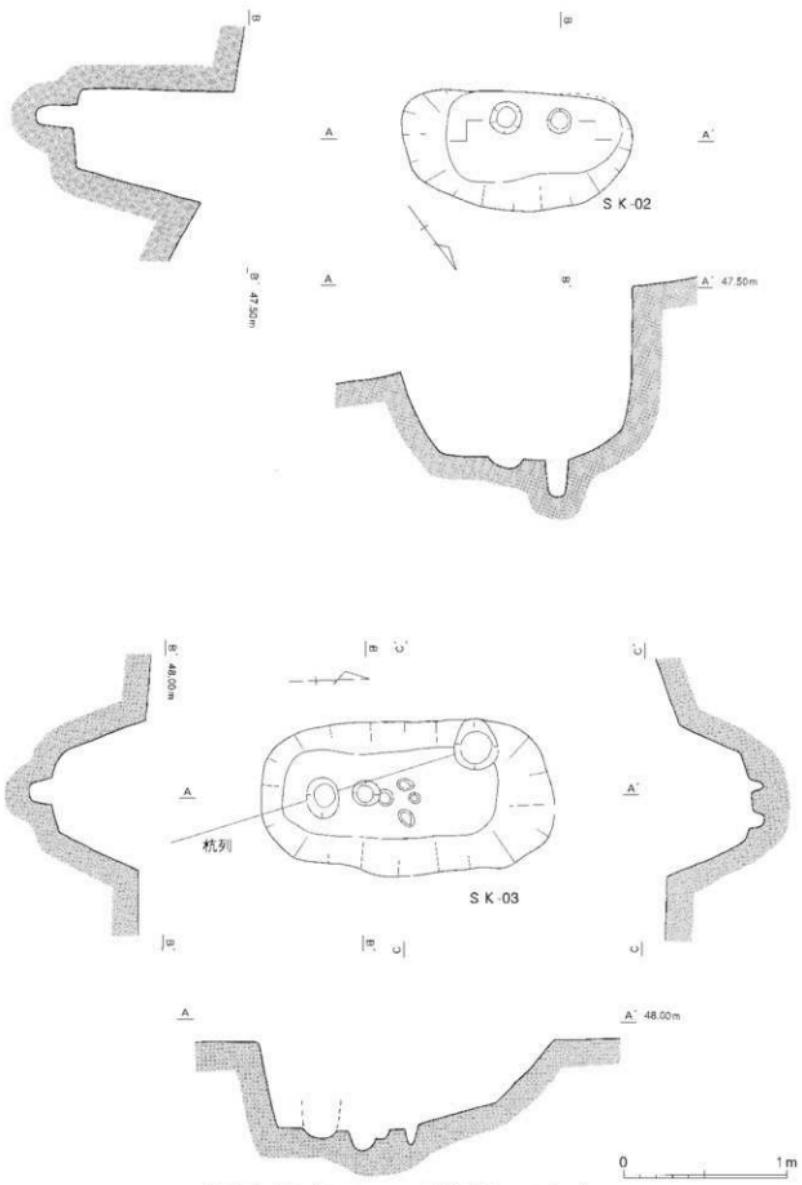
S K -01(第6図) C - 3区の平坦面から検出されたものであり、標高47.50~47.75mを測る場所に位置する。土坑上部は大部分が削られているようで、検出できた深さは最大20cmほどである。平面は不整橍円形を呈し、現状での規模は上縁長軸142.5cm、短軸88.5cmを測る。底面には直径18cm、深さ最大29.0cmのビットが掘られていた。この落とし穴は2個のビットと切り合っており、新旧関係はビット(新)-S K -01(古)である。

S K -02(第7図) C - 2区の東向き斜面から検出されたもので、標高46.75~47.50mを測る場所に位置する。平面は不整な橍円形を呈し、規模は上縁長軸139.5cm、短軸74.0cm、底面までの深さ最大104.3cmを測る。底面にはほぼ平坦で、直径20cm、深さ最大6.6cmと直径15cm、深さ最大24.7cmを測る2個のビットが掘られていた。壁面はおおむね平滑で、直立気味に立ち上がる。

S K -03(第7図) C - 3区の平坦面から検出されたもので、標高47.75~48.00mを測る場所に位置する。平面は隅丸長方形を呈し、現状での規模は上縁長軸177.5cm、短軸95.0cm、底面までの深さ最大55.8cmを測る。底面には直径18cm、深さ最大14.0cmのビットが1個と直径7~12.5cm、深さ最大8.4~13.2cmのやや小さなビット4個が掘られていた。ビットには切り合いか認められたが、新旧関係を捉えることはできなかった。拡張に伴いビットの位置をずらしたものか、2つの落とし穴が重なっている可能性が考えられる。この落とし穴は後述する杭列と切り合っており、新旧関係は杭列(新)-S K -03(古)である。底部中央付近に4個のビットをもつ落とし穴の類例として、八雲村青木遺跡第II調査区の落とし穴があげられる。



第6図 落とし穴 S K -01 実測図 (S = 1 / 30)

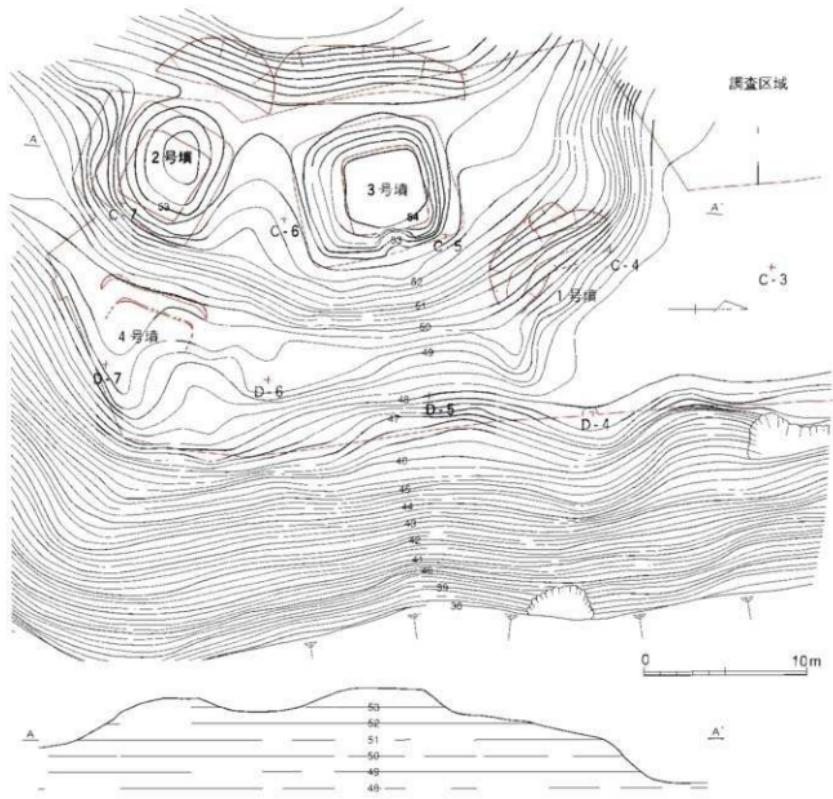


第7図 落し穴SK-02・03実測図 ($S = 1/30$)

第2節 古 墳

谷ノ奥古墳群は昭和52(1977)年度に実施された八雲村文化財悉皆調査事業による八雲村遺跡分布調査により発見され、3基の古墳として周知されるようになった。古墳は南北に伸びる丘陵の東向き斜面に位置し、東に広がる東岩坂の谷を見下すことができる。また、南西に星上山(『出雲国風土記』に記載されている荻山)、北北東に雨乞山を望む場所である。

1号墳は畠地の開墾により墳丘は完全に消滅していたため、遺跡分布調査に携わった東森市良氏のご教示により位置を特定することができた。周溝だけしか検出できなかつたが、分布調査記録によると円墳として報告されている。2号墳と3号墳は隣接し、2号墳は6.5×6.8mの方墳、3号墳は7.5×8.1mの方墳である。規模はさほど変わらないが、地山整形の状況は2号墳に比べると3号墳は非常に丁寧なものである。この他、2号墳の東側からは古墳時代の溝が検出された。中近世の古墓により削平を受け、主体部等は検出されていないことから性格不明と言わざるを得ないが、古墳周溝の可能性があることから4号墳としてここで取り扱った。



第8図 谷ノ奥1・2・3・4号墳調査前地形測量図 ($S = 1/300$)

1. 谷ノ奥1号墳 (第9・10図)

谷ノ奥1号墳は3号墳の北東側にあたるB-4・C-4区で検出されたものであり、標高48.75～51.50mを測る場所に位置する。畠地の開墾により墳丘及び埋葬施設(以後主体部と記す)は完全に消滅し、周溝だけしか検出されていない。

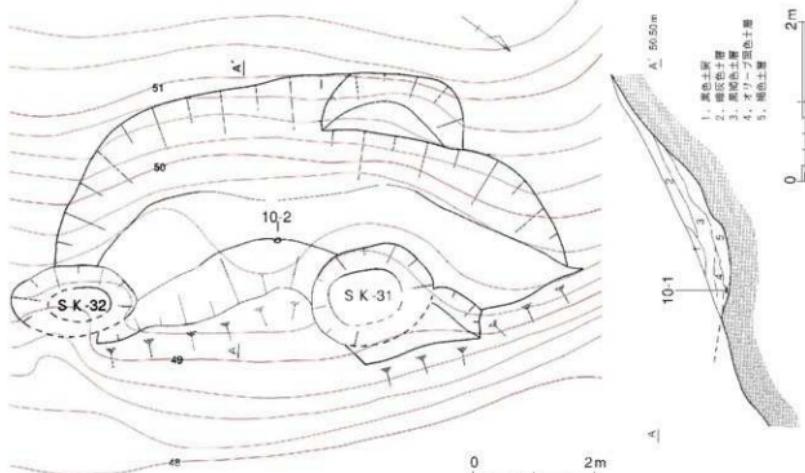
周溝は斜面上側にあたる南西部が半円形に削られている。規模は、長さ8.25m、高低差最大1.39m、周溝上端幅約3.42m、底部幅0.62～1.25mを測る。性格不明の土坑SK-31・32と切り合っており、新旧関係はSK-31・32(新)・谷ノ奥1号墳(古)である。

遺物としては周溝内より須恵器の破片5点と土師器の細片1点が出土した。

1号墳周溝内出土遺物(第10図) 出土した須恵器には壺身口縁部2点、壺蓋口縁部1点、蓋坏犬井部1点、壺底部1点があり、このうち実測可能な2点を掲載した。土師器は壺蓋類頸部の破片と考えられるが、細片のため実測できるものではなかった。

1は須恵器壺蓋である。天井部と口縁部の境の突帯は丸く鈍いものである。肥厚した口縁部をもち、内面の端部付近は段状に仕上げられている。調整は口縁部内外面とも回転ナデが施される。口径は12.5cmであり、時期は出雲1期のうち新しい段階に位置づけられるものである。

2は須恵器壺である。平坦な底部から内湾気味に立ち上がり、肩部は強く張り出す。調整は底部外側が回転ヘラケズリ、肩部外側はカキ目、その他には回転ナデが施されている。



第9図 谷ノ奥1号墳墳丘測量図(S=1/80)・土層図(S=1/60)



第10図 谷ノ奥1号墳周溝内出土須恵器実測図(S=1/3)

2. 谷ノ奥2号墳(第11～16図)

谷ノ奥2号墳は3号墳の南側に位置する古墳である。2号周溝と3号周溝には切り合いが認められ、新旧関係は2号周溝(新)－3号周溝(古)である。調査前には径8.0mの円墳と考えられていたが、調査の結果、方墳であることが判明した。

墳丘 山腹緩斜面に「コ」の字状の溝を掘削し、約8.0×7.5mの基底部を造り、その上に盛土が施されている。基底部はほぼ方形を呈するが、この縁辺部に盛土は施されておらず、墳丘と周溝の間に幅25～80cmのテラスが設けられた格好になっている。この基底部は丘陵斜面の傾斜と同様に北西側が高く、南東側が低くなっている。高低差は周溝底からテラス(基底部)までが15.0～54.8cm、テラスから墳頂部までが最大148cmを測る。

盛土は斜面下にあたる南東側が厚く、地山面から計測して約1.48m、斜面上にあたる北西側は約0.51mの厚さで盛られ、墳頂部での標高は53.50mを測る。盛土の最下層には黒褐色土層(第21層：いわゆるブラックバンド)があり、基底部と同様の傾斜で堆積しているが、それから上の層は水平になるように積まれている。墳丘の規模は南西－北東6.5m、南東－北西6.8mである。また、墳頂部には4.3×4.5mを測る平坦面があり、主体部が1基検出された。

墳丘内の出土品としては黒褐色土層(ブラックバンド)上面から平面台形を呈する平たい自然石1個が検出された。位置的には主体部の真下にあたる場所であるが、意図的に置かれたものかは定かでない。石は下底34cm、上底13cm、高さ20cm、厚さ6cmを測るものである。

周溝 周溝は北側で検出された。しかし、斜面下となる南東側では認められなかった。また、調査区分となるが、北西側の斜面に明瞭な加工斜面があることから、「コ」の字状に廻っていると考えられる。規模は上端幅4.04～4.08m、底幅1.15～1.72mを測り、周溝底のレベルは東側(斜面下側)に向かうほど低くなっている。周溝内からは、須恵器蓋坏・高坏、上師器高坏、鉄器、卡磨砾石が出土している。須恵器と上師器については縞片のため実測できなかった。

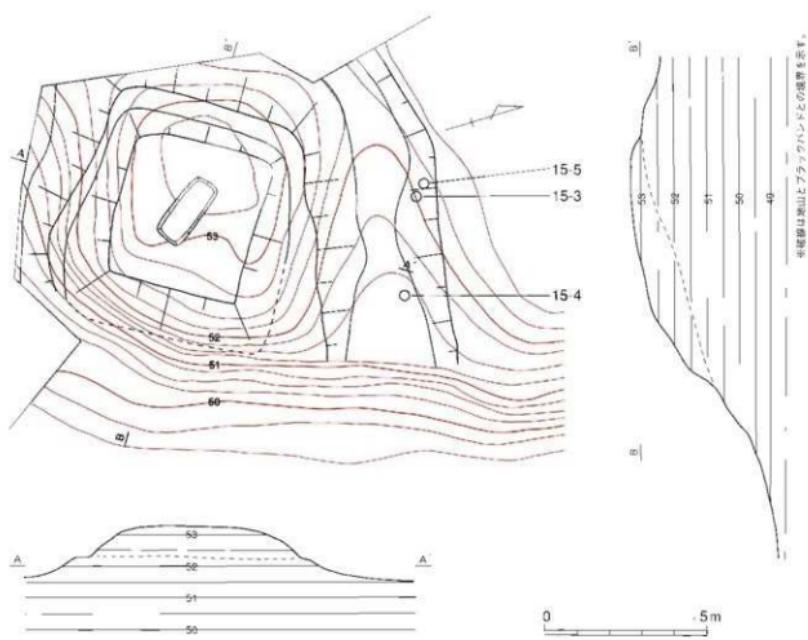
主体部(第14図) 墳頂部平坦面のほぼ中心に主体部があり、木棺直葬と考えられる。その主軸はN-36°-Wで、ほぼ古墳の対角線上にある。平面形は長方形を呈し、規模は長さ2.28m、幅0.89m、検出面からの深さ最大40.5cmを測る。主体部出土遺物には、須恵器壺、鉄製刀子、泥岩製白玉がある。須恵器壺は主体部検出面からつぶれた状態で検出された。また、刀子は土壌底部から約2cmほど浮いた位置(第14図・第7層)から出土しており、白玉も同様の第7層から発見された。



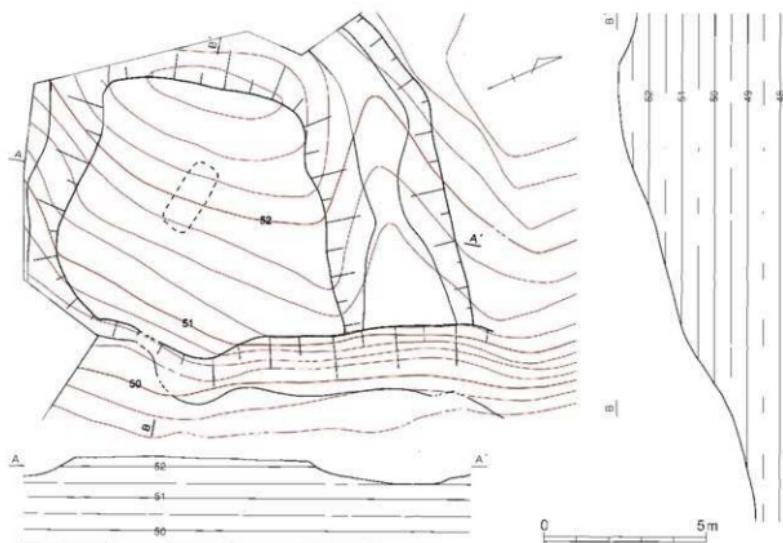
谷ノ奥2号墳主体部検出状況



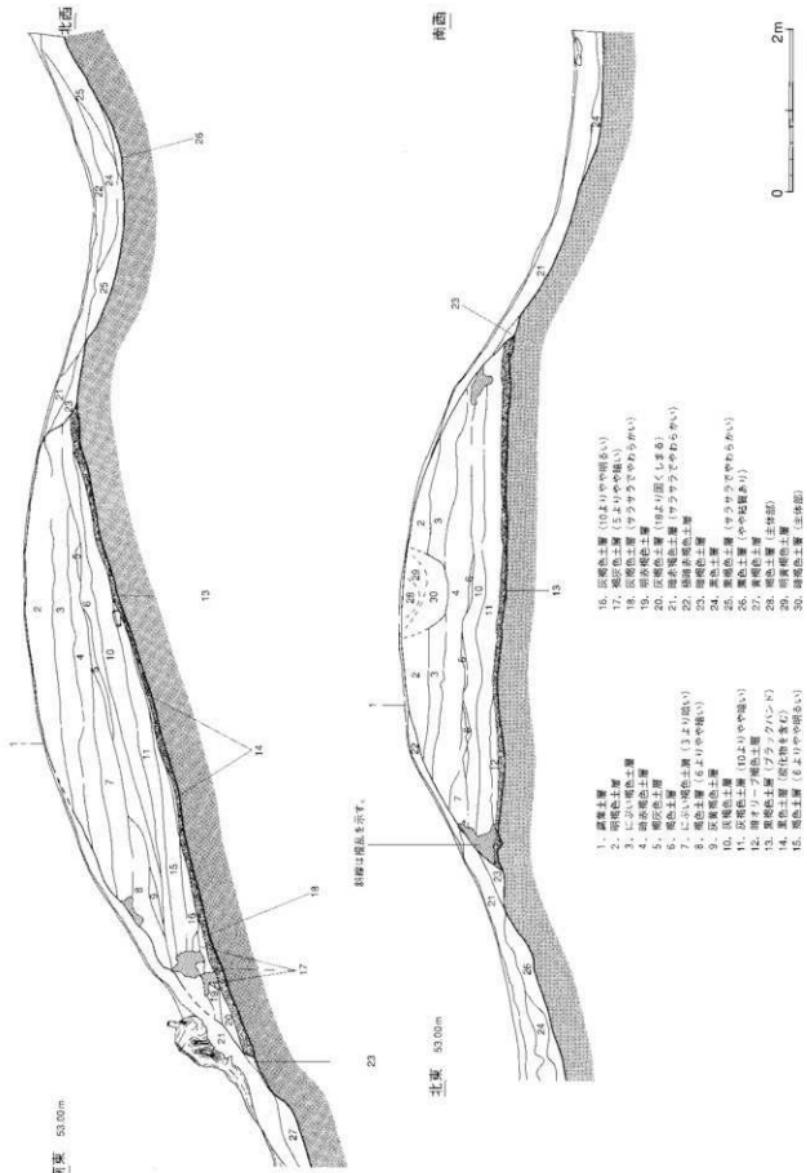
ブラックバンド上面から出土した自然石



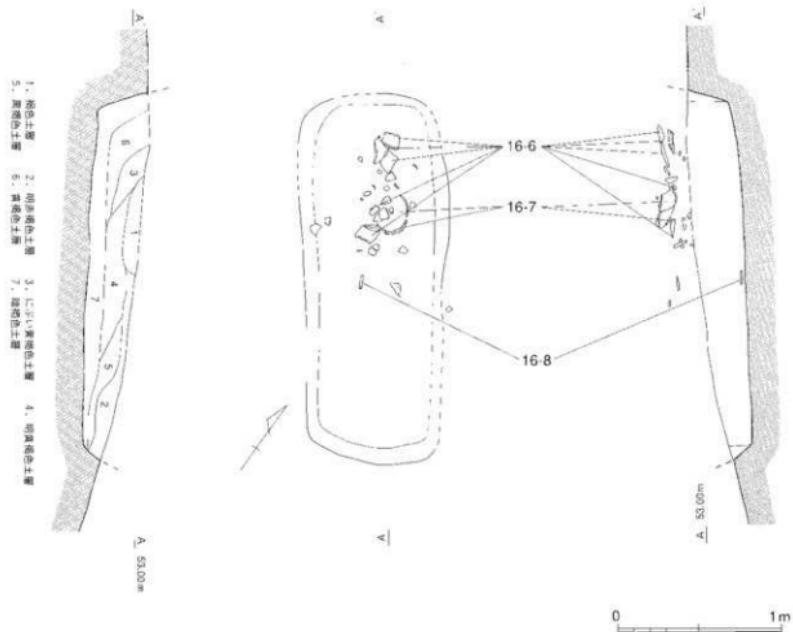
第11図 谷ノ奥 2号填墳丘測量区 ($S = 1/150$)



第12図 谷ノ奥 2号填盛土除去後填墳丘測量区 ($S = 1/150$)



第13図 谷ノ奥2号填埋丘土層図 ($S = 1/60$)



第14図 谷ノ奥2号墳主体部実測図 ($S = 1/30$)

2号墳周溝内出土遺物(第15図) 3は袋状鉄斧である。平面形は縦長方形を呈し、全長10.3cm、刃部幅4.2cm、刃部の厚さ1.4cmを測る。刃部は直刃で、袋部は断面が隅丸長方形の筒状を呈し、翼部分を丸く折り曲げて形成されている。柄などの有機質の痕跡は認められなかった。

4は性格不明の板状の鉄製品である。長さ14.1cm、幅3.2cm、厚さ0.4cm、重量56.7gを測る。

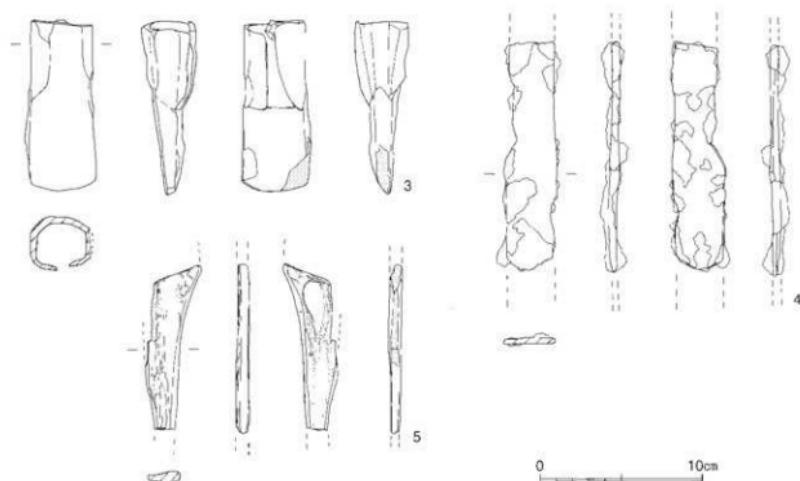
5は板状の玉磨砥石である。長軸4面が利用され、特に両側辺は使用による摩滅が著しい。表面は丸みを帯び、非常に滑らかになっている。残存長10.2cm、幅2.4cm、厚さ0.8cmを測る。石材は結晶片岩製であり、一部に赤紫色を呈する部分が観察できる。

2号墳主体部出土遺物(第16図) 6は須恵器壺口縁部の破片である。丸みをもつ肩部より口縁が直角に近く立ち上がり、端部付近で大きく聞く。端部は肥厚され、先端は上方に引き出され先細りとなる。頸部は2条1組の沈線により3等分に区画され、区両面は波状文により飾られている。

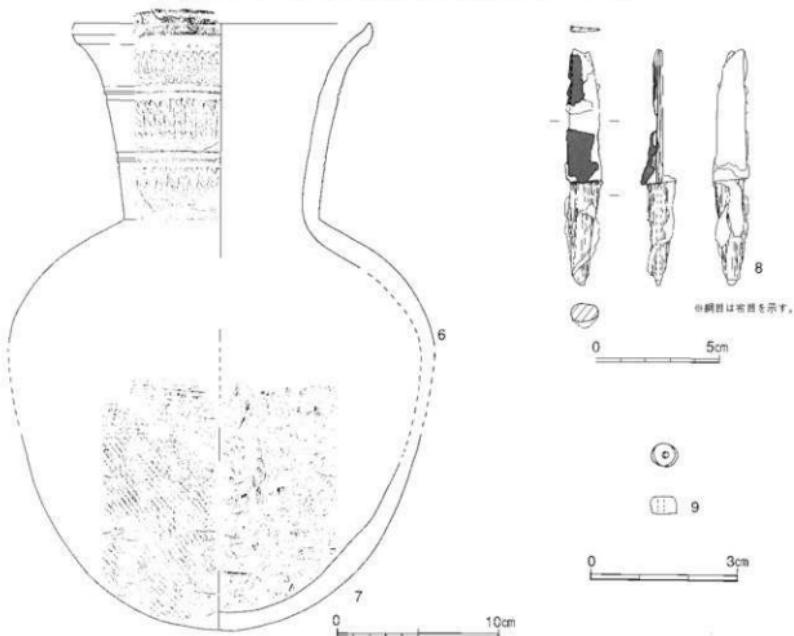
7は須恵器底部の破片である。胎土・色調・出土地点などから6の底部と考えられる。丸底の底部をもち、調整は外面がタタキ、内面には同心円の当て具痕が施される。

8は刀子である。刀身部は長さ5.3cm、幅1.2cmを測り、断面三角形を呈する。布に巻かれていたようで、所々に布目が残存する。茎部は長さ4.2cmであり、全面に木質が残る。

9は白玉である。最大径5.62mm、厚さ3.32mmを測るものであり、中央には1.25mmの孔が開けられている。石材は灰色を呈する泥岩製である。



第15図 谷ノ奥2号墳周溝内出土遺物実測図 (S = 1 / 3)



第16図 谷ノ奥2号墳主体部出土遺物実測図 (須恵器 1 / 3・刀子 1 / 2・臼玉 1 / 1)

3. 谷ノ奥3号墳(第17図～第24図)

谷ノ奥3号墳は調査区の最高所に位置し、墳頂部で標高54.00mを測る。前述したように2号周溝と切り合い関係にあり、2号周溝(新) - 3号周溝(古)である。墳頂部中央には後述する土壙墓(第59図SK-24)が掘られている。また、墳丘東側には横方向の穴が開けられ、一部が崩壊していた。

墳丘 山腹緩斜面に「コ」の字状の溝を掘削して長方形の基底部を造り、その西、南、北側三辺の縁辺部を0.5～1.0mの幅で削り、「コ」の字状にテラスが設けられている。削り残された中央部分は方形を呈し、墳状に仕上げられている。盛土はこの中央方形壇上に積まれ、墳丘が築造されている。この方形壇上面は丘陵斜面と同じ傾斜をもち、西側が高く、東側が低くなっている。高低差は周溝底からテラスまでが最大で43.0cm、テラスから方形壇上面までが最大で52.0cmを測る。

盛土は斜面下にあたる東側が厚く、地山面から計測して約1.54m、斜面上の西側は約0.8mの厚さで積まれている。基本的な層位は地山上に黒褐色土層(第21層:ブラックバンド)が方形壇上面の全面にあり、地山と同様の傾斜で堆積しているが、それから上の層は水平になるように積まれている。

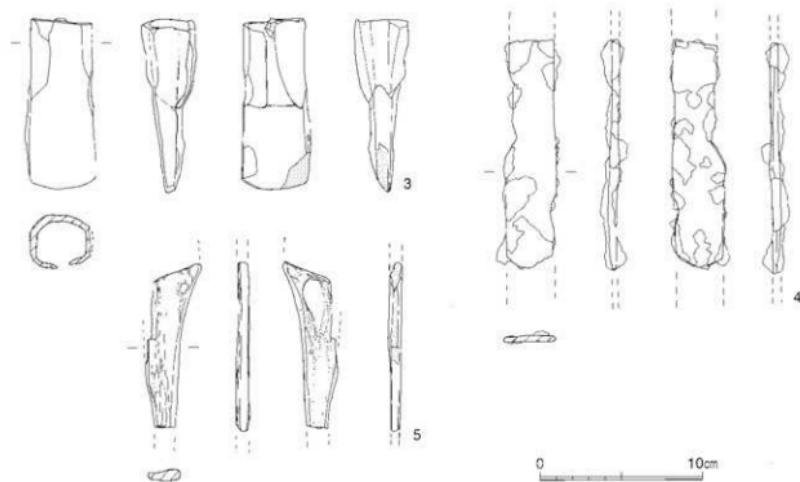
墳丘東側の斜面には地山まで達していない浅い溝が黒褐色土層上面から掘り込まれていた。この溝は墳丘西側と平行に走り、南北の樹とほぼ直交する位置関係にある。土層観察からもこの溝が墳丘東側にあたることから、周溝或いは、墳丘を築造する際の日安のようなものとして掘削されたものと思われる。墳丘の規模は南-北8.1m、東-西7.5mである。また、墳頂部には4.8×4.7mの平坦面があり、2つの主体部が検出された。

周溝 周溝は四方に廻っていた。この内、南・北・西側で検出された溝は「コ」の字状に廻るものであり、検出面での規模は上端幅2.19～2.52m、底幅0.33～1.04mを測る。周溝底のレベルは東側(斜面下側)に向かうほど低くなっている。遺物としては須恵器蓋坏、土師器高坏、鉄器が出土している。一方、東側の溝は南・北・西側の溝とは繋がっておらず、独立したものであった。規模は長さ7.68m、幅20～30cm、深さ最大20.2cmを測り、掘削が地山まで達していない浅いものである。周溝とは別の用途を考えるべきかもしれない。

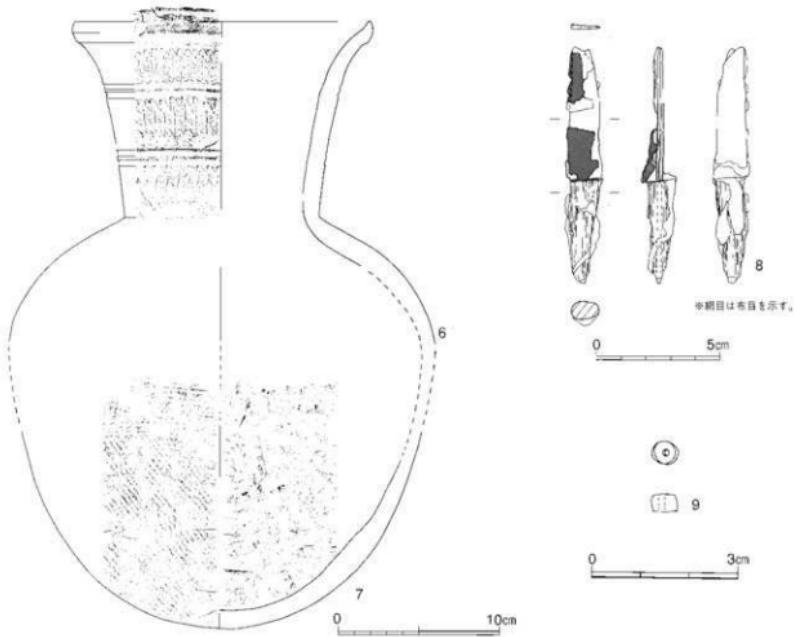
主体部(第20図) 墳丘頂部の半周面からは2つの古墳主体部の他に、中・近世の墓塚(第59図SK-24)を検出している。このため、表層はかなり攪乱を受け主体部の検出は困難を極めた。当初、SK-24の東西に平行して伸びる2本の溝があり、中・近世墓の関連施設と考え主体部の精査を進めていた。土層観察からこの溝が古墳主体部の木棺の落ち込みによってできたものと判ったときには、掘削は主体部の底部まで達していた。2つの主体部はほぼ南北方向を主軸として平行に配置され、両者の距離は主軸間で1.52mを測る。第20図では主体部の落ち込みにより堆積した黒色土層の範囲を点線で、主体部の推定範囲を破線で表した。

A. 第1主体部(第20図) 第1主体部は墳頂半周面の西側に位置し、木棺直葬と考えられる。主軸は、棺材の落ち込みによって堆積した黒色土層及びセクションから推定するとN-5°-Wで、ほぼ南北方向である。墓塚の規模は、長さ2.62m以上、幅0.98m、検出面からの深さ最大39.3cmを測る。遺物としては鉄鏃2点が出土した。

B. 第2主体部(第20図) 第1主体部の東側に位置し、木棺直葬と考えられる。その主軸は棺材の落ち込みによって堆積した黒色土層から推定するとN-6°-Wで、ほぼ第1主体部と平行である。墓塚の規模は、長さ2.6m以上、幅0.68m以上、検出面からの深さ最大30.0cmを測る。出土遺物には刀子、ガラス製小玉、水晶製管状がある。



第15図 谷ノ奥2号墳周溝内出土遺物実測図 (S=1/3)



第16図 谷ノ奥2号墳主体部出土遺物実測図 (須恵器1/3・刀子1/2・臼玉1/1)

3. 谷ノ奥3号墳(第17図～第24図)

谷ノ奥3号墳は調査区の最高所に位置し、墳頂部で標高54.00mを測る。前述したように2号周溝と切り合い関係にあり、2号周溝(新) - 3号周溝(古)である。墳頂部中央には後述する土壙墓(第59図SK-24)が掘られている。また、墳丘東側には横方向の穴が開けられ、一部が崩壊していた。

墳丘 山腹緩斜面に「コ」の字状の溝を掘削して長方形の基底部を造り、その西、南、北側三辺の縁辺部を0.5～1.0mの幅で削り、「コ」の字状にテラスが設けられている。削り残された中央部分は方形を呈し、壇状に仕上げられている。盛土はこの中央方形壇上に積まれ、墳丘が築造されている。この方形壇上面は丘陵斜面と同じ傾斜をもち、西側が高く、東側が低くなっている。高低差は周溝底からテラスまでが最大で43.0cm、テラスから方形壇上面までが最大で52.0cmを測る。

盛土は斜面下にあたる東側が厚く、地山面から計測して約1.54m、斜面上の西側は約0.8mの厚さで積まれている。基本的な層位は地山上に黒褐色土層(第21層:ブラックバンド)が方形壇上面の全面にあり、地山と同様の傾斜で堆積しているが、それから上の層は水平になるよう積まれている。

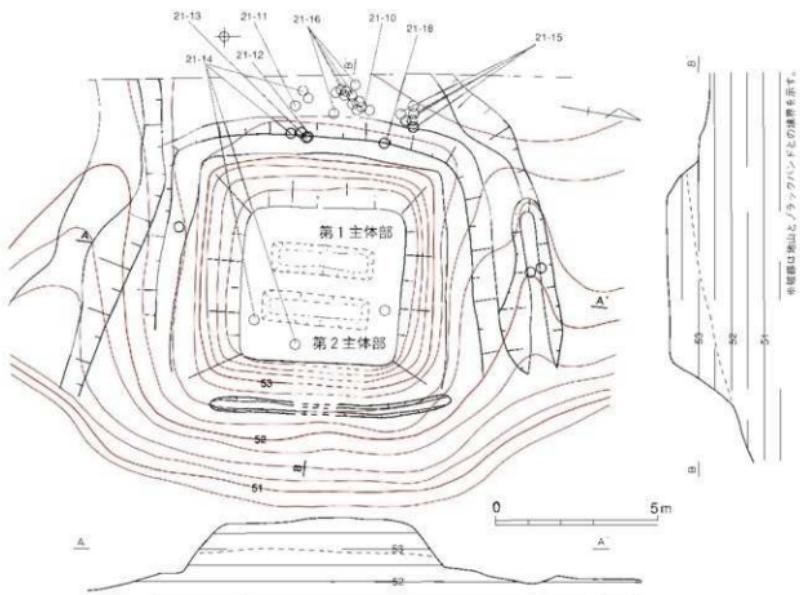
墳丘東側の斜面には地山まで達していない浅い溝が黒褐色土層上面から掘り込まれていた。この溝は墳丘西側と平行に走り、南北の樹とほぼ直交する位置関係にある。土層観察からもこの溝が墳丘東側にあたることから、周溝或いは、墳丘を築造する際の日安のようなものとして掘削されたものと思われる。墳丘の規模は南-北8.1m、東-西7.5mである。また、墳頂部には4.8×4.7mの平坦面があり、2つの主体部が検出された。

周溝 周溝は四方に廻っていた。この内、南・北・西側で検出された溝は「コ」の字状に廻るものであり、検出面での規模は上端幅2.19～2.52m、底幅0.33～1.04mを測る。周溝底のレベルは東側(斜面下側)に向かうほど低くなっている。遺物としては須恵器蓋坏、土師器高坏、鉄器が出土している。一方、東側の溝は南・北・西側の溝とは繋がっておらず、独立したものであった。規模は長さ7.68m、幅20～30cm、深さ最大20.2cmを測り、掘削が地山まで達していない浅いものである。周溝とは別の用途を考えるべきかもしれない。

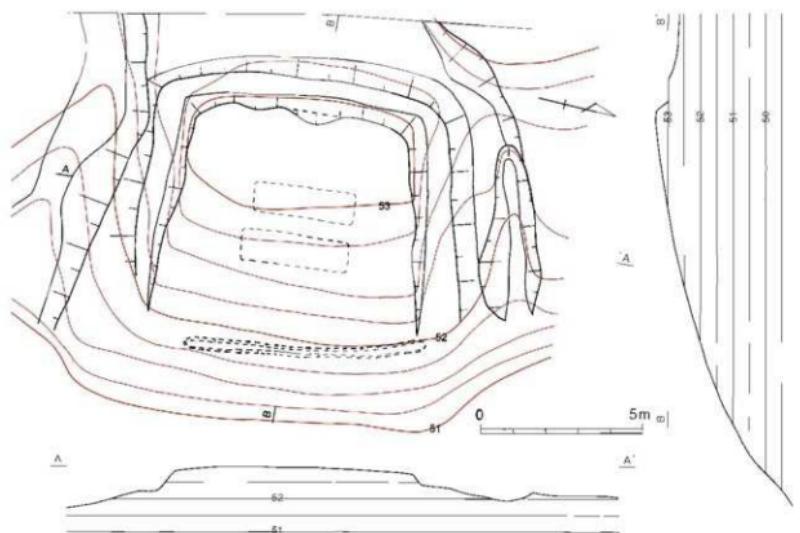
主体部(第20図) 墳丘頂部の平坦面からは2つの古墳主体部の他に、中・近世の墓壙(第59図SK-24)を検出している。このため、表層はかなり擾乱を受け主体部の検出は困難を極めた。当初、SK-24の東西に平行して伸びる2本の溝があり、中・近世墓の関連施設と考え主体部の精査を進めていた。土層観察からこの溝が古墳主体部の木棺の落ち込みによってできたものと判ったときには、掘削は主体部の底部まで達していた。2つの主体部はほぼ南北方向を主軸として平行に配置され、両者の距離は主軸間で1.52mを測る。第20図では主体部の落ち込みにより堆積した黒色土層の範囲を点線で、主体部の推定範囲を破線で表した。

A. 第1主体部(第20図) 第1主体部は墳頂平坦面の西側に位置し、木棺直葬と考えられる。主軸は、棺材の落ち込みによって堆積した黒色土層及びセクションから推定するとN-5°-Wで、ほぼ南北方向である。墓壙の規模は、長さ2.62m以上、幅0.98m、検出面からの深さ最大39.3cmを測る。遺物としては鉄鏃2点が出土した。

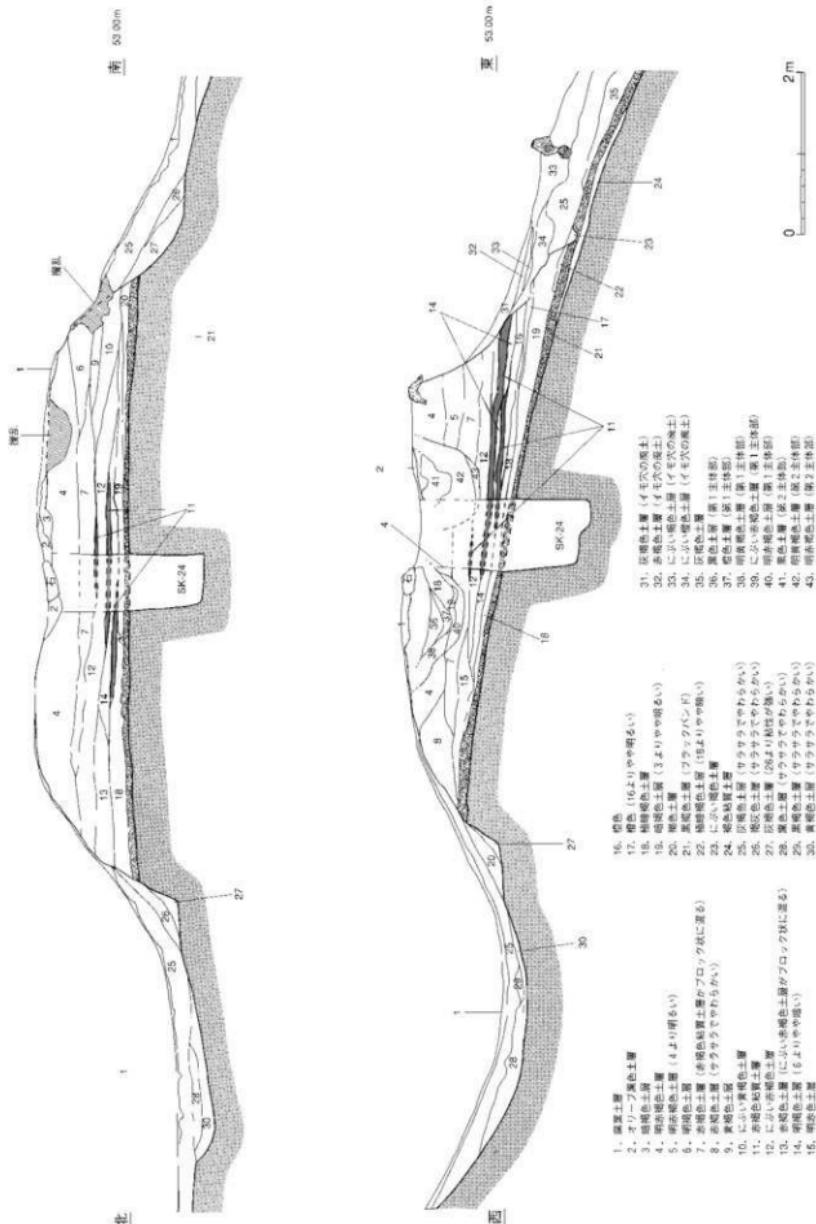
B. 第2主体部(第20図) 第1主体部の東側に位置し、木棺直葬と考えられる。その主軸は棺材の落ち込みによって堆積した黒色土層から推定するとN-6°-Wで、ほぼ第1主体部と平行である。墓壙の規模は、長さ2.6m以上、幅0.68m以上、検出面からの深さ最大30.0cmを測る。出土遺物には刀子、ガラス製小玉、水晶製管状がある。



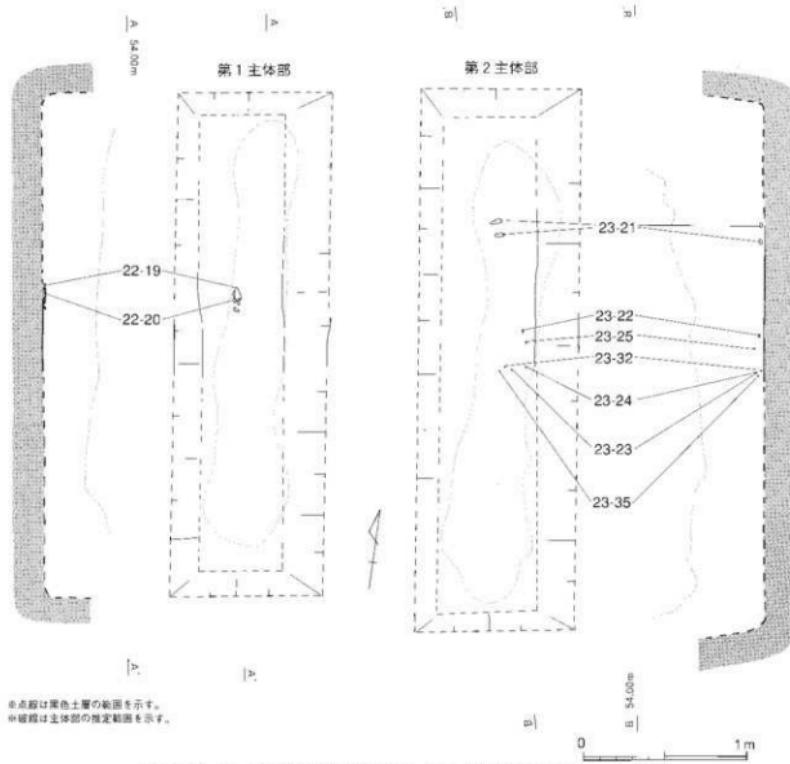
第17図 谷ノ奥3号墳墳丘測量図 ($S = 1 / 150$)



第18図 谷ノ奥3号墳盛土除去後墳丘測量図 ($S = 1 / 150$)



第19図 谷ノ奥3号填填丘土層図 (S=1/60)



第20図 谷ノ奥3号墳第1主体部・第2主体部実測図 ($S = 1/30$)

3号墳周溝内出土遺物(第21図) 10~13は土師器高坏である。10は口縁部と坏底部との境に段をもち、斜上方に立ち上がる口縁は端部でやや外反する。口径17.8cmを測る。11~13は胎土・色調・出土地点などから同一個体と考えられる。口縁は10と同様の形態をもち、脚部は筒部より端部に向かって「八」の字状に大きく開き、脚部内面の接合部に球面状の突起をもつものである。外面と坏部内面には赤色顔料が塗布されている。法量は口径18.0cm、底径9.5cmを測る。

14~17は須恵器蓋坏である。西側の周溝内及び墳頂部から細かい破片の状態で出土した。14~15は蓋坏である。口縁端部内面に段をもつが、天井部と口縁部の境の突帯は鈍い。14は口径12.2cm・器高5.5cm、15は口径12.7cm・器高5.6cmを測る。時期は出雲1期のうち、新しい段階に位置づけられるものと考える。16~17は坏身である。口縁端部内面に段をもち、底部外面には丁寧な回転ヘラケズギが施されている。16は口径11.0cm・器高5.5cm、17は口径11.8cmを測る。

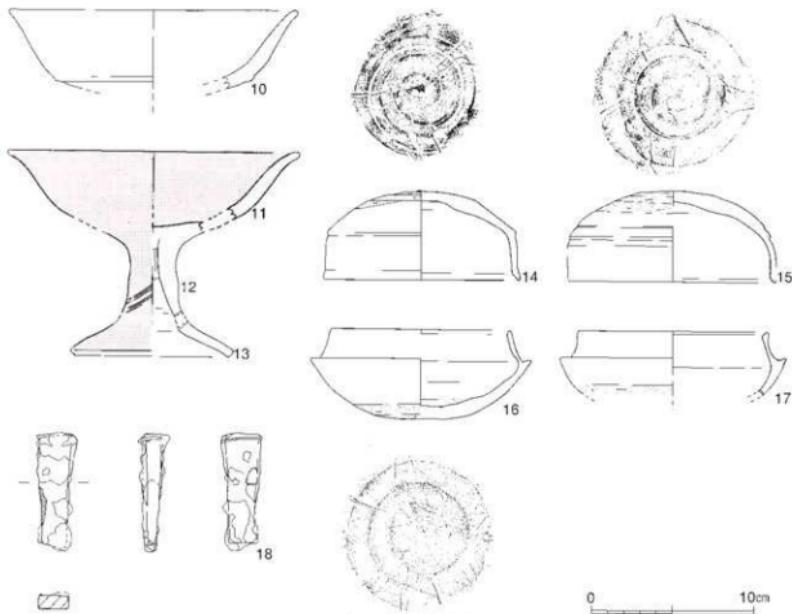
18は平面長方形を呈する不明鉄製品である。やや幅広の頭部をもち、先端に行くに従い徐々に幅と厚みを減じる。法量は長さ7.3cm、幅1.7~2.4cm、厚さ0.7~1.3cm、重量57.4gを測る。

3号墳第1主体部出土遺物(第22図) 19・20は逆刺のついた平根式の鉄鎌である。2つが鏃により固定した状態で検出された。布にくるまれていたようで、一部に布目が残っている。19は幅広い扁平な身に横断面長方形を呈する範被がつき、棘状突起を経て茎が続くものである。左右に逆刺をもち、片面の逆刺の根本部分には身まで達する切り込みが入る。先端は鋭い角度をとっておらず、緩いカーブを描く。身の長さ8.6cm、身幅3.9cm、厚さ0.9cmを測る。20は19と同様の形態をもつものであるが、身の長さ6.6cm、身幅3.0cm、厚さ0.6cmを測るやや小さなものである。

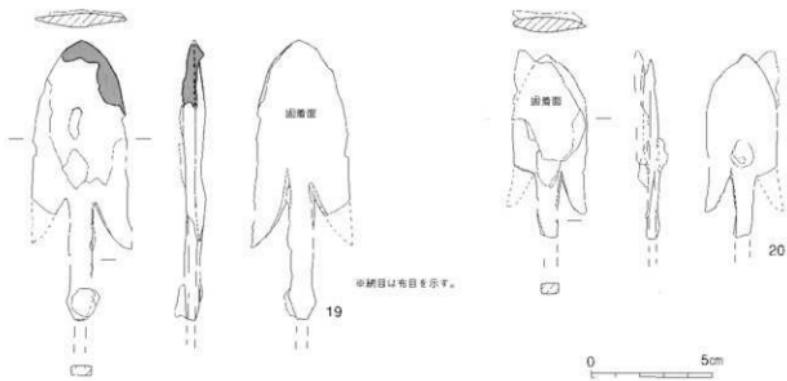
3号墳第2主体部出土遺物(第23図) 21は切っ先に強い返りをもつ刀子である。布にくるまれていたようで、刀身部の所々に布目が残存する。柄部分には木質が良く残っているため、茎の形態は不明である。法量は刀身部の長さ8.75cm・幅1.8cm、茎部の長さ4.85cmを測る。

22は無色透明の水晶製管玉である。径8.3mm、長さ16.32mmを測る円筒形を呈し、中央には片面穿孔により開けられた直径0.95～2.7mmを測る孔をもつ。

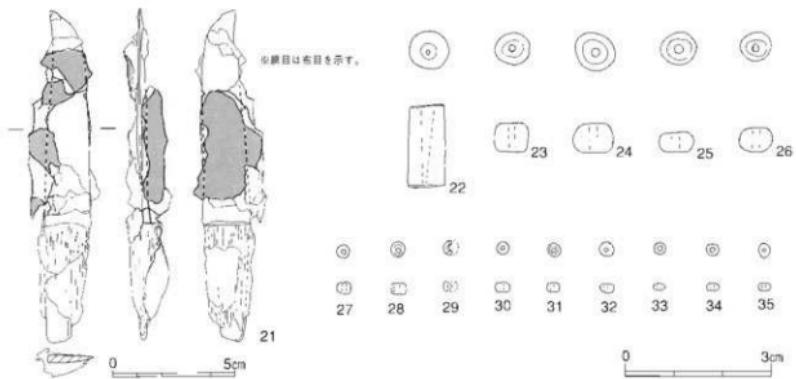
23～35はガラス製小豆である。23～26はやや径の大きなものであり、平面形及び孔の形が正円形ではなく丸である。下面は平坦で側面は曲線を呈し、色調は濃いめの藍色でやや不透明である。最大径6.17～8.31mm、最大厚4.18～5.85mm、重量0.26～0.55gの中に分布する。27～35は最大径2.42～3.00mm、最大厚1.39～2.50mmの中に分布する非常に小さなものである。33～35などは個別に重量を計測することができず、3個で0.01gを測る。孔は円形を呈し、色調は個体差があるが透明感のある水色か藍色である。これらは更に厚さがあり側面が平坦なもの(27～29)と、厚みがなく側面が丸みを帯びるもの(30～35)に細分することもできる。



第21図 谷ノ奥3号墳周溝内出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

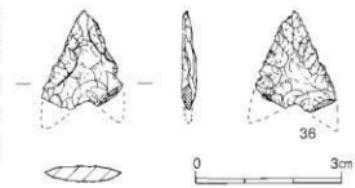


第22図 谷ノ奥3号墳第1主体部出土遺物実測図 ($S = 1/2$)



第23図 谷ノ奥3号墳第2主体部出土遺物実測図 刀子 ($S = 1/2$)・玉類 ($S = 1/1$)

埴丘盛土内出土遺物 (第24図) 36は第21層黒褐色土層 (ブラックバンド)より出土した石鏡である。両足を欠損しているが、凹基無莖式のものであり、縁辺には比較的丁寧な二次加工が施されている。現状で長さ2.1cm、幅1.6cm、厚さ0.25cm、重量0.8gを測る。石材は黒曜石である。



第24図 墓丘盛土内出土遺物実測図 ($S = 1/1$)

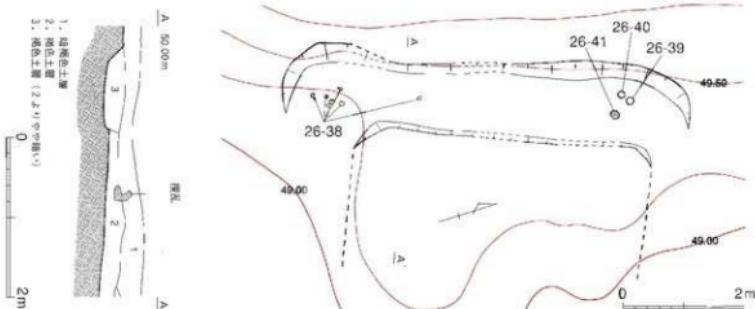
4. 谷ノ奥4号墳 (第25・26図)

谷ノ奥4号墳は2号墳の東側に位置し、検出面での標高は約49.50mを測る。中・近世の土壙墓により墳丘及び主体部は完全に消滅し、周溝と思われる構だけしか検出されていない。規模は長さ6.72m、幅1.62m、検出面からの深さ最大28.1cmを測る。遺物としては須恵器壊蓋と土師器壺・高壺が出土した。このうち第26図39と40の壊蓋については穴地が逆さまの状態で検出されている。

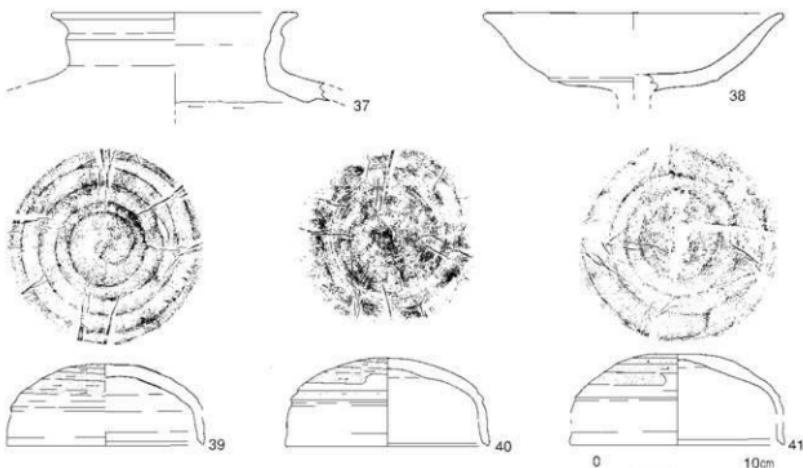
4号墳周溝内出土遺物(第26図) 37は退化した複合口縁をもつ土師器の甕である。直立気味に立ち上った口縁は端部近くで横方向に伸び半坦な面を造る。調整は口縁部内外面がヨコナデ、内面頭部以下にヘラケズリが施される。口径15.2cmを測る。

38は口縁部と坏底部との境に段をもつ土師器坏壺である。斜上方に立ち上がる口縁は端部でやや外反する。調整は内外面ともにヨコナデが施される。口径18.5cmを測る。

39~41は口縁端部内面に段をもつ須恵器坏蓋であり、全体に丸みを帯びたプロポーションを持つ。39は強いナデにより稜を表現し、天井部には均一で丁寧な回転ヘラケズリが施される。口径12.0cm、器高5.0cmを測る。40は沈線により稜を表現し、天井部には均一で丁寧な回転ヘラケズリが施される。口径12.5cm、器高5.5cmを測る。41はナデにより稜を表現し、天井部には比較的丁寧な回転ヘラケズリが施される。色調は灰白色を呈し、焼成は甘い。口径13.0cm、器高5.6cmを測る。これら類惠器の時期は出雲1期のうち、新しい段階に位置づけられるものと考える。



第25図 谷ノ奥4号墳埴丘測量図(S=1/80)・土層図(S=1/60)



第26図 谷ノ奥4号墳周溝内出土遺物実測図(S=1/3)

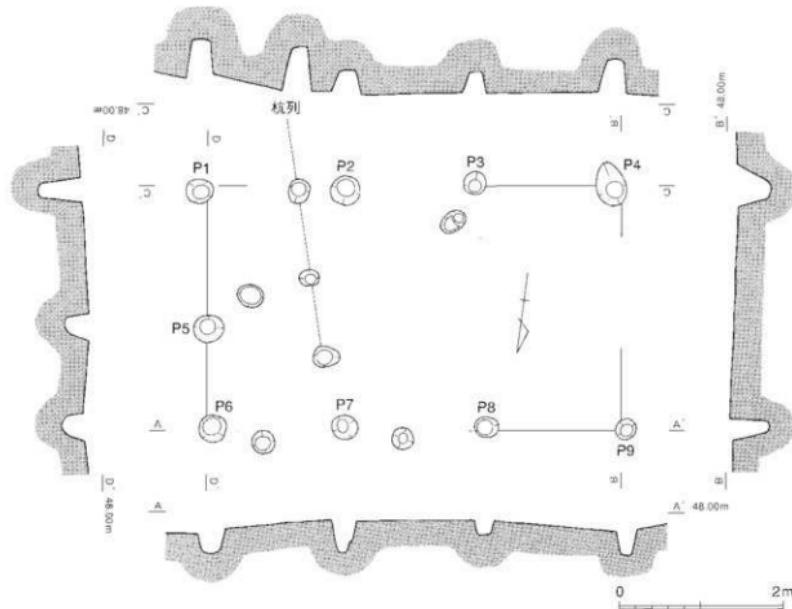
3 節 堀立柱建物跡

S B -01 (第27図)

C - 3 区の平坦面から検出された短辺 2.85m、長辺 5.03m を測る堀立柱建物跡である。この平坦部は後世の開墾により削られているため、かなり浅いピットもみられた。ピットの現状での規模は上縁径 24.0 ~ 54.0 cm、深さ 19.1 ~ 53.3 cm で、検出面の標高は 47.50 ~ 48.00m を測る。

出土遺物としては、P 1 内より中国製青磁碗口縁部の破片が 1 点出土している。一直線に並んだ杭列と切り合ひ関係が認められたが、両者の新旧関係は不明である。

S B -01 出土遺物 (第28図) 42 は中国産の青磁碗である。内湾気味に立ち上がる体部をもち、口縁部は外反する。磁器土は精選され緻密で黒い微砂粒を含み、釉調はオリーブ灰色のいわゆる青磁色を呈する。時期は 15 世紀頃のものと考えられる。



第27図 第I 調査区堀立柱建物跡実測図 (S = 1 / 60)



第28図 堀立柱建物跡出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

4節 中・近世墓

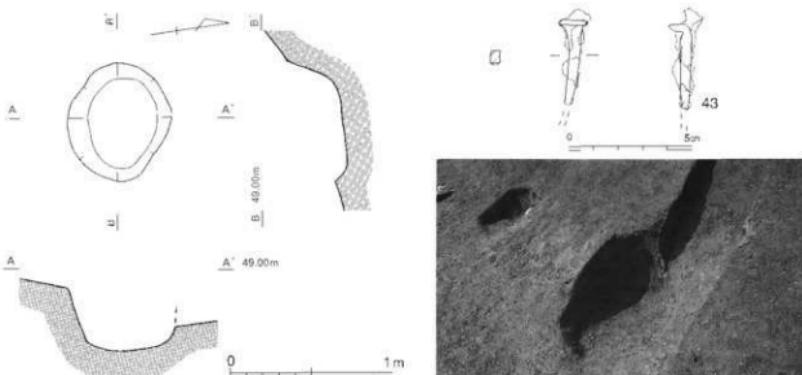
谷ノ奥2号墳の南東裾から北に向けて長さ約26m、高低差最大2.09mを測る加工斜面があり、斜面下側には平坦面が造り出されていた。平坦面は調査区外の南西側へと続いており、古墳を意識して造成されたように思われる。中・近世墓の大部分はこの加工斜面下の平坦面(以下、第1加工段と呼称)に造られていた。さらに、斜面上の高所からも2基が検出された。これらは古墳周辺と墳頂部に造営されており、これが地形的制約によるものなのか、別に理由があるのか定かではない。墓壇は上層部の河原石や五輪塔を除去した後に検出された。河原石は基壇と考えられるが、長い年月を経過するうちに累積したり移動したと思われ、区画の設定は非常に困難な作業であった。SK-18・23など比較的明瞭なものを見ると円形の区画であり、この上に五輪塔が据え置かれていたと思われる。

以下、「1. 土壙墓」の項では、火葬骨を伴う土壙や出土遺物から土壙墓と考えられるものを取り扱い、遺物が出土していない土壙については、「5節その他の遺構及び遺構外出土遺物」に収録した。また、ある程度まとまりをもつ土壙上の河原石や五輪塔については土壙実測図中に記載したが、五輪塔の実測図については便宜的に「2. 第1加工段出土遺物(五輪塔)」の項にまとめて記載した。

1. 土壙墓

SK-04(第29図) SK-04は加工斜面から平坦面への変換点に位置する土壙墓であり、南東にはSK-05～SK-08がほぼ一直線に並ぶ。地山まで掘り下げた時点で平面プランを確認し、検査面での標高は48.50～49.25mを測る。平面は不整橿円形を呈し、平坦な底部から開き気味に立ち上がる壁面をもつ。規模は、上締長軸73cm、短軸65cm、深さ最大56.8cmを測る。土壙埋土は周囲と良く似た褐色土層であり、遺物は持ち帰った埋土の水洗い時に鉄釘1本が出土している。

SK-04出土遺物(第29図) 43は鉄釘頭部部分の破片である。頭部はほぼ直角に折り曲げられ、身に比べやや幅広に仕上げられている。身の断面は長方形を呈し、法量は現状で長さ3.5cm、頭部幅1.15cm、軸部幅0.45cm、軸部厚0.35cmを測る。



第29図 第1調査区 SK-04(S=1/30)・SK-04出土鉄釘(S=1/2)実測図



第31図 第1調査区 土壌基全体図



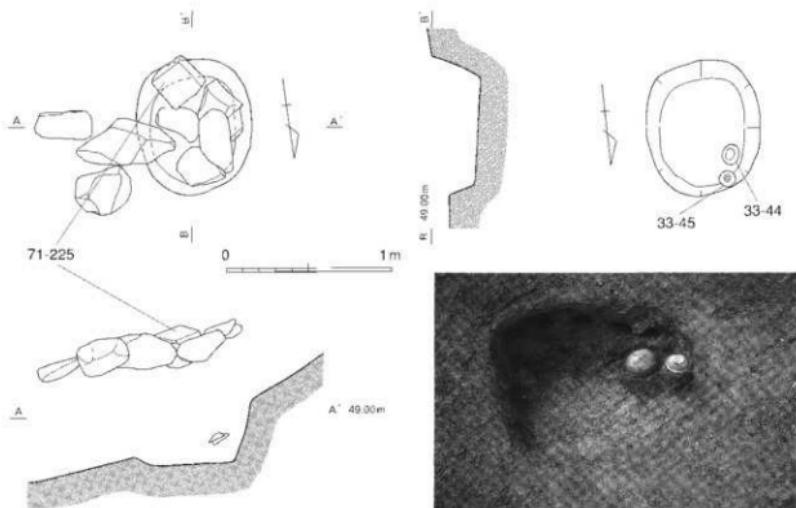


第30図 第31調査区・河原石・五輪塔出土状況実測図

S K -05 (第32図)

S K -05はS K -04とS K -06に挟まる場所に位置する土壙墓であり、加工斜面から平坦面への変換点で検出された。平面形は梢円形を呈し、平坦な底部から開き気味に立ち上がる壁面をもつ。規模は、上縁長軸83cm、短軸68.5cm、深さ最大38.6cmを測る。

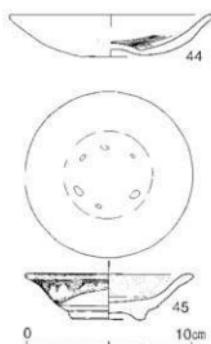
土壙上には河原石と地輪1点(第71図225)があり、ややまとまりをみせる。石材除去後に精査を行ったが、土壙埋土と周囲の土との判別が難しく、地山まで掘り下げた時点でようやく平面プランを確認した。土壙検出面での標高は48.50~49.25mを測る。遺物としては土壙底部の北西隅から土師質土器皿1個と唐津焼皿1個が口縁部を下にした状態で出土した。また、持ち帰った埋土の水洗い時に火葬骨片が0.1g出土している。



第32図 第I調査区SK-05実測図〔左：石材検出状況・右：石材除去後〕(S=1/30)

S K -05出土遺物(第33図) 44はいわゆる京都系土師器皿である。上げ底の底部から体部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部は外反する。内面の底部中央が丸く膨らみ、その周囲には強いナデが施されている。底部外面には糸切り痕はみられず、押圧による整形である。法量は口径12.2cm、器高2.6cmを測る。

45は唐津焼の皿である。削り出しの低い高台をもち、体部は逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁部でやや外反する。内面の見込部分に胎土の目痕が残るものであり、素地はにおい黄褐色を呈し、オリーブ黄色の釉薬が内面全体と外面の口縁部付近に施される。法量は口径10.2cm、器高2.8cm、底径4.3cmを測る。時期は16世紀末から17世紀初頭のものと考えられる。

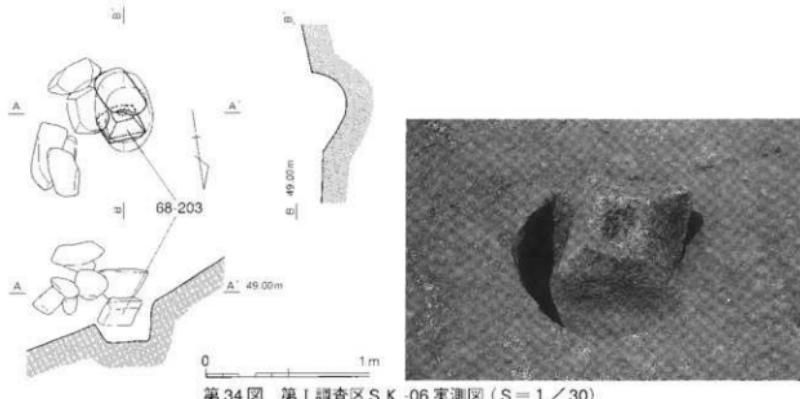


第33図 SK-05出土遺物実測図

S K -06 (第34図)

S K -06はS K -05とS K -07に挟まれる場所に位置する土壌墓であり、加工斜面から平坦面への変換点で検出された。検出面での標高は48.75~49.00mである。平面形は橢円形を呈し、規模は上縁長軸47.5cm、短軸34cm、深さ最大25.9cmを測る。

土壤上には河原石があり、ややまとまりをみせる。また、五輪塔の火輪1個(第68図203)が土壤中に落ち込んだ状態で検出された。埋土は周囲と良く似た褐色土層であり、遺物は持ち帰った土の水洗い時に火葬骨片と鉄釘1本が出土したが、細片のため実測できるものではなかった。



第34図 第I調査区 S K -06 実測図 (S = 1 / 30)

S K -07 (第35図)

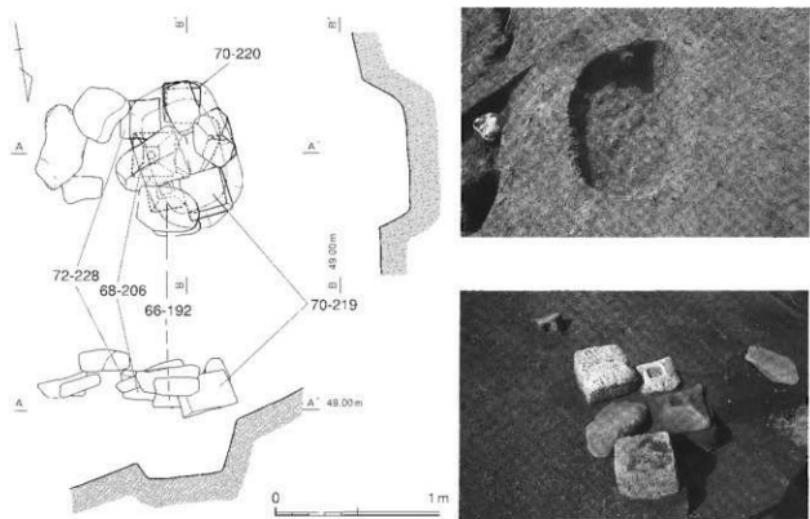
S K -07はS K -06の南東50cmの場所で検出された平面隅丸長方形を呈する土壌墓であり、標高48.50~49.00mを測る場所に位置する。規模は、上縁長軸89cm、短軸57.5cm、深さ最大35.4cmを測る。土壤上には河原石と火輪2個(第66図192、第68図206)、地輪3個(第70図219・220、第72図228)がまとめられていた。石材除去後に精査を行ったが、土壤と周囲の土との判別が難しく、地山まで掘り下げた時点でようやく平面プランを確認した。土壤埋土は周囲と良く似た褐色土層であり、遺物は持ち帰った土の水洗い時に鉄釘の破片9点が出土している。

S K -07出土遺物(第36図) 46~47は鉄釘頭部の破片である。身の断面は方形を呈し、頭部はやや幅広に仕上げられ、直角に近く折り曲げられている。48~50は鉄釘先端部分の破片である。身は断面方形を呈し、先端に行くに従い幅を減じ先細りに仕上げられている。

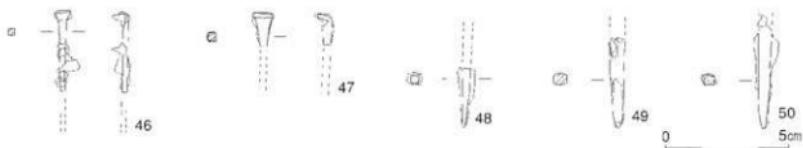
S K -08 (第37図)

S K -08はS K -07の南東1.5mの場所で検出された土壌墓であり、検出面での標高は48.50~49.00mを測る。土壤と周囲の土との判別が難しく、地山まで掘り下げた時点で平面プランを確認したため、深さは最大で21.4cmと浅い。平面形はやや歪な隅丸方形を呈し、底部は平坦である。規模は上縁長軸73cm、短軸60cmを測る。遺物としては鉄釘の破片1点が出土している。また、持ち帰った埋土の水洗い時に火葬骨片34.0gが出土した。

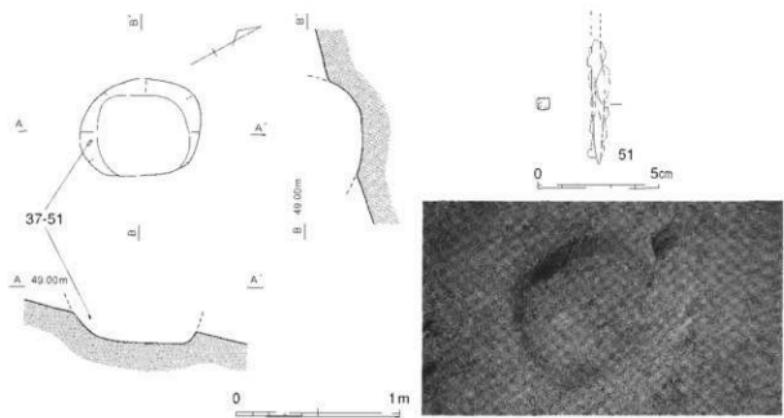
S K -08出土遺物(第37図) 51は鉄釘先端部分の破片である。軸部は断面方形を呈し、先端に行くに従い幅を減じ先細りに仕上げられている。木材の付着等はみられない。



第35図 第I調査区SK-07実測図(S=1/30)



第36図 第I調査区SK-07出土鉄釘実測図(S=1/2)

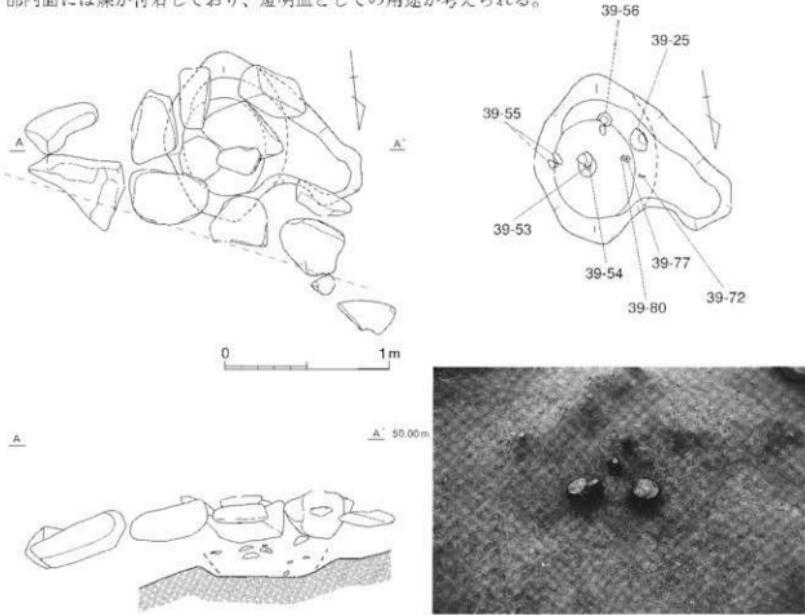


第37図 SK-08(S=1/30)・SK-08出土鉄釘(S=1/2)実測図

S K -09 (第38図)

S K -09 は C -6 区から検出された土壌墓であり、南には S K -10 ~ 13 がほぼ一直線に並ぶ。土壌上には河原石があり、ややまとまりをみせる。北側の石は直線的に配置されているよう、これが意図的なものであれば方形垣の一辺である可能性が考えられる。石を除去して精査を行ったところ標高約49.50mを測る辺りで楕円形の平面プランを確認した。地山上に堆積した黄褐色土層からの掘り方であり、掘削は地山まで達していた。規模は上縁長軸82cm、短軸67cm、深さ最大19.0cmを測る。土壌内からは土師質土器皿10個、鉄釘53点、毛抜1本、不明鉄製品2点、銭貨6枚が出土している。埋土は黒色を呈し、炭化物を多く含んでいた。全体に細片化した火葬骨が混ざっていることから荼毘に付した後、灰ごと埋納したものと考えられる。火葬骨は水洗いにより取り上げを行ったところ、乾燥重量で194.1gが出土している。

S K -09 出土遺物 (第39図) 52 ~ 56 は京都系土師器皿である。52は上げ底氣味の底部から体部はやや内湾気味に大きく開き、口縁端部は先細りに仕上げられている。底部外面には糸切り痕はみられず、押圧による整形である。法量は口径13.3cm、器高2.3cmを測る。53は上げ底の底部からやや内湾気味に立ち上がり口縁端部は先細りに仕上げられている。内面底部中央が膨らみ、周囲に強いナデが施されている。底部外面には糸切り痕はみられず、押圧による整形である。法量は口径11.5cm、器高2.4cmを測る。54 ~ 56 は内面底部中央が窪み、口縁端部内面に段をもつものである。底部外面には糸切り痕はみられず、押圧による整形である。口径9.1 ~ 9.6cm、器高1.6cmを測る。55の口縁端部内面には煤が付着しており、燈明皿としての用途が考えられる。



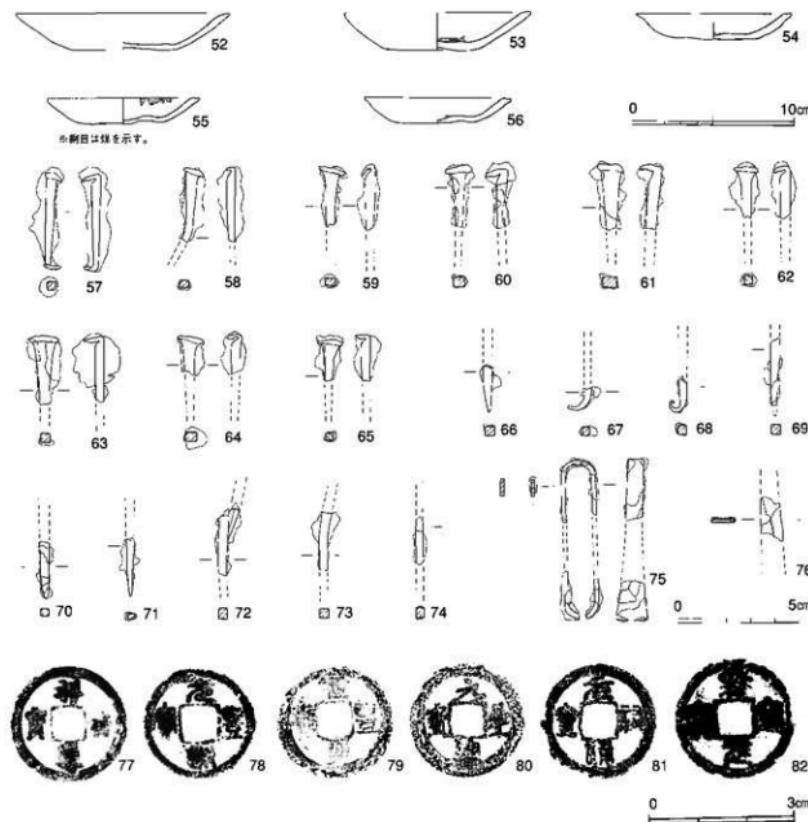
第38図 第I調査区SK-09実測図〔左：石材検出状況・右：石材除去後〕(S=1/30)

57～74は鉄製角釘である。53点が出土しており、このうち頭部部分は57～65の9点を数える。57は完形であり、頭部は直角に近く折り曲げられ、先端部分は先細りに仕上げられている。先端が折れ曲がっているため引き延ばしての計測はできないが、全長約4.6cm程度のものと考えられる。66～71は先端部分の破片であり、先細りに仕上げられている。67・68は先端が折れ曲がってしまったものである。72～74は軸部部分の破片であり断面は方形を示す。

75は鉄製の毛抜である。中央を「U」字型に曲げ、2つの刃先が接するようにしたものである。U字部に比べて刃先は幅広に仕上げられ、U字部幅0.7cm、刃先の幅1.2cm、厚さ0.2cmを測る。

76は不明鉄製品である。厚さ0.5mmの鉄板の両側辺が折り曲げられている。

77～82は銭貨であり、いわゆる「六道銭」と考えられる。銭種は「元豐通寶」3枚(78～80)、「祥符通寶」1枚(77)、「元祐通寶」1枚(81)、「熙寧元寶」1枚(82)である。77～79の3枚と80～82の3枚は鏽のため同着した状態で出土した。

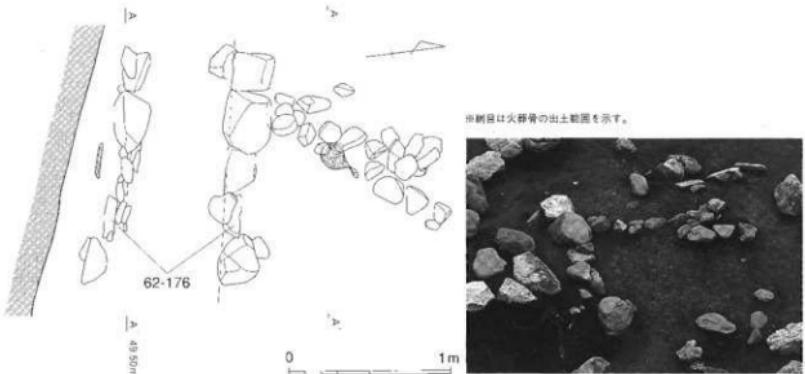


第39図 SK-09出土土師質土器(S=1/3)・金属製品(S=1/2)実測図、銭貨拓本(S=1/1)

S K -10 (第40図)

S K -09の南側で挙人の石が集められていた。石材を除去したところ火葬骨片(第40図網目部分)がまとまって出土したため周囲を慎重に精査したが、土壠の平面プランを確認することはできなかつた。火葬骨は乾燥重量にして17.2gを測る。

S K -10の南側の石(第40図の破線部分)は直線的に配置されているようで、これが意図的なものであれば方形壇の一辺である可能性がある。ここからは石臼(第62図176)が検出された。



第40図 第1調査区 S K -10 実測図 (S = 1 / 30)

S K -11 (第41図)

S K -11はS K -09の南側2.4mを測る場所に位置する土壠墓であり、検出面での標高は49.25～49.50mを測る。S K -36と切り合っており、新旧関係はS K -11(新) - S K -36(古)である。土壠上には河原石があり、ややまとまりをみせる。石材除去後に精査を行ったが、掘削が地山まで達しておらず、セクションにより辛うじて土壠の規模を確認することができた。平面プランは楕円形と考えられ、壁面は平坦な底部から直角に近く立ち上がる。深さは最大で9.8cmを測る。遺物としては土壠底部から4cmほど浮いた状態で鉄釘1本が出土している。また、持ち帰った上の水洗い時に鉄釘2点と火葬骨片が出土した。埋土は黒色を呈し、炭化物を含んでいることや、細片化した火葬骨が混ざっていることから茶毬に付した後、灰ごと埋納したものと考えられる。

S K -11出土遺物(第41図) 83・84は鉄釘頭部部分の破片である。頭部はやや幅広に仕上げられ、直角に近く折り曲げられている。軸部の断面は方形を呈する。

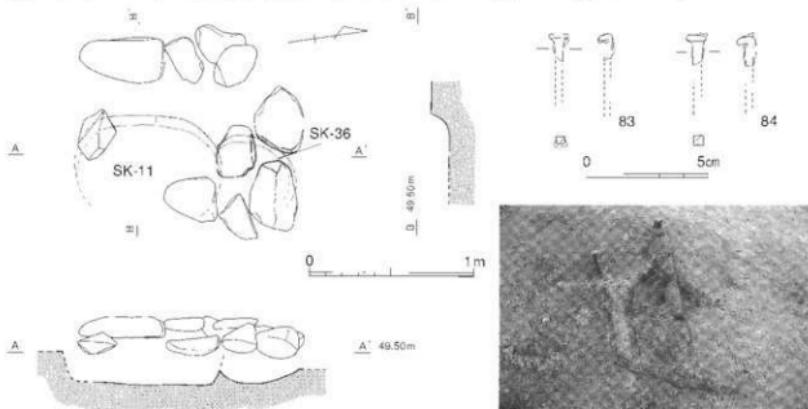
S K -12 (第42図)

S K -12はS K -11の南側2mの場所に位置し、検出面での標高は約49.00～49.50mを測る。S K -37と切り合っており、新旧関係はS K -12(新) - S K -37(古)である。地山上に堆積した黄褐色土層からの掘り方であり、掘削は地山まで達していた。平面楕円形を呈し、地山面での規模は上緑長軸77cm、短軸67.5cm、深さ最大19.8cmを測る。埋土は黒色を呈し、炭化物を多く含んでいた。細片化した火葬骨が混ざっていることから茶毬に付した後、灰ごと埋納したものと考えられる。出土遺物には土師質土器の細片6点、鉄釘8本、銭貨5枚が出土している。

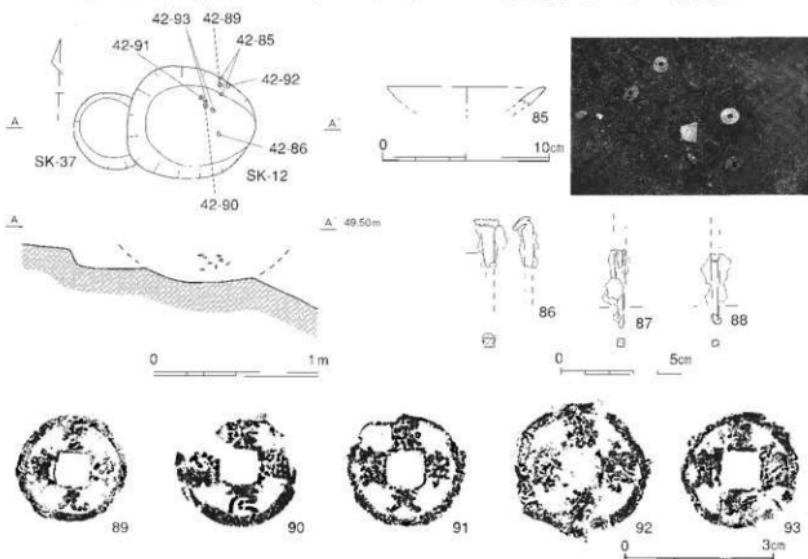
S K-12出土遺物(第42図) 85は土師質土器の皿である。口縁部分の破片であり、端部付近はやや肉厚で、先端は丸くおさめられる。口径は復元で9.5 cmを測る。

86～88は身の断面が方形を呈する鉄製角釘である。86は頭部部分であり、やや幅広の頭部が折り曲げられている。87・88は先端部の破片であり、88の先端部は折れ曲がっている。

89～93は銭貨であり、いわゆる「六道銭」と考えられる。銭種は「聖宋元寶」1枚(89)、「熙寧元寶」3枚(90～92)で、銭文不明銭が1枚(93)ある。92は熱のため変形している。



第41図 第I調査区SK-11(S=1/30)・SK-11出土鉄釘(S=1/2)実測図



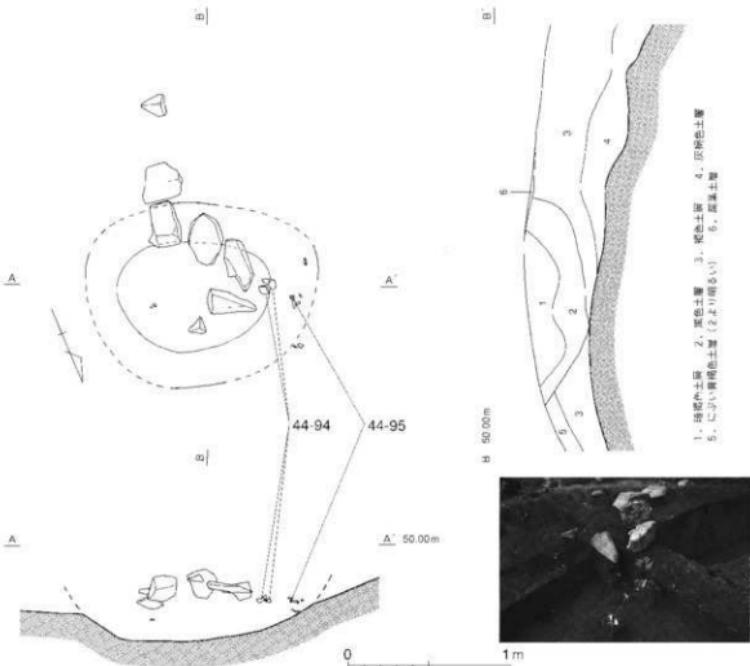
第42図 SK-12(S=1/30)・出土土師質土器(S=1/3)鉄釘(S=1/2)実測図、銭貨拓本(S=1/1)

S K -13 (第43図)

S K -13はS K -12の南側2.5mの場所に位置する土壌墓である。第1層は周囲と非常に良く似た土質であったため、検出できたのは底部近くのごく一部であった。平面プランは楕円形を呈し、規模は上縁長軸140.0cm、短軸114.5cm、深さ最大37.0cmを測る。遺物としては第2層の黒色土層より土師質土器の破片3点、銭貨1枚、火葬骨片182.1gが出土した。火葬骨は茶毬に付した後、灰ごと埋納したものであり、第1層は土壌の封土と考えられる。

S K -13出土遺物(第44図) 94は京都系土師器皿である。上げ底の底部から内済気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。内面底部中央が膨らみ、周囲に強いナデが施されている。底部外面には糸切り痕はみられず、押圧による整形である。法量は口径12.6cm、器高1.8cmを測る。

95は銭貨であり、篆書体の「政和通寶」である。



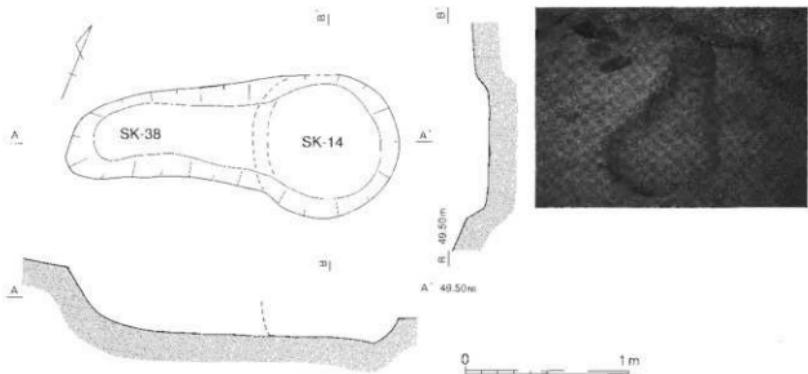
第43図 第1調査区 S K -13 実測図 ($S = 1 / 30$)



第44図 S K -13 出土土師質土器実測図 ($S = 1 / 3$)、銭貨拓本 ($S = 1 / 1$)

S K -14 (第45図)

S K -14はS K -09とS K -17に挟まれる場所で検出された土壙墓である。地山面まで掘り下げた時点で検出されたものであり、検出面での標高は49.25~49.50mを測る。S K -38と切り合っており、新旧関係はS K -38(新)-S K -14(古)である。平面形は円形を呈し、規模は直径90cm、深さ最大18.5cmを測る。埋土は周囲と良く似た褐色土層であり、持ち帰った土の水洗い時に鉄釘と火葬骨片が出土したが、細片のため実測できるものではなかった。

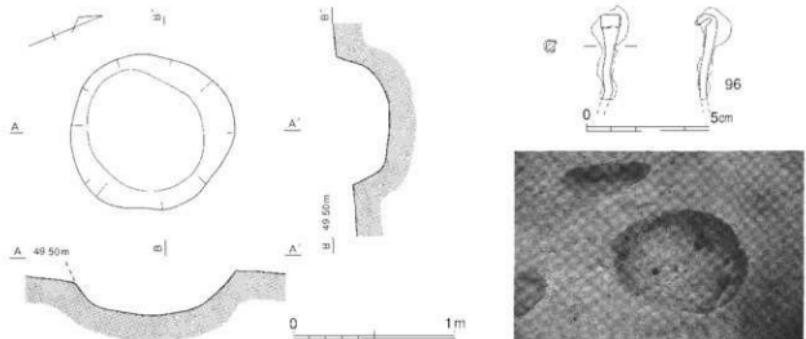


第45図 第I調査区 S K -14実測図 ($S = 1/30$)

S K -15 (第46図)

S K -15はS K -14の南側4.0mに位置する円形の土壙墓である。地山面まで掘り下げた時点で検出されたものであり、検出面での標高は49.25~49.50mを測る。断面形は楕円形を呈し、規模は直径99cm、深さ最大34.6cmを測る。遺物は持ち帰った土の水洗い時に鉄釘1点が出土している。

S K -15出土遺物(第46図) 96は鉄釘頭部の破片である。身の断面は方形を呈し、頭部はやや幅広に作られ折り曲げられている。法量は現状で長さ3.5cm、幅0.3cm、厚さ0.3cmを測る。



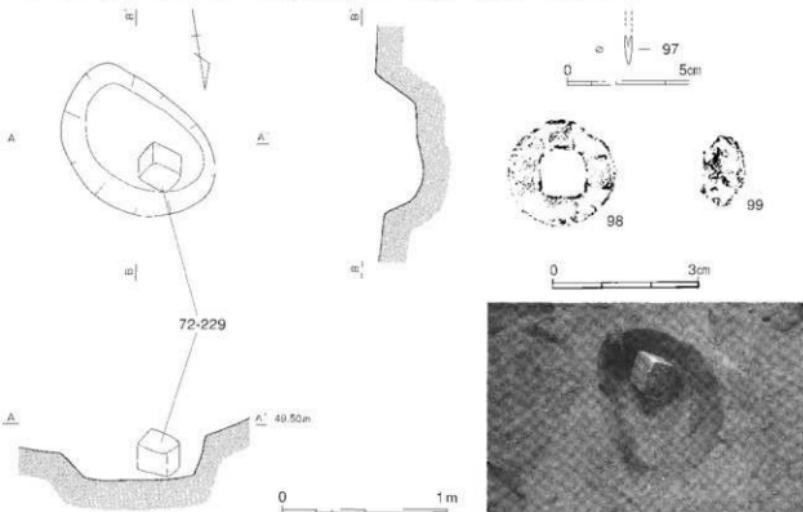
第46図 第I調査区 S K -15 ($S = 1/30$)・S K -15出土鉄釘 ($S = 1/2$) 実測図

S K -16 (第 47 図)

S K -16 は S K -15 の南側 1 m の場所で検出された楕円形を呈する土壤幕である。地山面まで掘り下げた時点での標高は 49.25 ~ 49.50 m を測る。平坦な底部をもち、規模は上縁長軸 101.5 cm、短軸 73 cm、深さ最大 28.7 cm を測る。土壤内からは錢貨 2 枚と鉄釘 2 点が出土している。また、封土時に混入したと思われる五輪塔の地輪（第 72 図 229）も検出された。

S K -16 出土遺物 (第 47 図) 97 は鉄釘先端部分の破片であり、先細りに仕上げられている。残存長 1.2 cm、最大幅 0.25 cm を測る。

98・99 は錢貨である。98 は「皇宋通寶」、99 は「豐」の字部分の破片である。



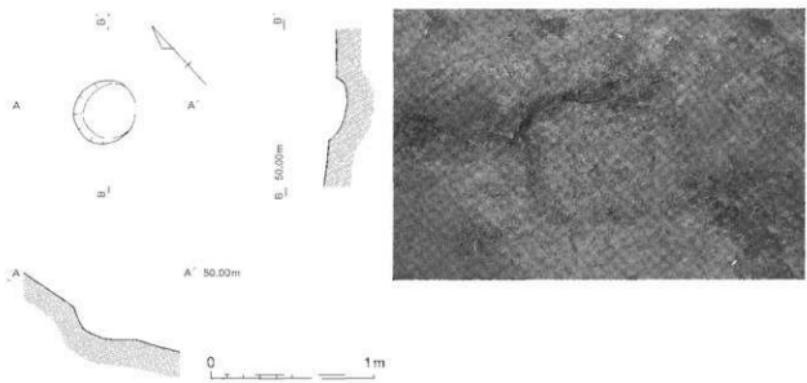
第47図 第1調査区 S K -16 ($S = 1/30$)・S K -16出土鉄釘 ($S = 1/2$)実測図、錢貨拓本 ($S = 1/1$)

S K -17 (第 48 図)

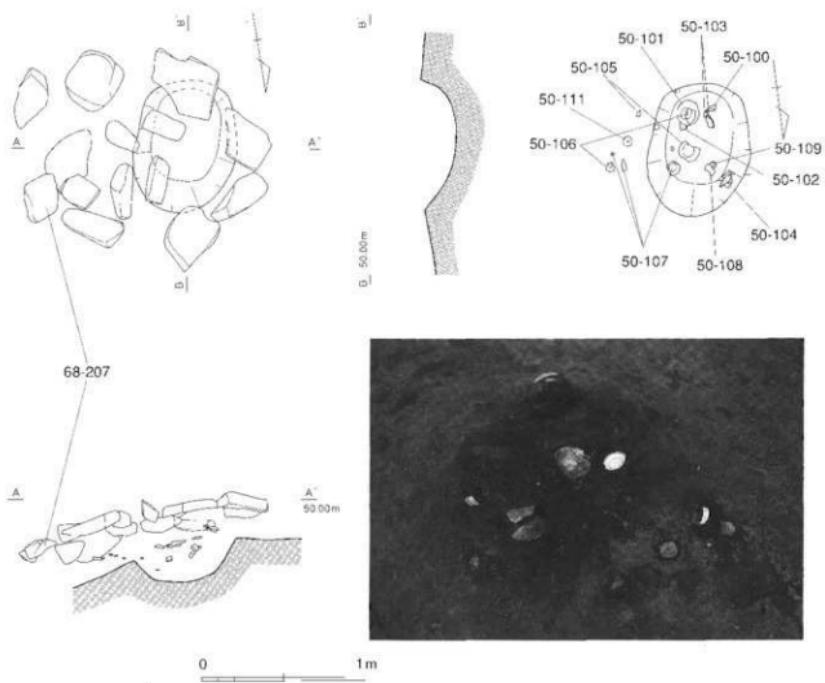
S K -17 は S K -14 の西側 1.2 m、加工斜面から平坦面への変換点に位置する。地山面まで掘り下げた時点での標高は 49.50 ~ 50.00 m を測る。平面は円形を呈し、直径 38 cm、深さ最大 20.7 cm を測る。埋土は黒褐色土層であり、火葬骨片が 10.3 g 出土した。

S K -18 (第 49 図)

S K -18 は S K -16 の西側 0.8 m の場所に位置する。土壌上には河原石が円形に近い格好で配置されており、ここから五輪塔の火輪 1 個（第 68 図 207）が検出された。これらの石を除去して精査を行ったところ楕円形の土壤プランを確認した。地山上の黄褐色土層からの掘り方であり、掘削は地山まで達していた。規模は上縁長軸 82 cm、短軸 60 cm、深さ最大 28.4 cm を測る。出土遺物には土師質土器の破片 12 点、中国青花 1 個、鉄製品が出土している。埋土は黒色を呈し、炭化物を多く含んでいた。繊片化した火葬骨が混ざっていることから茶毬に付した後、灰ごと埋納したものと考えられる。火葬骨は水洗いにより取り上げを行ったところ、乾燥重量で 7.5 g が出土している。



第48図 第I調査区SK-17実測図 ($S = 1/30$)



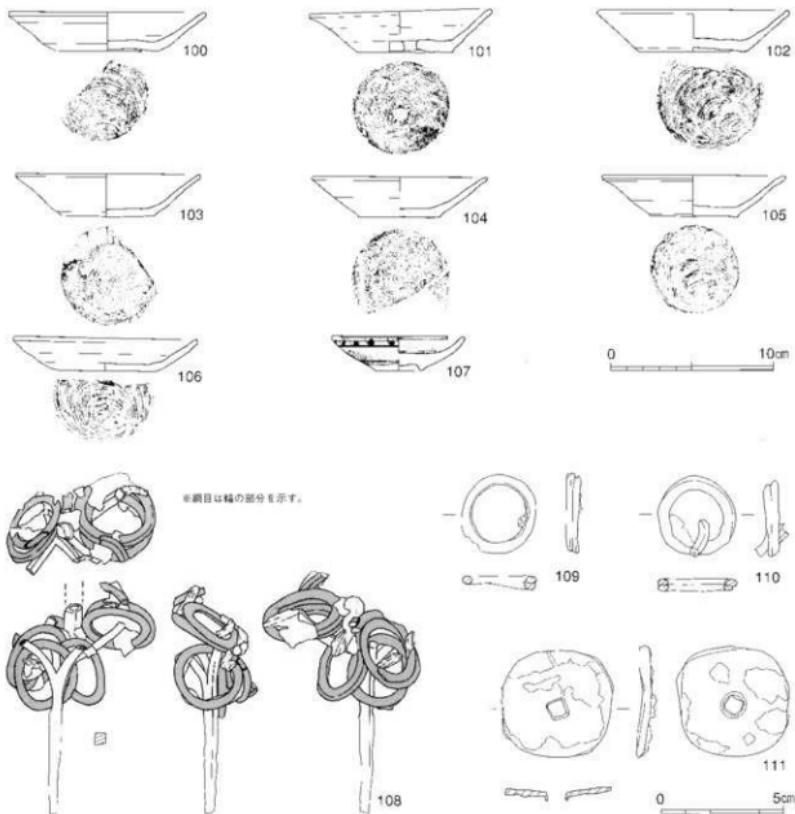
第49図 第I調査区SK-18実測図【左：石材検出状況・右：石材除去後】($S = 1/30$)

SK-18出土遺物(第50図) 100~106は土師質土器の皿である。平坦な底部より逆「ハ」の字状に大きく開く体部をもち、口縁端部は平坦に仕上げられている。底部の切り離しには糸切りが行われ、無調整のままである。法量は口径10.7~11.9cm、底径5.4~6.6cm、器高2.0~2.6cmの中に分布するものである。101の底部中央には直径7mmの孔が焼成前に穿孔されている。

107は中国青花の皿であり、底部は基筒底を有する。内面の文様は口縁部と見込み部分に1本の圓線、外縁は底部に1本の圓線、口縁部は2本の圓線で区画された中に列点文が巡る。16世紀中頃に多く見られるタイプである。

108~110は輪鉢と考えられる。断面方形を呈する軸部の先が四方に分かれ、ここに直径3.0~3.3cmを測る金属の輪が取り付けられている。この金属の輪は10個体以上が出土している。

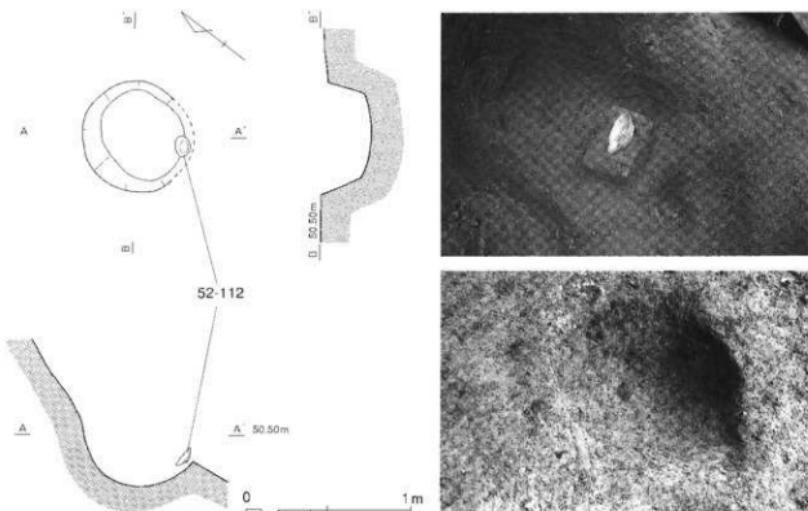
111は直径4.5cmを測る円盤の中央に 6.5×6.5 mmを測る方形孔が穿たれたものである。円盤の中央部はやや注んでいるのが観察される。108の軸部に差し込んで使用する輪鉢の部材と考えられる。



第50図 第1調査区SK-18出土土師質土器(S=1/3)・中国青花(S=1/3)・金属製品(S=1/2)実測図

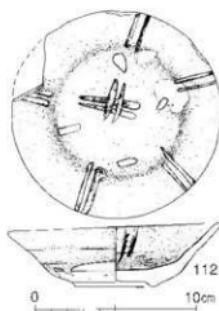
S K -19 (第51図)

S K -19はC-6・7区の加工斜面から平坦面への変換点で検出された土壙である。地山面まで掘り下げた時点での平面プランを確認し、検山面での標高は50.25~51.00mを測る。平面は円形を呈し、規模は直径68cm、深さ最大42.7cmを測る。遺物としては唐津焼の皿が1個出土している。



第51図 第1調査区SK-19実測図 ($S=1/30$)

S K -19出土遺物 (第52図) 112は唐津焼の皿である。削り出しの低い高台をもち、部体は逆ハの字状に大きく開き気味に立ち上がる。内面見込み部分に段がつき、4カ所に胎土の目痕が残る。内面と外面上半部には浅黄色を呈する釉薬が施されるが、釉かけは雑で無釉のところもみられる。また、温度が低すぎるためか釉薬が溶けきっていない。内面には鉄絵が施されるが非常に薄く、口縁端部にも閣線状に鉄絵が施されているように見えるがはっきりしない。法量は口径13.2cm、器高3.8cm、底径5.0cmを測る。時期は16世紀末から17世紀初頭のものと考えられる。



第52図 SK-19出土唐津焼皿実測図

S K -20 (第53図)

S K -34の東側0.4mの位置で集行が認められたため、石材を除去した後、慎重に精査を行った。しかし、標高48.00~48.25mの位置で乾燥重量217.1gを測る火葬骨片が筒状にまとめて出土したもの、土壙の平面プランを確認することはできなかった。

SK-21(第53図)

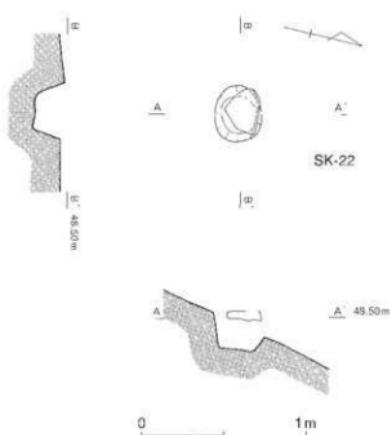
SK-06の東側に位置するSX-01の精査を行っていたところ、標高48.00～48.50mを測る位置で火葬骨片がまとめて出土した。しかし、土壌の平面プランを確認することはできなかった。火葬骨片は乾燥重量で58.9gを測る。

SK-22(第53図)

SK-22はSK-09の東側で検出された土壌である。地山面まで掘り下げた時点で平面プランを確認し、検出面での標高は48.00～48.75mを測る。平面円形を呈し、規模は直径34.5cm、深さ最大23.1cmを測る。土壌埋土の水洗いを行ったところ、70.3gを測る火葬骨片が出土した。



*網目は火葬骨の出土範囲を示す。

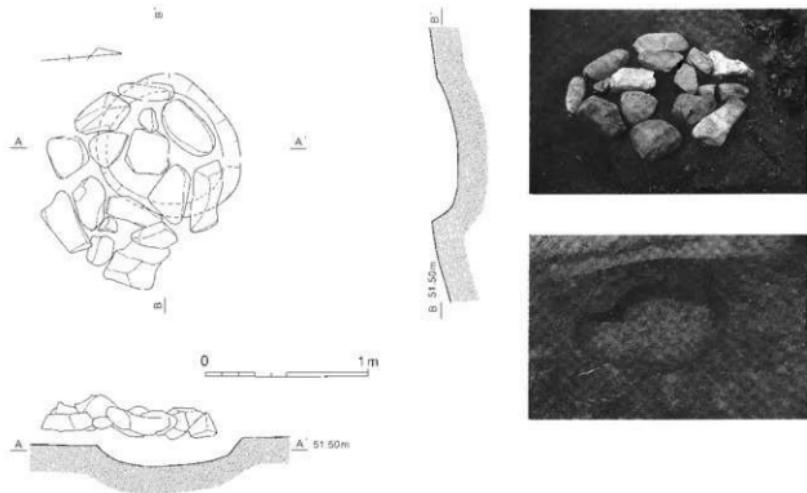


第53図 第I調査区SK-20・21・22実測図(S=1/30)

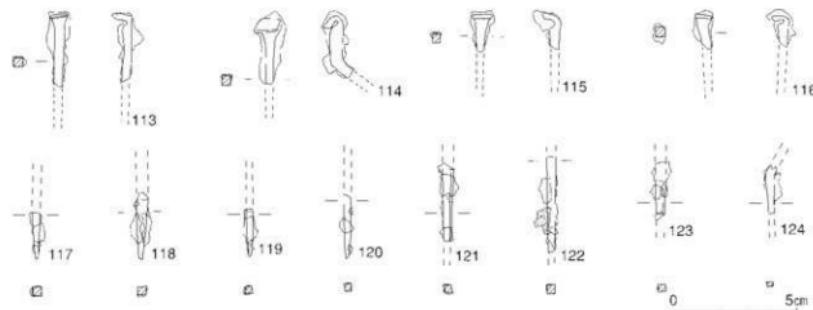
S K -23 (第 54 図)

S K -23は加工斜面の上、標高51.25～51.50mを測る位置で検出された平面円形を呈する土壌である。河原石が円形に配置されており、石を除去して精査を行ったところ、少しづれた位置から土壌プランが確認された。2号周溝上に掘り込まれたものであり、掘削は地山まで達していない。規模は直径87cm、深さ最大16.9cmを測る。遺物としては鉄釘48点が出土している。埋土は黒色を呈し、炭化物を多く含んでいた。全体に細片化した火葬骨が混ざっていることから荼毘に付した後、灰ごと埋納したものと考えられる。火葬骨は乾燥重量で45.5gが出土している。

S K -23出土遺物 (第 55 図) 113～124は身部分の断面が方形を呈する鉄製角釘である。48点が出土しており、このうち頭部部分は113～116の4点を数える。117～120は先端部の破片である。121～124は軸部分であり、断面は方形を呈する。



第 54 図 第 1 調査区 S K -23 実測図 (S = 1 / 30)

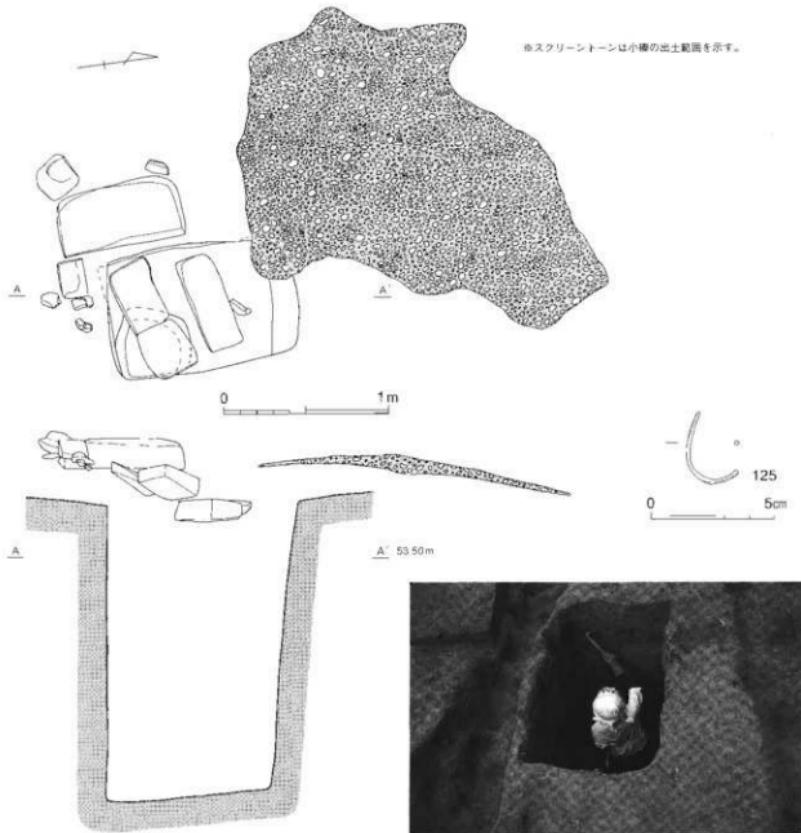


第 55 図 第 1 調査区 S K -23 出土鉄釘実測図 (S = 1 / 2)

S K -24 (第56図)

S K -24は3号墳頂のほぼ中央から検出された平面長方形を呈する土壙墓であり、掘削は墳丘盛土を通り越して地山にまで達していた。主軸はほぼ南北方向にあり、長辺114.5cm、短辺78.5cm、深さ最大194.7cmを測る。壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、墓底も上縁と同様に長方形を呈する。底部は平坦であるが、南東隅は掘り廻められ一段深くなっている。土壙上には凝灰岩製の切石が置かれており、北から西にかけては基石大から拳大の砂利が敷き詰められていた。この砂利は土壙上に置かれていたものを搔き出した可能性もある。遺物としては砂利の中から陶器片1点と土壙埋土から鉄製品1点が出土している。陶器片は細片のため実測できるものではなかった。他の土壙と比べると飛び抜けて深いものであり、形態などから座棺墓と考えられる。

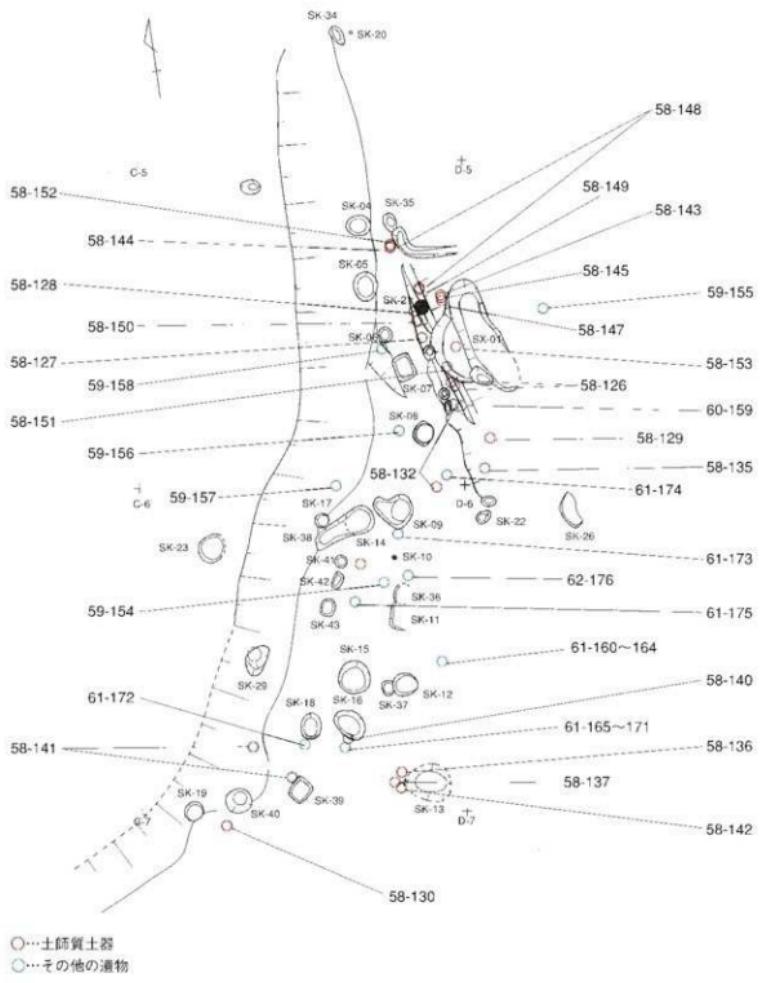
S K -24出土遺物 (第56図) 125は針金状の鉄製品である。断面は円形を呈し、直径0.2cmを測る。屈曲しており、引き延ばしての計測は行わなかったが、長さ約4.7cmを測るものである。



第56図 第I調査区 S K -24 (S=1/30)・S K -24出土鉄製品実測図 (S=1/2)

2. 第1加工段出土遺物

第1加工段平坦面には基壇の部材と考えられる河原石や五輪塔が散在しており、石臼も検出された。これらの隙間などからは土師質土器、金属製品、錢貨が出土している。ここでは第1加工段平坦面から出土した土壙墓に伴わない遺物と五輪塔を取り扱う。



第57図 第1調査区第1加工段遺物出土状況実測図 ($S = 1 / 150$)

第1加工段出土土師質土器(第58図)

第1加工段平坦面の遺構外から出土した土師質土器は、土壤内から出土したものに比べると小型のものが多く、口縁端部内面に煤が付着するものが多数を占める。これら小型の土師質土器は燃明皿として使用されていたと考えられる。

126～135は小型の皿である。平坦な底部より逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部の切り離しには糸切りが行われ、無調整のままである。法量は口径7.2～7.9cm、底径3.4～4.7cm、器高1.5～1.8cmの中に分布するものである。126～133の口縁端部内面には煤が付着している。136～138も糸切り痕をもち、底径から同様の底部片と考えられる。

139は底部に糸切り痕をもつ皿である。平坦な底部より逆「ハ」の字状に大きく開く体部をもち、口縁端部には平坦な面をもつ。法量は口径10.7cm、底径5.4cm、器高2.7cmを測る。SK-18から出土した第50図100等と同様の形態をもつ。140は同様の口縁部の破片と考えられる。

141は上げ底気味の底部から体部はやや内済気味に立ち上がる。口縁端部内面が若干窪み、段状に仕上げられている。底部外面には糸切り痕はみられず、押圧による整形である。法量は口径13.6cm、器高2.8cmを測る。142は同様の形態をもった口縁部の破片であり、口径は14.4cmを測る。

143～147は体部が内湾して立ち上がり、口縁端部に段をもつ皿である。143は内面底部中央が窪み、SK-09から出土した第39図54等と同形態のものである。底部外面に糸切り痕はみられず、押圧による整形である。法量は口径9.4cm、器高1.5cmを測る。144・145は同様の口縁と考えられる。144は口径9.6cm、器高1.5cm、145は口径9.2cmを測る。146・147はやや小型のものであり、146が口径7.3cm、器高1.3cm、147が口径7.6cm、器高1.5cmを測る。

148～153は口縁端部が先細りして丸くおさめられる小型の皿である。底部外面には糸切り痕はみられず、押圧による整形である。法量は口径7.9～9.0cm、器高1.6～2.0cmの中に分布するものである。148～151の口縁端部内面には煤が付着する。

第1加工段出土青銅製品(第59図)

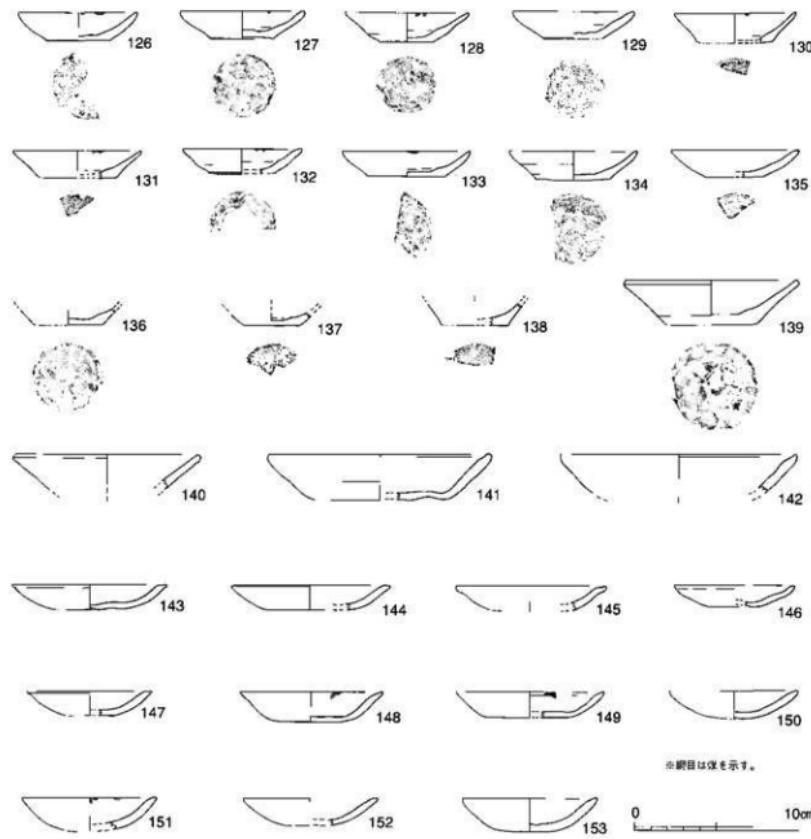
154は両端に装飾的なカットが施された細長い銅板である。短軸に寄せて方形の孔が2つ開けられており、このうちの1つには針金状の金属が2本残存する。片面の縁は面取りが施され丸みを帯びている。全長7.2cm、幅1.0cm、厚さ0.15cmを測る。縁のため緑灰色を呈する。

155は銅製の毛抜である。左右に刃をつけて中央を「U」字形に曲げ、2つの刃先が接するようにしたものであり、現在使用されているものと形は変わらない。表面の縁は面取りが施され丸みを帯びている。全長6.75cm、幅0.5～0.8cm、厚さ0.1cmを測る。

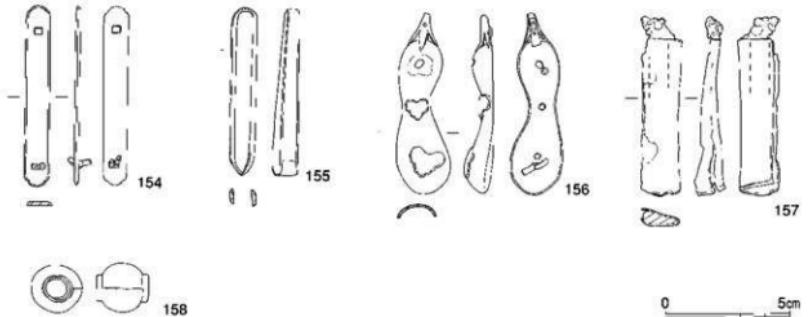
156は蒂、実、装飾金具、鉢から構成されるなすび形の金属製品であり、すべての部材に緑青が付着している。蒂は上方から鉢を差し込み、鉢先端部を折り曲げることで取り付けられている。実には葉形を呈する装飾金具が三カ所に取り付けられていたと考えられるが、蒂側のものは消失し、取り付け孔と葉形の痕跡が残る。中央部のものはリベット接合、下方のものは削鉢による接合であり、可動する。全長7.3cm、幅最大2.2cm、高さ最大1.1cm、厚み0.1cmを測る。

157は鉄製の茎に銅製の柄が取り付けられた小柄である。中の鉄が錆のため膨脹し、柄に大きな亀裂が入っている。柄部の長さ6.3cm、幅1.4～1.6cm、茎の幅約0.7cmを測る。

158は不明品である。直径1.1cm、長さ2.05cmを測る銅製円筒に直径1.95cmを測る球形の銅板が取り付けられ提灯形を呈する。単体で使用するものではなく、何かの部品と思われる。



第58図 第I調査区第1加工段出土土師質土器実測図 (S=1/3)



第59図 第I調査区第1加工段出土青銅製品実測図 (S=1/2)

第1加工段出土鉄製品（第60図）

159は反りが強く、刀剣類とするならば薙刀の可能性が高い。しかし、通常開けられているはずの目釘孔がレントゲン撮影においても確認できなかった。また、一般の薙刀と比較すると細くて華奢であり、実用的ではないことから祭祀目的で造られたという考え方もある。法量は全長34.1cm、幅2.2cm、厚さ0.45cmを測る。C-5区から出土した。

第1加工段出土銭貨（第61図）

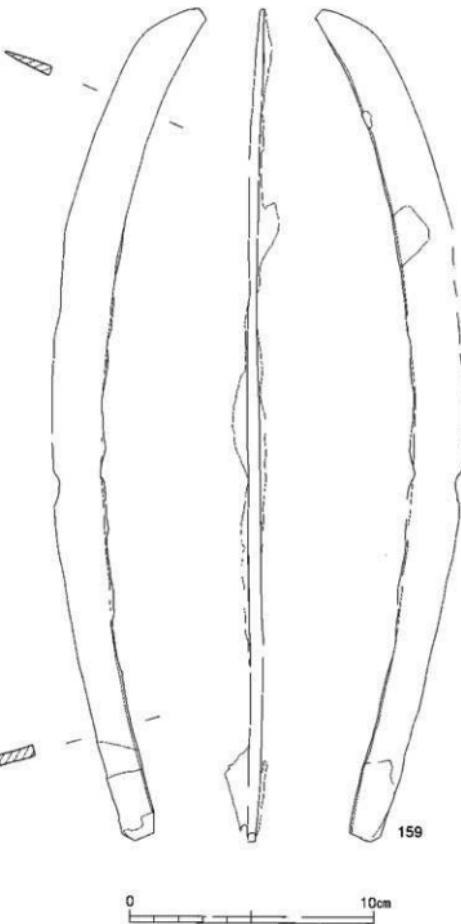
銭貨は16枚が出土している。160～164の5枚は鋸のため固着した状態で出土した。銭種は160・161が「元豊通寶」、162は「熙寧元寶」、163は162との剥離が困難なため銭種不明品、164は「■寧元■」の2文字が確認できる。C-6区より出土した。

165～171の7枚も鋸のため固着した状態で出土したものである。銭種は165～167は「祥符元寶」、168は「天二口寶」、169「治平元寶」、170は「紹聖元寶」、171は「祥符通寶」である。C-6区より出土した。

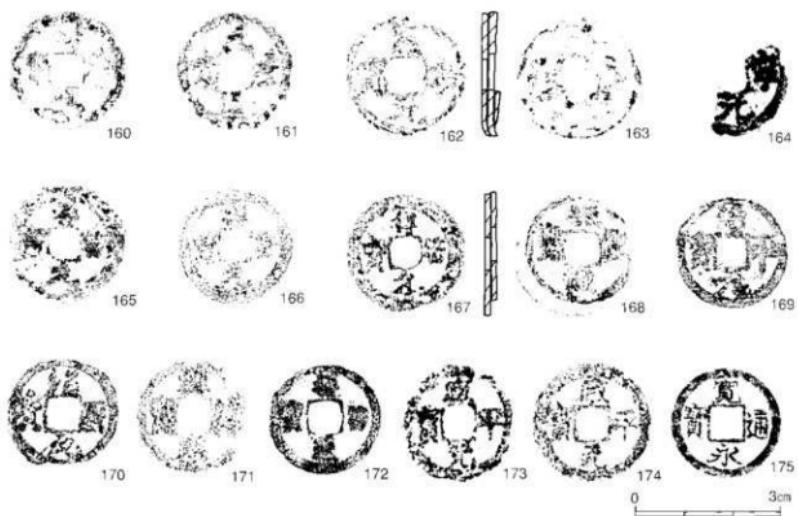
172～175はそれぞれ単独で出土したものである。172は「祥符通寶」であり、C-6区より出土した。173・174は「咸平元寶」であり、173はC-6区、174はC-5区より出土した。175は「寛永通寶」である。「新寛永」と呼ばれる種類のものであり、背面に文字等は描かれていない。C-6区より出土した。

第1加工段出土石臼（第62図）

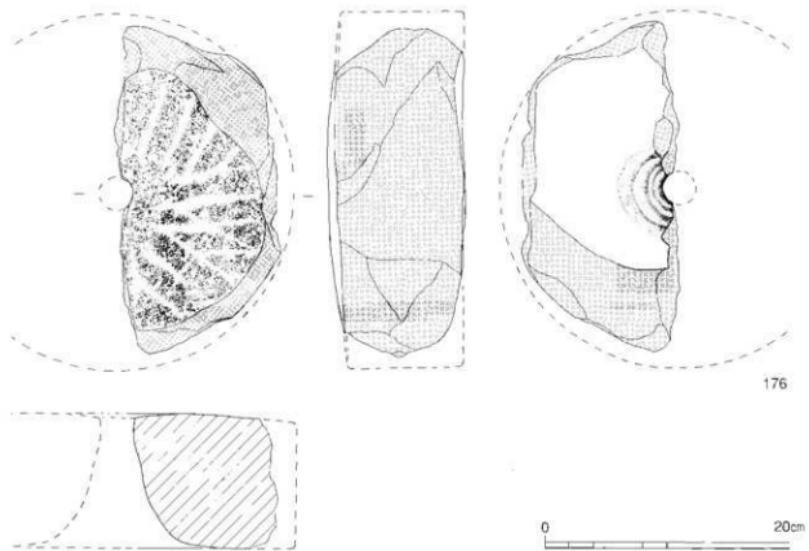
176は石製挽臼の破片であり、C-6区に位置するSK-10の上面に配置された右列の中から検出された。臼の破片であり、中央には心棒を挿入する円孔が貫通している。接觸面は中央部分が若干膨らんでおり、刻まれた溝は使用により著しく摩滅している。石材は凝灰岩製であり、法量は復元直径約29.4cm、厚さ11.0cmを測る。



第60図 第1調査区第1加工段出土
鉄製品実測図 (S=1/2)



第61図 第I調査区第1加工段出土錢貨拓本 (S=1/1)



第62図 第I調査区第1加工段出土石器実測図 (S=1/4)

第1 加工段出土五輪塔（第64図～第72図）

五輪塔の各部材は第1加工段平坦面から散乱した状態で検出されているが、集石された石材中や土壌内に落ち込んだ状態で出土したものもみられた。組み合せの判明したものはなく、また、地輪と土壌に相関関係が認められるものもなかった。

空風輪（第64図～第65図） 空風輪は16個体が出上している。いずれも一石で造られ、空輪頂部に突起をもつもの（177～188）ともないもの（189～191）に分類することができる。突起をもつものは凝灰岩製であり、もないものは砂岩製であった。

177～188は空輪頂部に突起をもつものである。このうち177～185は宝珠タイプのものである。177・178は他の風空輪に比べて比較的丁寧な調整が施されている。178は白っぽい凝灰岩が使用されており、第66図195の火輪・第70図219の地輪と同一の色調を呈する。179は表裏に平坦な面をもつ。これは正面と側面の区別をつけるためか、原材料の制約によるものと考えられる。186～188は空輪の側面が丸みをもたず直線的なタイプである。特に、188は空輪頂部に突起をもつものの、全体的なプロポーションは頂部に突起をもたない砂岩製のものに近い。

189～191は突起をもたず、空輪頂部が丸くおさめられるものである。くびれ部を浅く削り込むことで空輪部と風輪部を区別しているため、空輪部と風輪部の側面が同一直線上にある。

火 輪（第66図～第68図） 火輪は23個体が出土している。大小があり、幅に対して高さの割合が高いもの（192～205）と低いもの（206～208）に分類することができる。高いものは凝灰岩製であり、低いものは砂岩製であった。

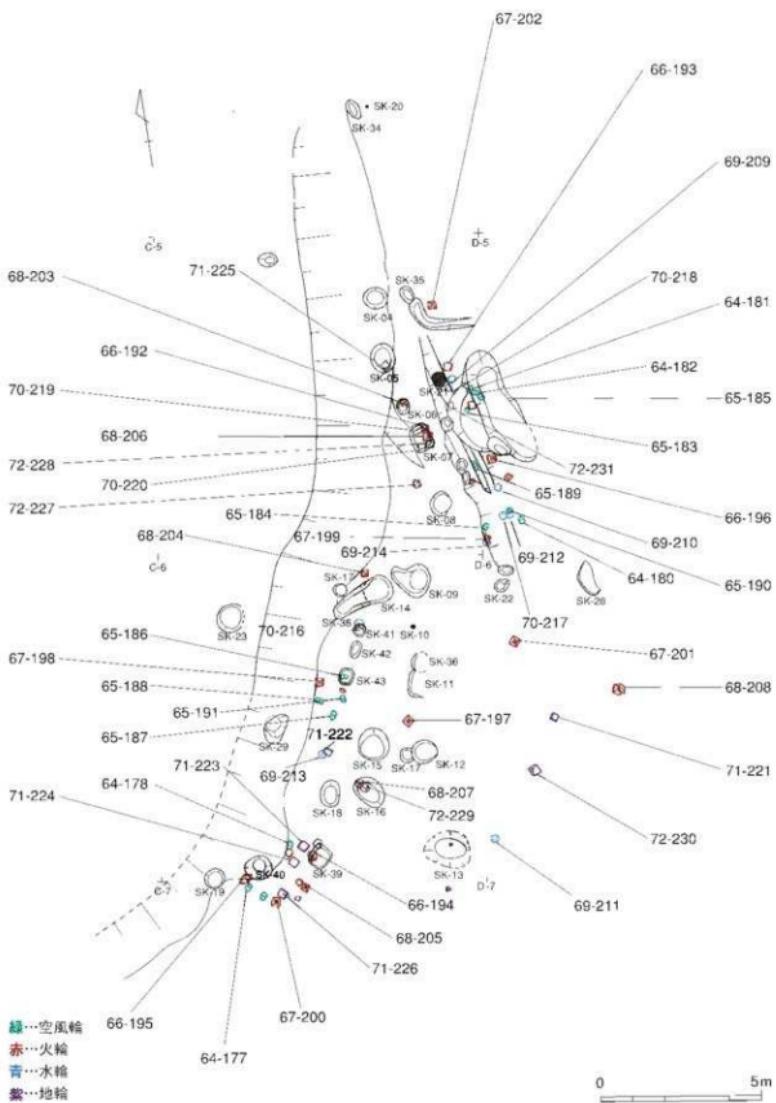
192～205は高さの割合が高いものである。このうち192・195は軒の上線と下線が平行して反り返るものである。192は幅を10とした場合、高さの割合は10:5.1である。SK-07上に配置された集石内から検出された。195は白色を呈する凝灰岩で他のものに比べて比較的丁寧な加工が施されている。幅:高さは10:5.9である。193は軒の上線と下線が反り返らずに平行して伸びるものであり、幅:高さは10:6.2である。194・196～205は軒の上線と下線が中央部では平行であるが、端になると上線だけが反り返り降棟に続くものである。高さの割合は10:5.0～10:7.1の中に分布する。203はSK-06に落ち込んだ状態で検出された。

206～208は高さの割合が低いものである。軒の上線と下線が中央部では平行であるが、端になると上線だけが反り返り降棟に続く。幅:高さの割合は10:3.9～10:4.1の中に分布するものである。206はSK-07、207はSK-18上に配置された集石内から出土した。

水 輪（第69図～第70図） 水輪は10個体が出土しており、大小がある。胴の部分が張り出すものであり、上下面是若干掘り窪められている。胴部最大径は形の崩れているものが多く、同一個体においてもばらつきがみられた。また、天地の区別をつけがたいものもあった。上面・下面の平均径を10とした場合、高さの割合が10未満になる高さが低いもの（209～214）と、10以上になる高さの高いもの（215～218）とに分けることができる。材質は高さの低いものはすべて凝灰岩製であり、高さの高いもののうち215・216が凝灰岩製、217・218は砂岩製である。

地 輪（第70図～第72図） 地輪は15個体が出土している。大小があるが、底部に荒いノミ痕が残り無調整のもの（219～226）と底部が掘り窪められたもの（227～231）に分類した。無調整のものは凝灰岩製であり、掘り窪められたものは砂岩製であった。

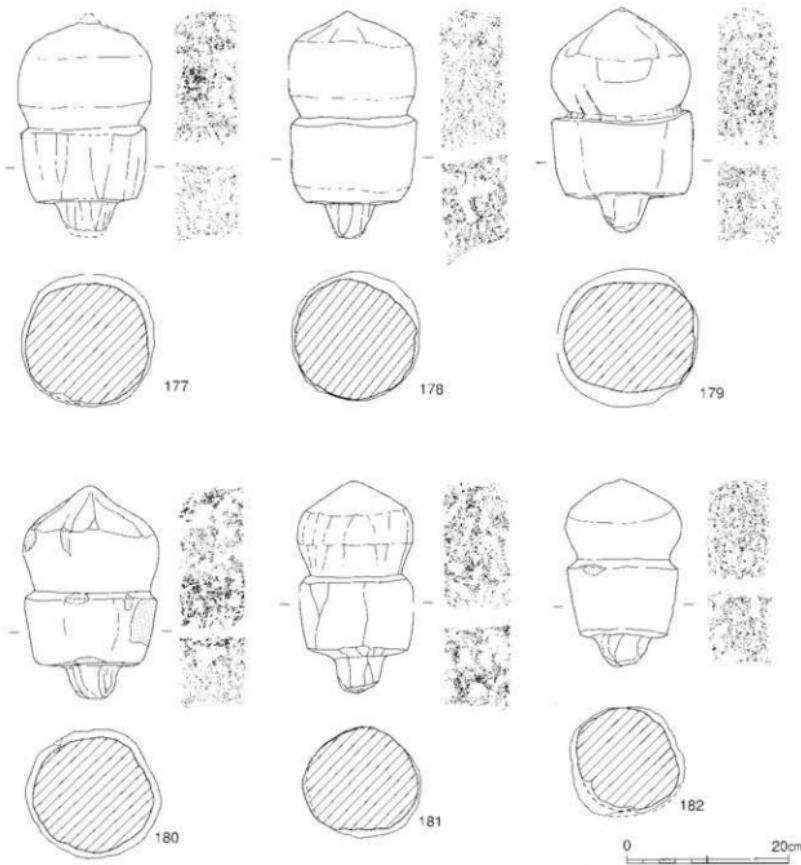
219～226は底部が無調整のものである。このうち219～223は幅に対する高さの割合が大きいも



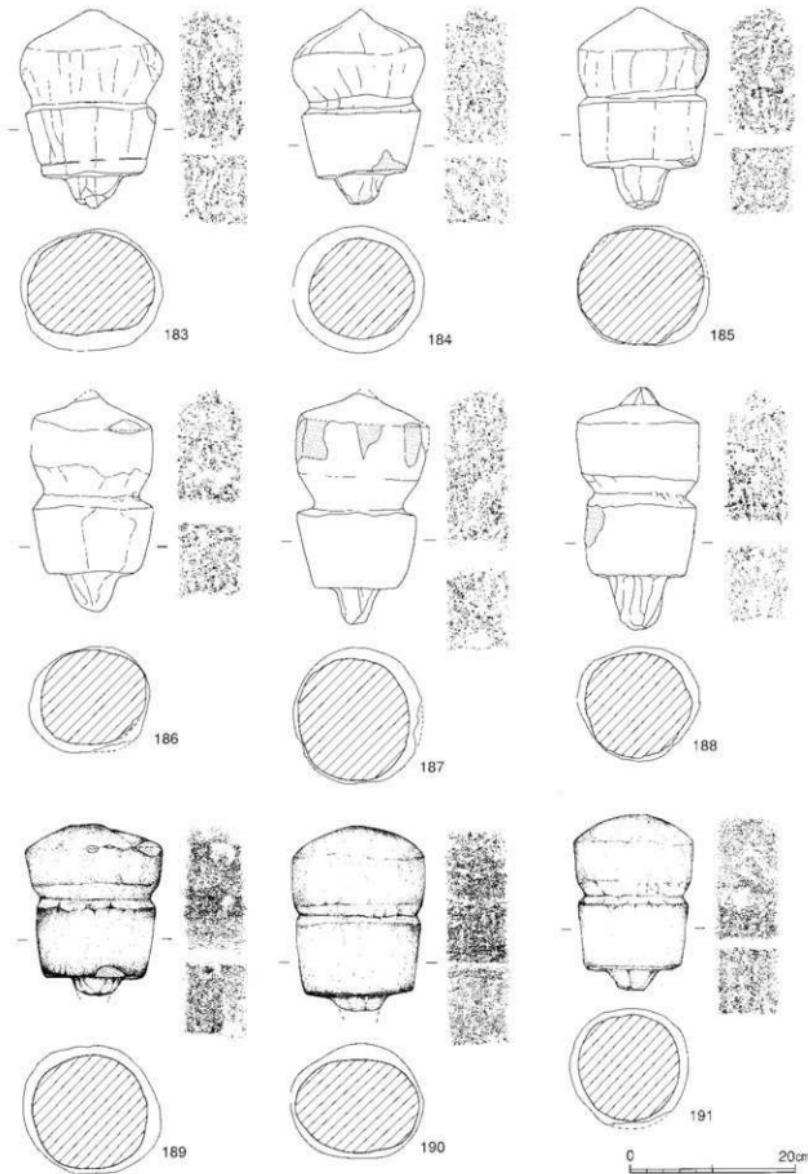
第63図 第I調査区第1加工段五輪塔出土状況実測図 (S = 1 / 150)

のである。幅を10とした場合、(幅):(高さ)が10:7.5~10:8.1の中に分布する。219は灰白色を呈する凝灰岩で他のものに比べ比較的丁寧な加工が施されている。219と220はSK-07上に配置された集石内から出土した。224~226は幅に対する高さの割合が小さなものである。(幅):(高さ)が10:6.4~10:6.9の中に分布する。225はSK-05上に配置された集石内から出土した。

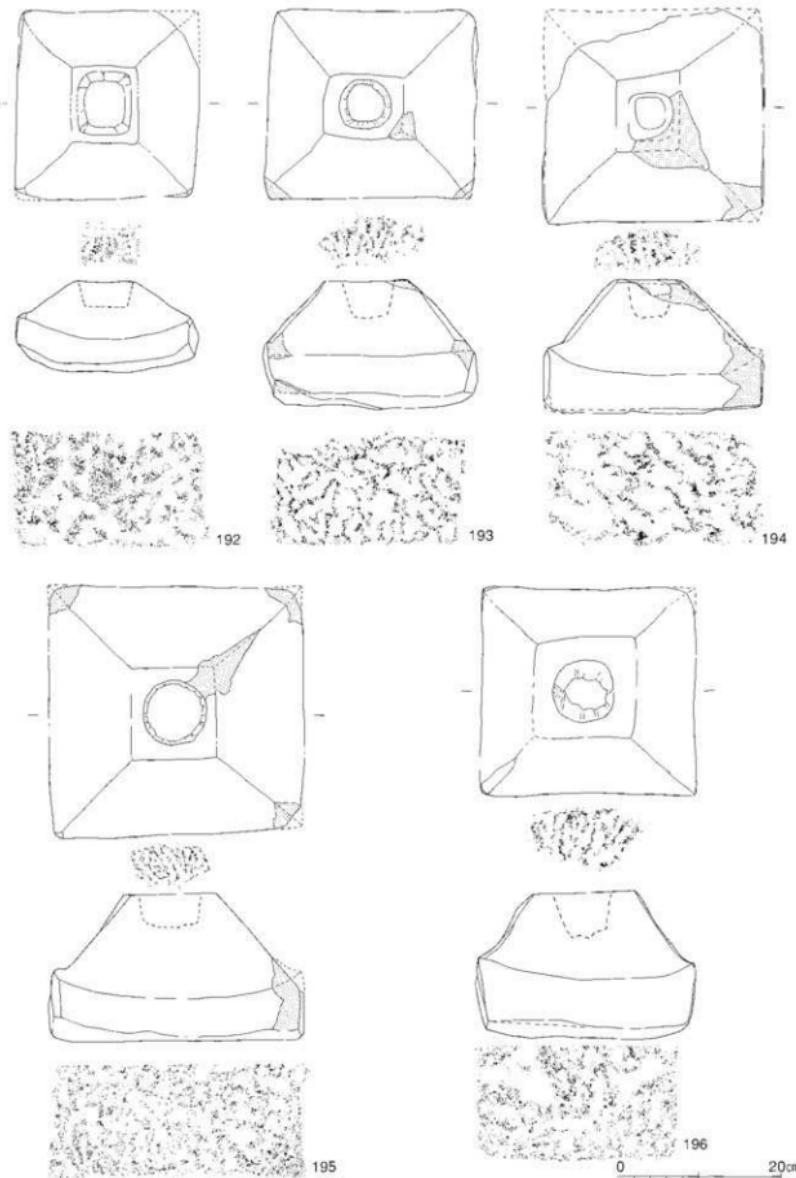
227~231は底部が掘り窪められたものである。このうち227~230は幅に対する高さの割合が大きなものである。227~229は(幅):(高さ)が10:7.5~10:7.9に分布する。230は他の地輪に比べると一回り大きなものであり、底部幅よりも上部幅が長い。また、(幅):(高さ)も約10:10で、五輪塔とは違う部材の可能性もある。228はSK-07上に配置された集石内から、229はSK-16内から落ち込んだ状態で検出された。231は幅に対する高さの割合が小さなもので、(幅):(高さ)は10:6.5である。



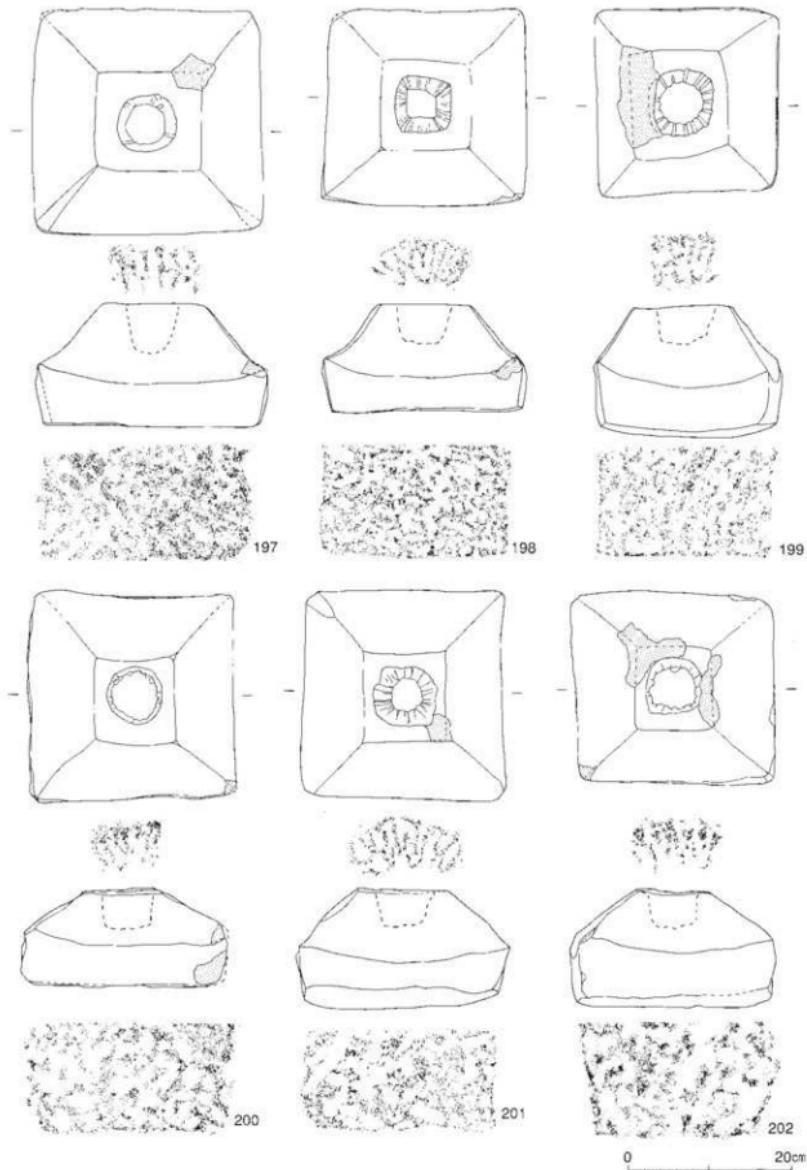
第64図 第I調査区第1加工段出土五輪塔空風輪実測図 (S=1/6)



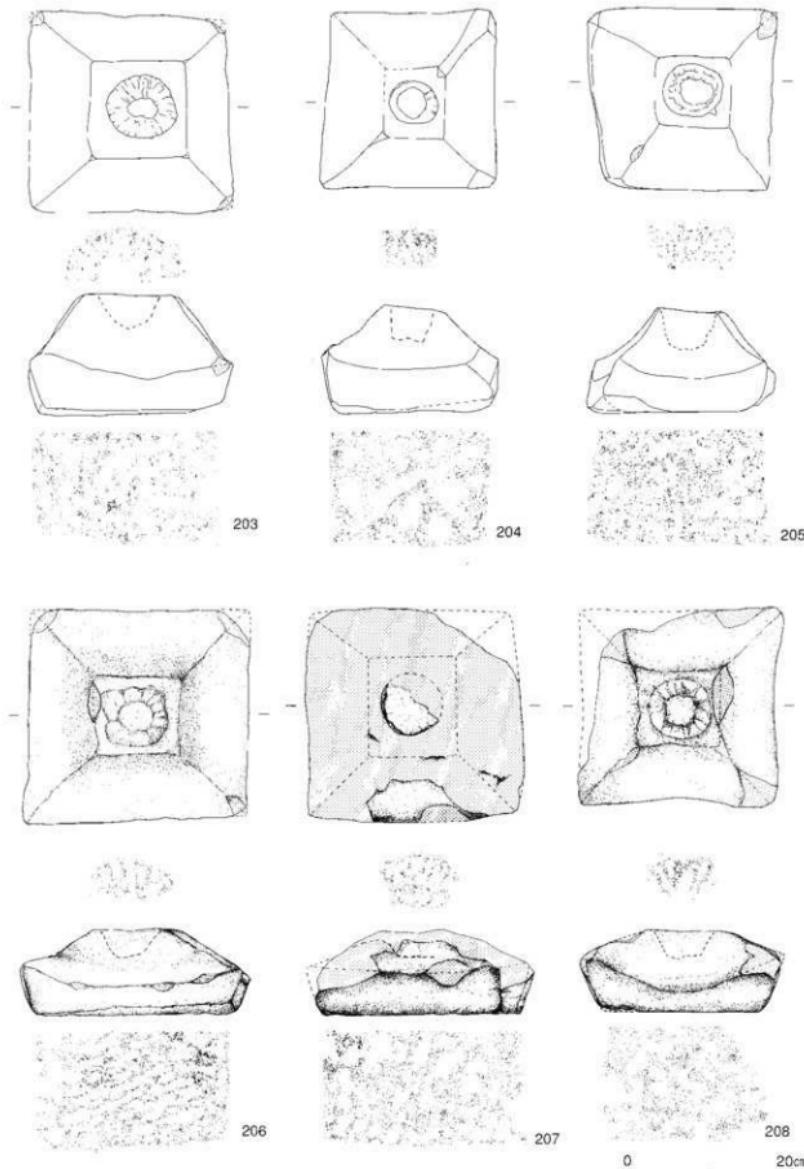
第65図 第I調査区第1加工段出土五輪塔空風輪実測図 (S=1/6)



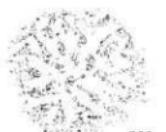
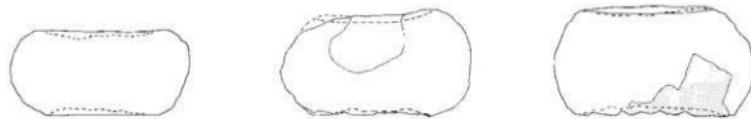
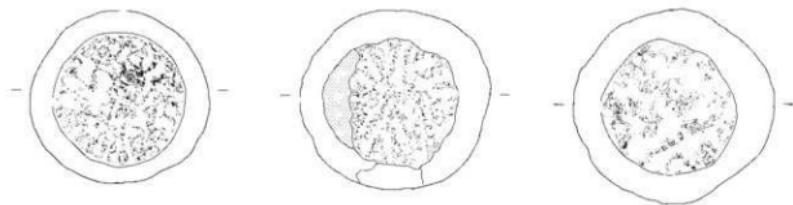
第66図 第1調査区第1加工段出土五輪塔火輪実測図 (S=1/6)



第67図 第I調査区第1加工段出土五輪塔火輪実測図 (S=1/6)



第68図 第I調査区第1加工段出土五輪塔火輪実測図 (S=1/6)



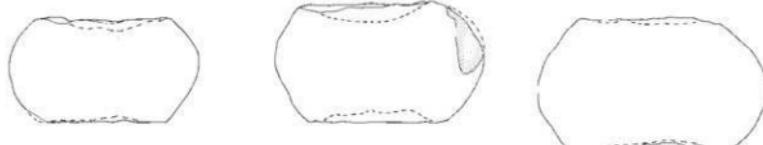
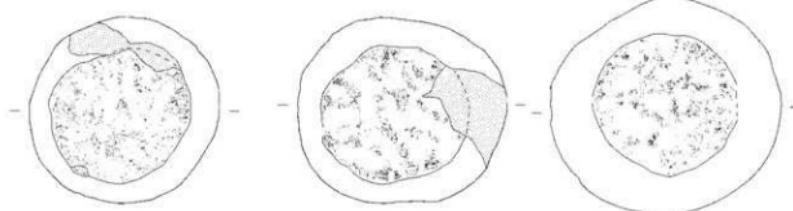
209



210



211



212



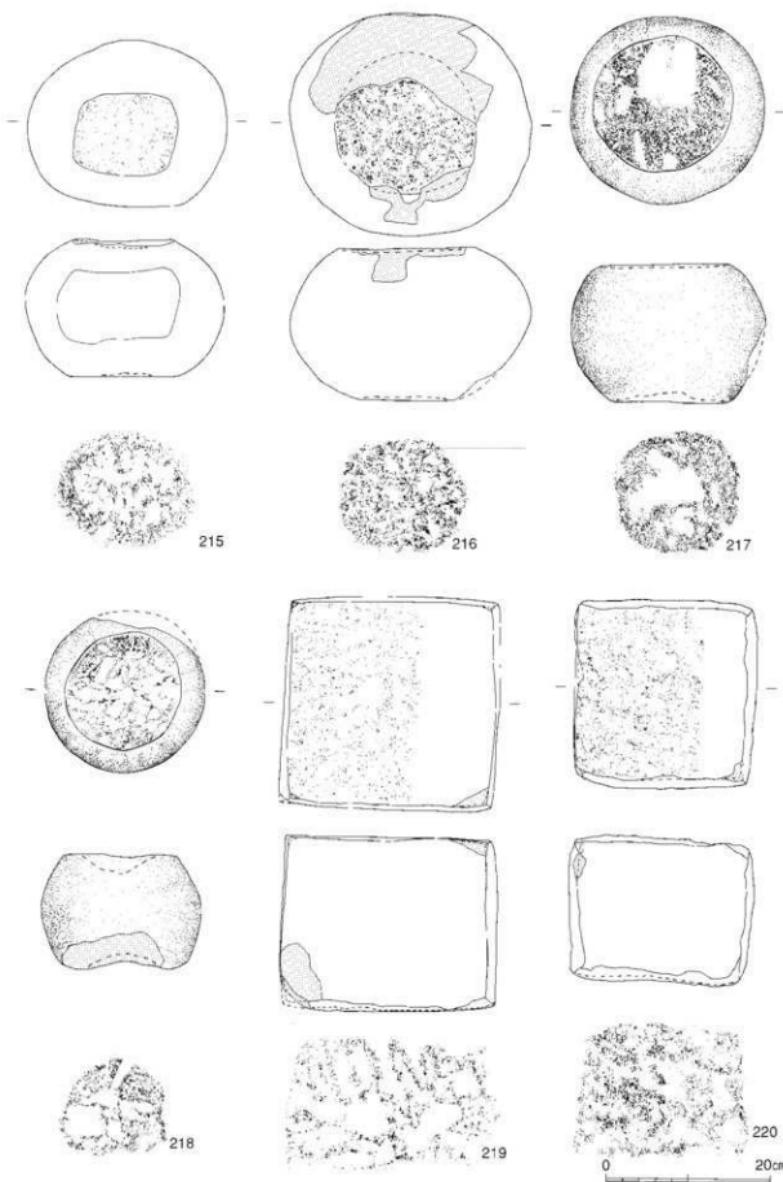
213



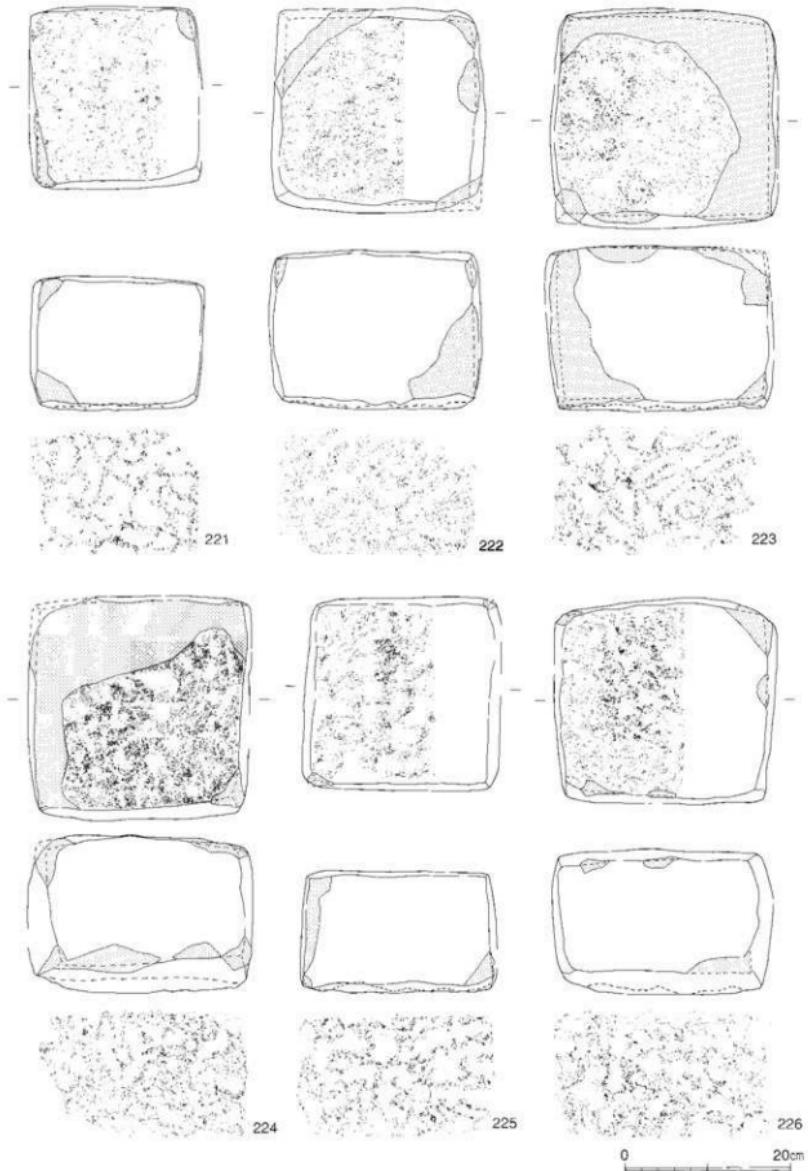
214



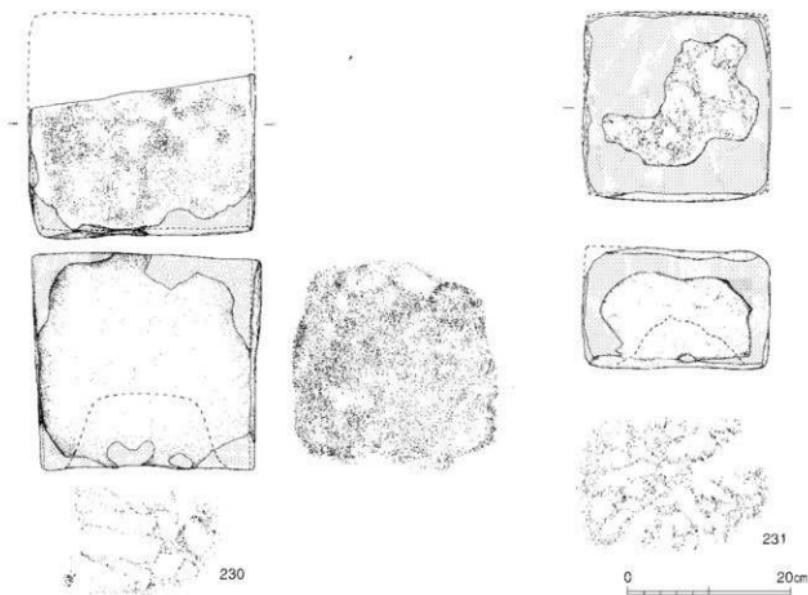
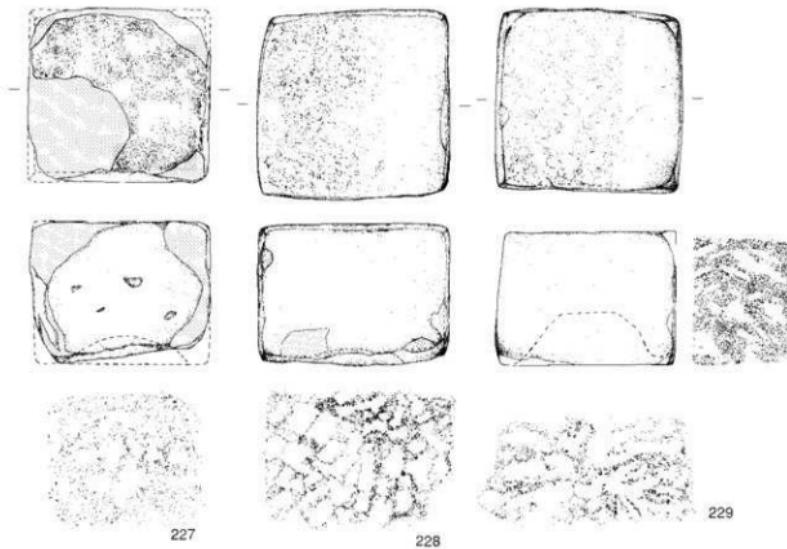
第69図 第I調査区第1加工段出土五輪塔水輪実測図 (S=1/6)



第 70 図 第 I 調査区第 1 加工段出土五輪塔水輪・地輪実測図 (S = 1 / 6)



第71図 第1調査区第1加工段出土五輪塔地輪実測図 (S = 1/6)



第72図 第I調査区第1加工段出土五輪塔地輪実測図 (S=1/6)

5 節 その他の遺構及び遺構外出土遺物

1. 土 坑(第73・74図)

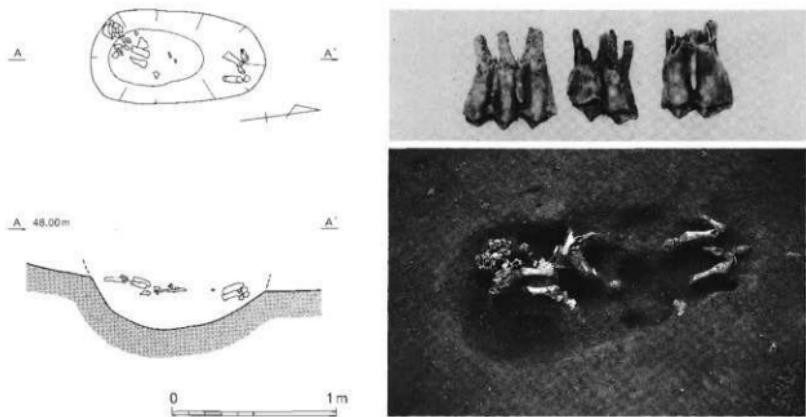
S K -25(第73図) C - 3区の標高47.75mを測る位置で検出された土坑である。平面は橢円形を呈し、規模は現状で長軸106.5cm、短軸56cm、深さ最大31.8cmを測る。地表面に近い位置からの掘り方であり、埋土は非常に柔らかいものであった。木の根かゴミ穴と考え掘削を進めたところ、底部付近から牛骨が出土した。ほぼ1体分であり、乳歛の状態からすると生後5~6ヶ月の子牛と考えられる。解体痕等は認められず、恐らくは病死した子牛を埋葬したものと考えられる。骨の状態からすると明治時代以降の非常に新しい時期のものと思われる。

S K -26(第74図) D - 6区の標高47.00~47.50mを測る位置で検出された焼土坑である。東向きの急斜面に立地し、斜面下方にあたる東側の底部及び壁は流失している。上方の西壁は良く残っており、平坦な底部から直角に近く立ち上っている。壁面は熱を受け赤褐色を呈するが、底部には変色した痕は認められなかった。規模は現状で南北軸93cm、東西軸46.5cm、深さ最大25.0cmを測る。出土遺物としては西壁下から粉状の炭が少量検出された。

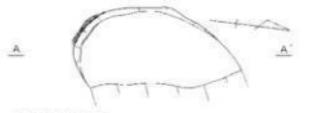
S K -27(第74図) B - 4区の標高52.25~52.50mを測る位置で検出された土坑である。平面は円形を呈し、規模は直径80cm、深さ最大43.8cmを測る。埋土は非常に柔らかく、土坑内からは多量の炭が出土した。棒状のしっかりとしたものが主体であり、壁面に熱を受けた形跡は認められなかった。消し炭を造るための土坑と思われる。

S K -28(第74図) B - 4区の標高51.50~52.25mを測る位置で検出された土坑である。平面プランは円形を呈し、規模は直径90cm、深さ最大88.9cmを測る。土坑上には集石が認められたため、土壤幕として調査を行ったが、水洗いを行った埋土中からも遺物は出土していない。

S K -29(第74図) C - 3区の標高50.00~50.75mを測る位置で検出された土坑であり、第1加工段の加工斜面に斜め方向に掘り込まれている。平面プランは不整形であり、規模は長軸96.5cm、短軸48.0cm、深さ最大86.3cmを測る。遺物は全く出土していない。



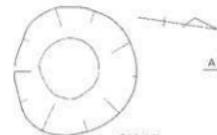
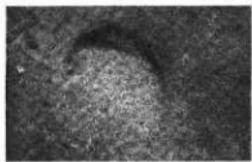
第73図 第I調査区SK-25実測図(S=1/30)



斜斜部は焼土を示す。

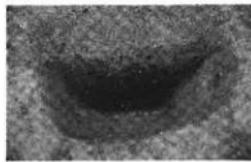
SK-26

A-A' 47.50m

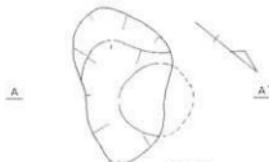


A-A' 52.50m

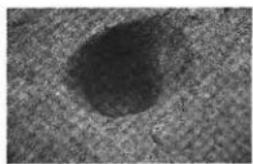
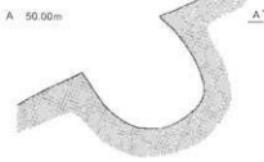
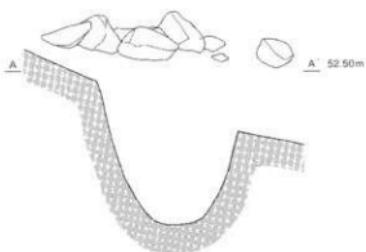
SK-27



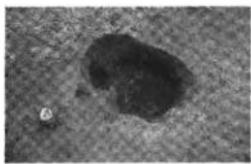
SK-28



SK-29



0 1m



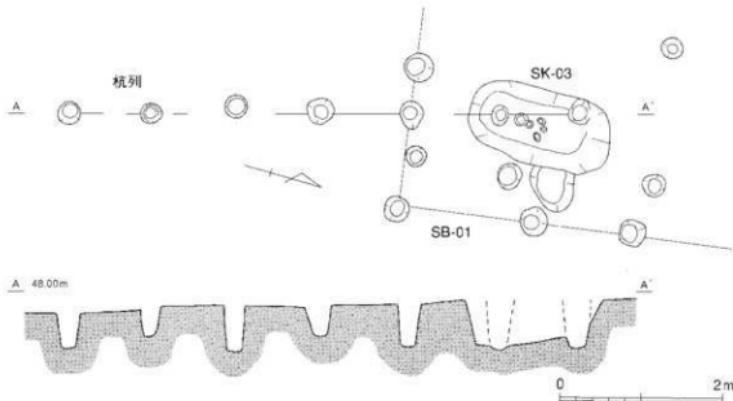
第74図 第1調査区 SK-26~29実測図 (S=1/30)

2. 杠列(第75図)

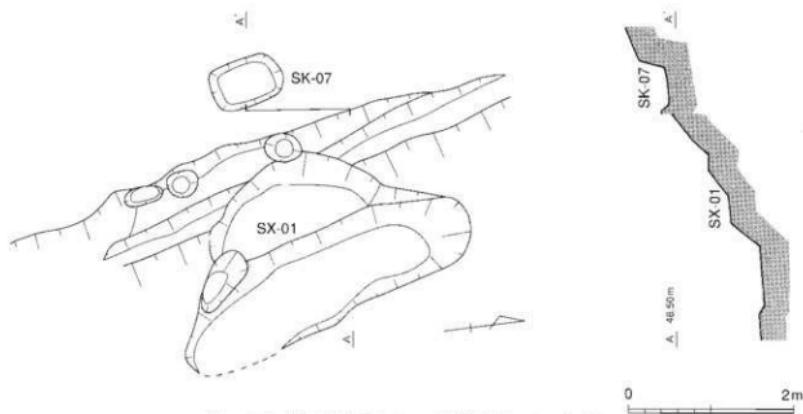
C-3区の標高47.50～48.00mを測る位置で検出されたビット群であり、一直線に並んでいることから杠列とした。規模は6.28mを測り、7個のビットがほぼ等間隔に並んでいる。ビット間の距離は真々寸法で0.98～1.11m、主軸はN-15°-Wである。SB-01と切り合い関係にあるが、新旧関係を捉えることはできなかった。ビットの規模は上緑径18～34cm、深さ最大(5.8)～57.7cmを測るものである。

3. SX-01(第76図)

東向きの急斜面から検出された性格不明の遺構である。一番東側に長軸3.83m、短軸1.03mを測る楕円形の掘り方があり、その西側に半円形を呈する掘り方が付随する。更に西側は加工段状に仕上げられ、階段状を呈している。加工段はSK-04～08の並びとほぼ平行である。



第75図 第1調査区杭列実測図($S=1/60$)



第76図 第1調査区SX-01実測図($S=1/60$)

4. 遺構外出土遺物（第 77 図～第 80 図）

遺構外出土土師器（第 77 図）

232は単純口縁をもつ壺口縁部の破片である。口縁の中程が膨らみ稜をもつものであり、端部は丸くおさめられる。口径 18.0 cm を測る。C - 3 区の東向き斜面から出土した。

233は高杯脚部の破片であり、底径 9.6 cm を測る。円筒状の脚筒部から端部に向け大きく開き、内面は絞り痕、外面には縦方向のハケメが観察できる。C - 3 区の東向き斜面から出土した。

遺構外出土陶磁器（第 78 図）

234は内面には条溝が刻まれた擂鉢の破片である。体部は逆「ハ」の字状に大きく開き、口縁端部は外側に折り返され厚く肥大している。暗赤褐色の釉薬が内外面に薄く塗布されている。時期は江戸時代のものと考えられる。C - 3 区の平坦面より出土した。

235・236は中國青花である。235は底部の破片であり、底径 7.6 cm を測る。内外面に唐草文と考えられる文様が施され、時期は16世紀前半頃のものと考えられる。C - 2 区の平坦面から出土した。236は口縁部の破片であり、内外面に團線による文様が施される。C - 3 区の平坦面から出土した。

遺構外出土鐵製品（第 79 図）

237は椀形鍛冶滓である。底部は丸みをもち一部に砂粒の付着が認められる。長さ 7.7 cm、幅 6.5 cm、厚さ 2.0 cm、重量 140.5 g を測る。C - 3 区の東向き斜面から出土した。

238は身の断面が方形を呈する鉄釘頭部の破片である。頭部は幅広に仕上げられ折り曲げられている。長さ 3.75 cm、身幅 0.4 cm、頭部幅 0.95 cm を測る。C - 2 区の平坦面から出土した。

遺構外出土錢貨（第 79 図）

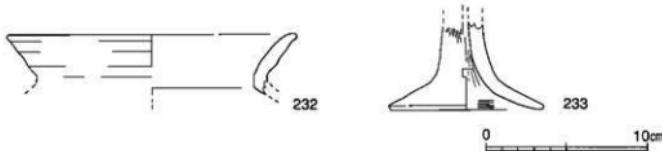
239は「寛永通寶」である。「新寛永」と呼ばれる種類のものであり、背面に文字等は描かれていない。C - 3 区から出土した。

遺構外出土石器（第 80 図）

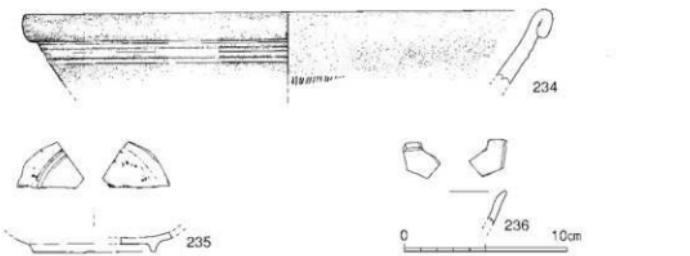
240は安山岩製の磨製石斧である。基部より刃部が広がる形をとり、刃部は丸みを帯びた両凸歯で両面から丁寧な研磨が施されている。長さ 8.4 cm、刃部幅 4.9 cm、厚さ 2.4 cm、重量 136.4 g を測る小型のものである。C - 3 区の東向き斜面から出土した。

241は結晶片岩製の玉磨砥石である。長軸 4 面が利用され、特に両側辺は使用による摩滅が著しい。表面は丸みを帯び、非常になめらかになっている。長軸の両端が欠損しているため本来の長さは判らないが、残存長 2.8 cm、幅 1.7 cm、厚さ 0.7 cm を測る。

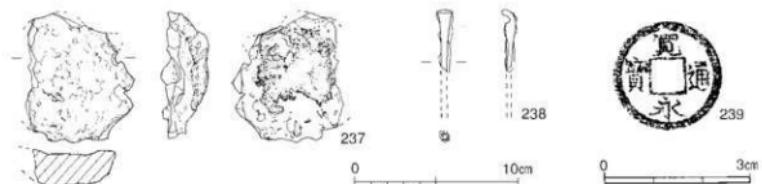
242・243は砥石である。242は頁岩製の砥石であり、表裏 2 面が使用され、片面には擦痕が多く見られる。薄い短冊形を呈し、長さ 11.0 cm、幅 2.7 cm、厚さ 0.7 cm、重量 38.6 g を測る。B - 3 区の平坦面から出土した。243は凝灰岩製の砥石である。角柱形を呈し、長軸 4 面が使用されている。不定方向に擦痕が入り摩耗が著しい。長さ 23.8 cm、厚さ 7.1 ~ 8.9 cm、重量 2,900 g を測る。



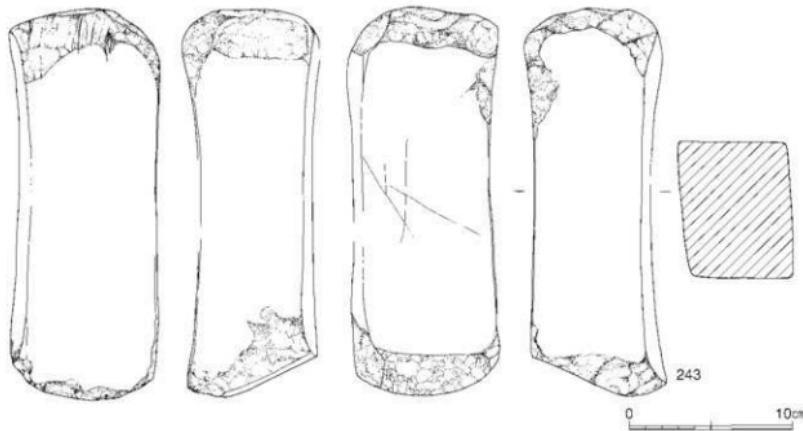
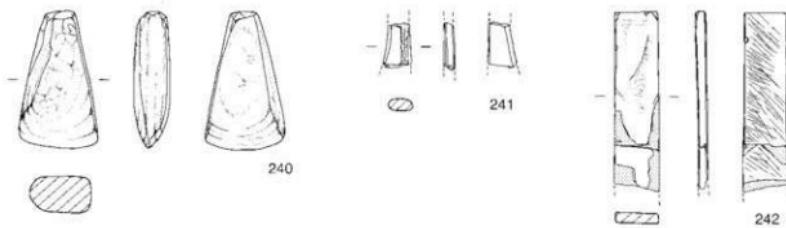
第 77 図 第 1 調査区遺構外出土土師器実測図 (S = 1 / 3)



第78図 第1調査区遺構外出土陶磁器実測図 ($S = 1/3$)



第79図 第1調査区遺構外出土鉄製品実測図 ($S = 1/3$)、銭貨拓本 ($S = 1/1$)



第80図 第1調査区遺構外出土石器実測図 ($S = 1/3$)

【註】

- 註1 『青木遺跡第Ⅱ調査区終了報告』 八雲村教育委員会 1996年9月 (P-13)
- 註2 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌第11集』 1994年3月 (P-16)
- 註3 玉湯町立出雲玉作資料館勝部衛氏にご教授いただいた。 (P-20)
- 註4 島根大学総合理工学部赤坂正秀教授に分析いただいた。 (P-20)
- 註5 広島県立美術館村上勇氏にご教授いただいた。 (P-29)
- 註6 島根県銃砲刀剣類登録審査委員安部吉弘氏にご教授いただいた。 (P-54)
- 註7 国立歴史民族博物館西本豊弘氏にご教授いただいた。 (P-67)
- 註8 註5と同じ。 (P-70)
- 註9 註3と同じ。 (P-70)

【参考文献】

- ・瀬古諒子 「2. 松江・渋ヶ谷窯跡について」『松江考古 第9号』 松江考古学談話会 2001年3月
- ・「宮地遺跡・大木遺跡・大木古墳群・並田山遺跡・大村遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告113』 岡山県教育委員会 1996年3月
- ・『第2御商業川地造成工事に伴う袋尻遺跡群発掘調査報告書』 松江市教育委員会 1998年3月
- ・『県道安米布部線改良工事に伴う清水大日堂裏古墓発掘調査報告書』 安来市教育委員会 1998年3月
- ・『一般国道9号安米道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅶ 一島田池遺跡他一』 島根県教育委員会 1997年3月
- ・『島根県埋蔵文化財調査報告書 第III集』 島根県教育委員会 1971年3月
- ・「中近世土器の基礎研究 XIV」「京都系土器皿の伝播と受容 中世後期を中心に」 日本国賀土器研究会 1999年12月
- ・『史跡松江城発掘調査』「二ノ丸番所跡」 松江市教育委員会 1999年3月
- ・網野善彦・石井 進 「中世の都市と墳墓 一の谷遺跡をめぐって」 1988年8月
- ・『日本出土の貿易陶磁 西日本編2』 国立歴史民俗博物館 1993年
- ・永井久美男編 「中世の出土銭」「出土銭の調査と分類」 兵庫理藏銭調査会 1994年10月
- ・『出土錢貨 第15号』 出土錢貨研究会 2001年5月

V 第Ⅱ調査区

第1章 調査の経過と概要

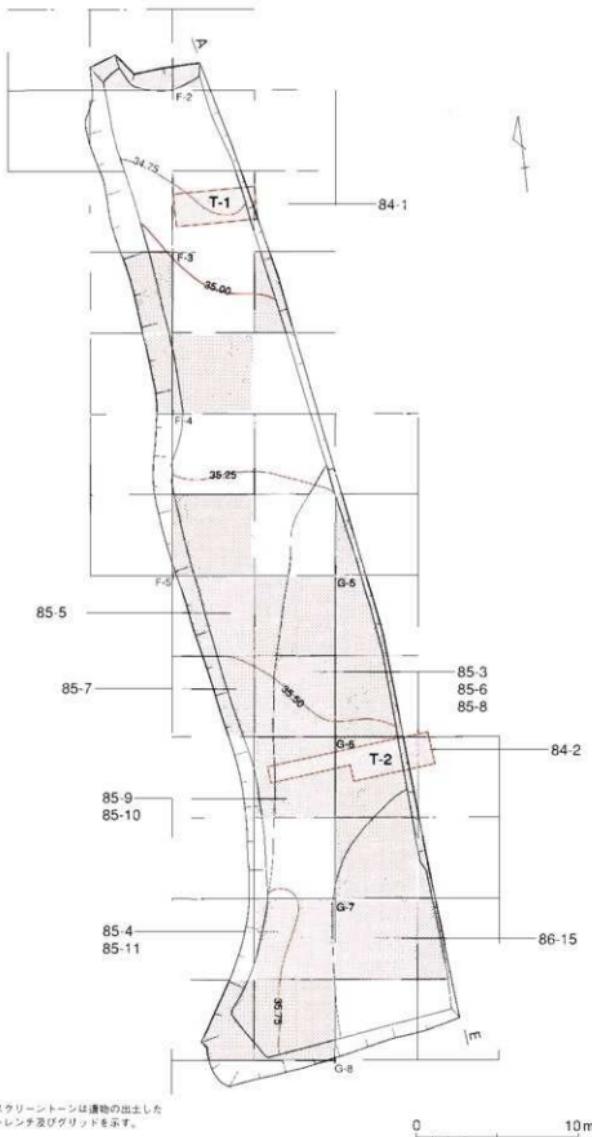
第Ⅱ調査区は東岩坂の谷に位置し、調査地で標高34.50～36.00mを測る。主として東岩坂川の洪水、土石流およびその後の沖積作用によって形成された遺跡である。

今回の調査では遺構は検出されなかったが、縄文時代晚期から弥生時代後期の遺物が混在する礫層が検出された。遺物の出土状況は上層部の粘土層を取り除くと河川堆積物である礫層(第7・11・13・14・15・17・19層)が複雑に堆積しており、この上面部分を中心に出土している。礫層を5～64cm掘削したが礫層中から出土する遺物はほんの僅かであり、重機により一部を更に1.5mほど掘り下げてみたが、礫が大きくなるばかりで遺物が出土しないことから調査を終了した。

遺物の掲載にあたっては層位的に遺物の新旧を把握することはできなかったことから、層序別ではなく、縄文土器、弥生土器、石器にわけて整理することにした。

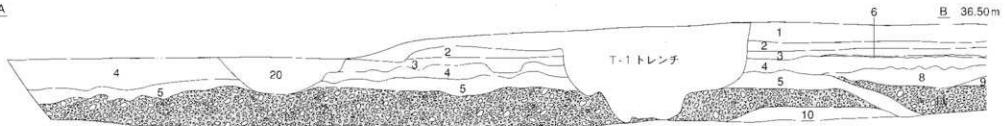


第81図 第Ⅱ調査区配置図 (1:1000)

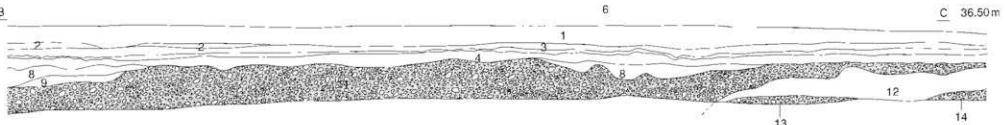


第82図 第II調査区造構位置図 ($S = 1/300$)

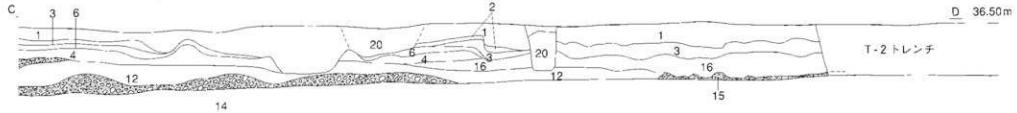
A



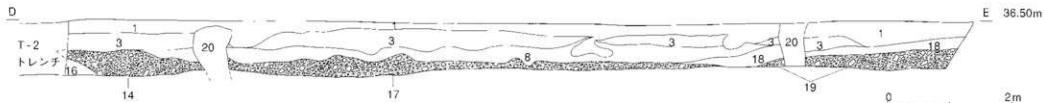
B



C



D



- 1. 赤褐色粘土層（礫多く含む）
- 2. 褐色粘土層（小礫含む）
- 3. 灰色粘土層
- 4. 灰色粘土層（3. よりやや明るい）
- 5. 灰色リーフ色粘土層
- 6. にぶい黃褐色粘土層
- 7. 灰色砂礫層
- 8. 鮎オリーブ灰色土層（砂粒多く含む）
- 9. 灰色砂質土層
- 10. 灰色白砂礫土層
- 11. 灰色砂礫土層Ⅱ
- 12. オリーブ灰色粘土層（小礫含む）
- 13. 灰色砂礫層Ⅲ
- 14. 灰色砂礫層Ⅳ
- 15. 灰色砂礫層Ⅴ
- 16. オリーブ灰色粘土層（小礫含む、12. よりやや暗い）
- 17. 灰色砂礫層Ⅵ
- 18. 青灰色粘土層（砂礫多く含む）
- 19. 灰色砂礫層Ⅶ
- 20. 搾乱（暗渠、排水溝）

第83図 第II調査区 土層堆積図 (S = 1 / 60)

第2章 調査の結果(遺物)

1. 縄文土器(第84図)

第84図1は晩期の突帯文土器である。体部はやや斜め上方に向け真っ直ぐに立ち上がり、口縁部付近が若干内側に向け屈曲し、口縁端部に接して刻み日を施す突帯が張り付けられている。調整は内外面ともに板か二枚貝による条痕が認められ、外面の一部には炭化物が付着している。法量は口径25.9 cmを測る。T-1トレンチの灰色砂疊層Ⅰ上面より出土した。

第84図2は口縁端部が先細りに仕上げられた器種不明品である。調整は内外面ともにナデが施されている。T-2トレンチ灰色砂疊層V上面より出土した。

2. 弥生土器(第85図)

第85図3～5は中期後半から中期末にかけての壺である。3・4は口頭部が「く」の字に屈曲し、屈曲部外間に指頭压痕文帯をもつものであり、口縁端部は若干拡張さ

第84図 第II調査区出土縄文土器実測図(S=1/3)

れ端部に面をもつ。調整は3が摩滅のため不明、4は口縁端部に凹線文が施されている。5は「く」の字形口縁の端部が拡張され2条の凹線が巡るものである。調整は胴部外側がハケメ、内面にはナデが施されている。口径は3が22.0 cm、4が18.2 cm、5が17.2 cmを測る。

第85図6・7は南講武草田遺跡の編年で草田2期に含まれる後期中葉の壺である。外反する複合口縁をもち、外面には擬凹線文が施されている。口径は6が13.2 cm、7が15.2 cmを測る。

第85図8～10は草田3期に含まれる後期後半の壺である。8は外反する口縁の先端が肥厚され面をもつものであり、口縁部外側に擬凹線文が施されている。9は外反する口縁部外側に5条1組の擬凹線文が2段にわたって施されているが、上段のものは直線にならずにややくねっている。10は口縁が外反して開き、特に内面は中途で折れ曲がって外方に開き、口縁端部は僅かながら先細りとなつて先端は丸くおさめられている。調整は口縁部外側に多条の擬凹線文が施されている。口径は8が14.2 cm、9が19.4 cm、10が15.4 cmを測る。

第85図11は器台受部の破片である。調整は内面が幅の広いミガキ、外側には擬凹線文が施され、一部に赤色顔料が付着する。時期は後期中葉の草田2期と考えられる。

第85図12は高坏の破片と考えられる。体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反し端部は丸くおさめられている。調整は風化が著しく不明である。法量は口径19.7 cmを測る。

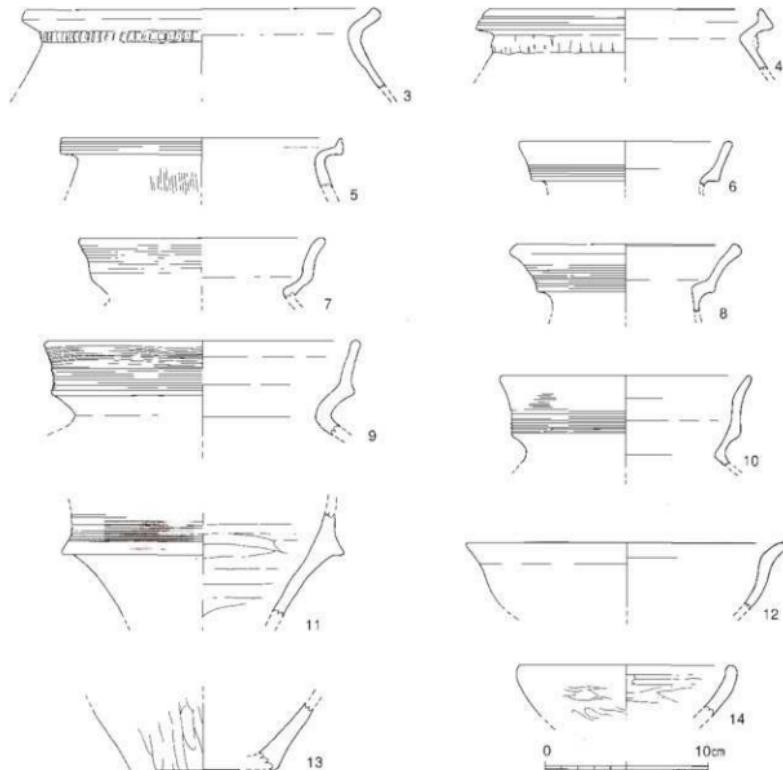
第85図13は平底を有する壺底部の破片である。調整は体部外側に縦方向のミガキが観察できるが、内面は摩滅のため判然としない。法量は底径9.0 cmを測る。

第85図14は器種不明品である。口縁の先端付近が内側に向け屈曲しており、端部は丸くおさめられている。調整は内外面に幅の狭いミガキが施されている。法量は口径13.6 cmを測る。

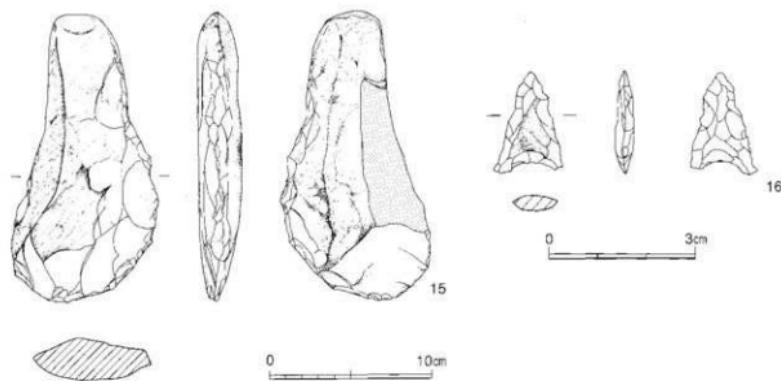
3. 石 器 (第86図)

第86図15は打製石斧である。表裏に主要剥離面を大きく残し、片側の側縁部から刃部にかけ荒い一次加工が施されているが、もう一方の側縁部から基部にかけては無調整のままである。石材は流紋岩製である。長さ17.9 cm、刃部幅8.7 cm、厚さ2.6 cm、重量484.9 gを測る。

第86図16は凹基無茎式の石錐であり、縁辺には比較的丁寧な二次加工が施されている。石材は安山岩製である。長さ2.1 cm、幅1.4 cm、厚さ0.4 cm、重量0.7 gを測る。



第85図 第II調査区出土弥生土器実測図 (S = 1 / 3)



第86図 第II調査区出土石器実測図 (S=1/3・1/1)

[註]

- 註1 島根県立三瓶自然館指導員中村唯史氏のご教示による。 (P-73)
- 註2 赤沢秀則「1. 出土遺物・時期」[講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡] 鹿島町教育委員会 1992年3月 (P-77)

- ・縄文土器の観察にあたっては、足立克己氏、柳浦俊一氏にご教示頂いた。
- ・弥生土器の観察にあたっては、池淵俊一氏にご教示頂いた。
- ・石器の石材については中村唯史氏にご教示頂いた。

VI 結 語

谷ノ奥遺跡の発掘調査では、第Ⅰ調査区の丘陵上より古墳4基、落とし穴3個(SK-01~03)、土壙墓21個(SK-04~24)、掘立柱建物跡(SB-01)1棟、杭列1列、性格不明遺構1個(SX-01)、溝3本(SD-01~03)、加工段2段(第1・第2加工段)と多数の1坑及びピットを検出した。また、東岩坂の谷に位置する第Ⅱ調査区からは遺構は検出されなかつたが、縄文時代晩期から弥生時代後期の遺物が発見された。

以下、第Ⅰ調査区の古墳と火葬墓、掘立柱建物跡の概要を述べ、まとめとしたい。

谷ノ奥古墳群

墳 丘 谷ノ奥1号墳の墳丘及び主体部は畑地の開墾により完全に消滅し、周溝だけしか検出されていない。よって、墳形及び規模は不明である。2号墳は、南西-北東6.5m、南東-北西6.8mの方墳である。盛土は斜面下にあたる南側が厚く、地山面から計測して約1.48mの厚さで盛られていた。3号墳は、東-西7.5m、南-北8.1mの方墳である。盛土は斜面下にあたる東側が厚く、地山面から計測して約1.54mの厚さで積まれている。4号墳は、中・近世の土壤幕により墳丘及び主体部は完全に破壊され、周溝と思われる溝だけしか検出されていない。幅1.62mを測る周溝が「コ」の字状に廻ることから方墳と考えられる。これらは、墳丘の規模としては村内の群集墳と大きく変わるものではなく、一般的な規模といえる(第4表参照)。

主体部 主体部を検出できたものに2号墳と3号墳がある。2号墳は主体部を墳丘の対角線上に配置している。このような主体部の配置は意外に例が多く、増福寺20・21号墳、土井13号墳で確認されている。また、主体部からは須恵器壺・刀子・泥岩製白玉が出土しているが、須恵器壺の出土状況に特徴がある。この壺は棺上に置かれていたと考えられるものであり、主体部検出面からつぶれた状態で出土した。同時期の古墳で、主体部上に遺物が置かれた例としては勝負谷1号墳がある。第1主体部上には円筒埴輪の密集部分があり、円筒埴輪3個が幕壇を表示するがの如く等間隔に並べられていた。この他、松江市下東川津町の八色谷1号墳からは棺上に置かれた須恵器壺が出土している。

3号墳は2つの主体部が平行に配置されているものであり、新旧関係を確認することはできなかつた。2つの主体部が同時に造られたものないと仮定した場合、予め主体部を片方に寄せて作っていたことになる。この点で、対角線上に主体部を配置する2号墳被葬者との違いが注目される。同様の配置をもつものに同丘陵北西に位置する中山2号墳が知られている。

いずれも主体部の頭位は判らなかつたが、主軸は2号墳の主体部はN-36°-W、3号墳第1主体部がN-5°-W、第2主体部がN-6°-Wであった。村内の中期古墳においても頭位が判明したものは少ないが、主体部の主軸はN-0°(北)からN-90°-W(西)方向に向くものが大部分を占めており、一つの特徴といえるかもしれない。

築造時期 古墳築造の時期であるが、主体部からは時期を決定する遺物が出土していない。1・3・4号墳の周溝から出土した須恵器壺をみると、やや小ぶりで、口径に比べて器高が高く、丸みを帯びている。口縁端部に比較的明瞭な段をもち、出雲地域の須恵器縄年に照らしてみると、1期の標識となっている樂師山古墳(松江市苔田町)の壺よりは各部の退化が認められる。しかし、口径が大

型化し、蓋の突帯が沈線によって作り出される2期の後谷荒神谷7号墳(松江市佐草町)や中山2号墳(八雲村東岩坂)の蓋坏まではどちらず、出雲1期のうち、新しい部類に属すものと考えられる。これらを占墳築造時の供獻遺物と考えるならば、1・3・4号墳は出雲1期の新しい段階で築造されたものといえる。なお、2号墳の周溝と3号周溝は切り合ひが認められ、3号周溝(古)-2号周溝(新)であった。

谷ノ奥古墓群

調査地は明治22(1889)年の『八雲村人字東岩坂切図』によると小字名を「法正寺」と呼び、東岩坂にある星上寺の末寺が置かれていたという印承も残る場所である。この法正寺は、江戸時代の『雲陽誌』や『寺院明細帳』に記載はなく、地名のみが残っている。今回、この印承を裏付けるように多数の墓壙が検出された。内訳は座棺墓1個(SK-24)、火葬骨を伴う土壙15個(SK-05・06・08~14・17・18・20~23)、遺物より火葬墓と考えられるもの5個(SK-04・07・15・16・19)、遺物は出土していないが立地や埋土より墓壙の可能性のあるもの11個(SK-28・34~43)である。

火葬墓 火葬墓は加工段平坦面及び加工段上に散在的に分布しているが、SK-04~08のグループ(以FA群と呼ぶ)、SK-09~13(SK-36)のグループ(以下B群)のようにほぼ一直線に並ぶものもある。土壙の規模は比較的浅いものが多く、A群とB群の間に副葬品や規模に差は見られなかつたが、埋土には明確な違いが認められた。B群は炭化物を多く含んだ黒色土層であるのに対し、A群は炭化物を含まず地山に近い色を呈している。

ここで埋葬方法について若干触れておく。調査地内から火葬場跡は検出されていないことから、どこか別の場所で荼毘に付したものと考えられる。黒色土を含む土壙(第7表参照)は、火葬骨を容器等に入れず灰ごと土壙内に埋納したものであり、火葬骨は土壙内の黒色土層中から散在的に出土している。このため相対的にいって黒色土層をもつ土壙の方が鉄釘・骨・錢貨の出土量が多い。地山に近い褐色土は基本的には火葬骨だけを持ち帰り埋納したと考えられるが、容器等の痕跡は認められなかつた。注目されるのが、SK-10・20・21である。土壙の平面プランは検出できなかつたが、火葬骨が狭い範囲にまとまって出土した。特に、SK-20については円筒状にまとめて217.1gもの火葬骨が出土しており、容器に入れられ埋納されていた可能性がある。

副葬品には錢貨、土師質土器、陶磁器、鉄製輪鉛、毛抜があるが、錢貨の中には熱のため変形したものもあることや、錢文がはっきりせず脆いものが多いことから火葬前から遺体と一緒に木棺内に入れられていたものと思われる。土師質土器や陶磁器については2次的な焼成が見られないことから火葬骨埋納時に供獻されたものであろう。また、土壙内の土師質土器と加工段の遺構外から出土した土師質土器には違いが認められた。遺構外からは小ぶりな土師質土器が多く、煤が付着しているものが多数を占めている。一方、土壙内から出土した土師質土器に煤の付着が認められたものはSK-09から出土した39図-55の1点だけであった。

五輪塔 土壙上に置かれていた五輪塔の各部材は第1加工段平坦面から散乱した状態で検出されているが、集石された石材中や土壙内に落ち込んだ状態で出土したものもあった。組み合わせの判明したものはなく、また、地輪と土壙に相關関係が認められるものもなかった。平坦部から出土した五輪塔の分類表(第5表参照)を見ると25基以上が存在していたこととなり、計算上は8割以上の土壙墓が五輪塔を伴っていたことになる。

時期 遺物から火葬墓の時期を考えたい。SK-18から出土した土師質土器はすべてが糸切りをもつものであり、16世紀中頃に多く見られる中国青花皿が共存している。このことからSK-18は他の京都系の土師質土器を伴う土壌より古い可能性がある。この他、16世紀末から17世紀初頭の唐津焼皿が副葬された土壌が2個(SK-05・19)見つかっている。出土銭貨については寛永通寶を含んでいるものがないことから17世紀前半頃までの火葬墓群といえる。

掘立柱建物跡

第I調査区からは短辺2.85m、長辺5.03mを測る掘立柱建物跡1棟が検出された。時期は定かでないが、P1内より15世紀頃と考えられる中国製青磁碗口縁部の破片が出土している。古墓群はこの建物跡の南側から検出されたものであり、北側からは確認されていない。古墓群に関連した何らかの施設であった可能性もあり、今後の検討課題としたい。

以上、今回の発掘調査の成果をまとめてみた。調査により中期古墳の資料が増加し、八雲村の平野周辺における古墳の様相を知る貴重な資料になるものといえる。また、出雲地域では調査例の少ない中・近世墓が多数発見され、農村集落内における良好な埋葬資料を得ることができた。

[参考文献]

- ・『勝負谷1号墳発掘調査概報』八雲村教育委員会 1974年3月
- ・『国道431号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV』『八色谷古墳群』島根県教育委員会 1993年3月
- ・『中山2号墳・中山五輪塔群』八雲村教育委員会 1982年3月
- ・『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12』『社日古墳』島根県教育委員会 2000年3月
- ・網野善彦・石井 進『中世の都市と墳墓 一の谷遺跡をめぐって』1988年8月
- ・『中近世土器の基礎研究XV』『京都系七器皿の伝播と受容 中世後期を中心に』日本中世土器研究会 1999年12月
- ・『日本出土の貿易陶磁 西日本編2』 国立歴史民俗博物館 1993年
- ・『日本出土銭総覧 1996年版』 兵庫埋蔵銭調査会 1996年5月
- ・『出土銭貨 第15号』 出土銭貨研究会 2001年5月
- ・『八雲村の遺跡』八雲村教育委員会 1978年3月
- ・『土井13号墳発掘調査報告書』八雲村教育委員会 1979年3月
- ・『増福寺古墳群発掘調査報告書』八雲村教育委員会 1981年3月
- ・『増福寺古墳群発掘調査報告書』八雲村教育委員会 1982年3月
- ・『八雲村誌』八雲村 1998年12月

第4表 八雲村内の中期古墳

単位(m)

名称	墳形	墳丘規模 ()内は出土	主体部	主体部の規模と平面形 (長さ×幅×深さ)	北体部の 主軸	主体部断面品	周溝規模 (幅×深さ)	北体部以外からの 出土遺物	発掘時期	備考
1 増福寺 1号墳	半球 推定方形	10.0× 2.3 (0.6)	1基 一部消滅	(0.5)×0.6×0.22 長方形?	N-36°W	消滅	3.0×0.9	周溝:鉄器等 1点		
2 増福寺 2号墳	半球 3辺方形	10.0×12.0×1.2 (0.3)		消滅	消滅	消滅	1.5×0.2	周溝:土師器高环 6点、陶片1点	増福寺Ⅰ期 一出土1回	
3 増福寺 3号墳	方形	14.0×14.0×1.7 (0.5)	1基 木棺直葬	2.35×0.85×0.25 長方形	N-57°W	鉄器2点、 尖頭錐6点	?	周溝:土師器高环、 埴輪(火門輪)、 朝部形埴輪・形象 埴輪	3号(古)ー 増福寺2号(新)	
4 増福寺 4号墳	長方形	10.5×12.5×2.0 (0.7)	1基 木棺直葬	2.05×0.56×0.42 長方形	N-40°W	尖頭錐約20点	2.0×0.5	周溝:土師器高环	4号(古) 増福寺22号(新)	
5 増福寺 5号墳	方形	8.5×8.5×1.2	未調査	未調査	未調査	未調査	?	周溝:土師器高环	増福寺Ⅱ期	周溝のみ発掘
6 増福寺 20号墳	方形	10.0×11.0×2.3 (1.5)	1基 木棺直葬	2.75×1.10×0.5 長方形	N-66°W	無し	2.3×0.5	周溝:土師器持ち縛 1点、土師器高环、 增福寺Ⅱ期 同埋	20号(古)ー 増福寺21号 (新)	主体部は墳丘の 対角線上
7 増福寺 21号墳	長方形	9.0×11.0×1.8 (1.1)	1基、木棺直 葬と推定	3.0×0.8×0.4 長方形	N-87°W	無し	2.5×0.5	周溝:土師器高环、 周溝器	4号(古)ー 増福寺22号 (新)	
8 増福寺 22号墳	ほぼ消滅 推定方形		消滅	消滅	消滅	消滅	一部を検出			周溝を有する方 墳と考えられる。
9 増福寺 23号墳	一部残存 推定方形		消滅	消滅	消滅	消滅	1.6×0.5	周溝:土師器高环	増福寺Ⅰ期	23号(古)ー 増福寺24号(新)
10 増福寺 21号墳	一部残存 推定方形		消滅	消滅	消滅	消滅	1.4×0.3	周溝:土師器高环、 増福寺Ⅱ期	23号(古)ー 増福寺24号(新)	
11 増福寺 25号墳	やや丸みの ある方形		消滅	消滅	消滅	消滅	3.2×0.6	周溝:上埴輪、須 恵器縛、壇・塚・蓋	増福寺Ⅱ期 环	24号(古)ー 増福寺25号(新)
12 増福寺 26号墳	推定方形		消滅	消滅	消滅	消滅	3.0×0.7	周溝:上埴輪		周溝を有する方 墳と考えられる。
13 土井 13号墳	方形	8.5×8.5×1.0	1基 木棺直葬	4.1×1.2×0.5 長方形	N-59°E	無し	2.0×	周溝:上埴輪柄3 点		主体部は墳丘の 対角線上
14 中山 2号墳	長方形	9.5×13.0×2.9 (1.6)	2基 木棺直葬	第1主体:1.86×0.76 ×0.24、第2主体: 2.32×0.66×0.45	第1主体: N-68°W 第2主体: N-67°W	無し	2.9×	鉄錐、須恵器高环、 同小切妻、土師器 下押ね土器	増福寺Ⅱ期 =出雲2期	2つの主体部を 平行に配置
15 稲荷谷 1号墳	長方形	10.0×11.0×2.2 (0.8)	2基	第1主体:1.5×0.6× 0.32長方形、第2主 体:1.5×0.5×0.32小 型小切妻	第1主体: N-67°W 第2主体: N-20°E	無し	4.5×	第1主体部上に積 み石と内側輪輪3 個	第1主体と第2主 体の主軸が直交 する形で配置	
16 谷ノ奥 1号墳	消滅 不明	消滅	消滅	消滅	消滅	消滅	3.42×1.39	須恵器高环、周溝 底部片	出雲1期の 新しい段階 =増福寺Ⅱ・ Ⅲ期	
17 谷ノ奥 2号墳	長方形	6.5×6.8×1.48 (1.48)	1基 木棺直葬	2.28×0.89×0.405 長方形	N-36°W	刀子、臼平、基 盤検出面より須 恵器	4.08×0.548	周溝:須恵器高环、 高环、刀子器高环、 土師器石、 不規則器	谷ノ奥3号 (古)ー 谷ノ奥2号 (新)	主体部は墳丘の 対角線上
18 谷ノ奥 3号墳	方形	7.5×8.1×1.54 (1.54)	2基 木棺直葬	第1主体:2.62以上 ×0.88×0.39、第2主 体:2.63×0.68×0.3 小型小切妻	第1主体: N-5°W 第2主体: N-6°W	半楕円形鋤 刀子	2.52×0.43	周溝:須恵器高环、 須恵器高环・上部 基盤高・鉄錐	出雲1期の 新しい段階 =増福寺Ⅱ・ Ⅲ期	
19 谷ノ奥 4号墳	消滅 推定方形		消滅	消滅	消滅	消滅	1.62×0.28	周溝:上埴輪高 环、須恵器高环	出雲1期の 新しい段階 =増福寺Ⅱ・ Ⅲ期	

第5表 谷ノ奥遺跡出土五輪塔分類表

分類	分類	滅灰岩製	白色凝灰岩			砂岩			計		
			64-179	64-178	8	1	0	9			
空 風 輪	Aタイプ 空輪部に突起をもつもの。	A1 空塊タイプ。 									
	A2 折れ部を浅く削り込むことで空、風輪部を区別しているため、空輪部と風輪部の側面が一直線となる。		65-188		4						
	Bタイプ 空輪部に突起をもたないもの。				0	0			65-190	3	3
	計				12	1	0	3	3	16	
火 輪	Cタイプ 輪に対する高さの割合が大きなもの。	C1 軸の上端と下端が平行して反り返るもの。 	66-192		1	1		0	2		
	C2 割合が小さなもの。軸の上端と下端が反り返らず(幅):(高さ)=10: 3.9~7.1		66-193		1	0		0	1		
	C3 軸の上端と下端が中央部では平行であるが、端になると上端だけが反り返り傾くもの。		67-197		15	0		0	15		
水 輪	Dタイプ 輪に対する高さの割合が小さなもの。(幅):(高さ)=10: 3.9~41	輪に対する高さの割合が中央部では平行であるが、端になると上端だけが反り返り傾くもの。	68-206		0	0		3	3		
	分類不適の破片				2	0		0	2		
	計				19	1	0	3	3	23	
輪 輪	Eタイプ 上・下端の平均径に対する高さの割合が大きなもの(高いもの)。(幅):(高さ)=10:10~12.9		70-216		2	0		2	4		
	Fタイプ 輪・輪上・下面の平均径に対する高さの割合が小さなもの(低いもの)。(幅):(高さ)=10:6.7~8.9		70-209		6	0		0	6		
	計				8	0		2	10		
地 輪	G1 輪に対する高さの割合が大きなもの(高いもの)。(幅):(高さ)=10:7.5~10		71-222		4	1		0	5		
	G2 が成る無倒影のもの。		71-225		3	0		0	3		
	H1 輪に対する高さの割合が大きなもの(高いもの)。(幅):(高さ)=10:7.5~10				0	0		3	1	4	
輪 輪	H2 輪に対する高さの割合が小さなもの(低いもの)。(幅):(高さ)=10:6.4~6.9				0	0		1	1		
	分類不適の破片				2	0		0	2		
	計				9	1	0	5	15		
	合計		19基以上	1基以上			5基以上	25基以上			

※棒の右下の数字は出土個数を示す。

第6表 谷ノ奥遺跡第I調査区落とし穴一覧表

単位(cm)

名 称	標識番号	検出地点	平 面 形	規 模 (上段長軸×短軸×深さ最大)	備 考
SK-01	第6回	C-3区	不規則円形	142.5×88.5×20.0	中央部に小ビット
SK-02	第7回	C-2区	不規則円形	139.5×74.0×104.3	中央部に小ビット
SK-03	第7回	C-3区	隅丸長方形	177.5×95.0×55.8	中央部に小ビット

第7表 谷ノ奥遺跡第I調査区土壤墓一覧表

規模の単位(cm)

名 称	標識番号	検出地点	平 面 形	規 模 (上段長軸×短軸×深さ最大)	出 土 遺 物	走 土	火 箔 砂 (g)	備 考
SK-04	第29回	C-5区	不規則円形	73.0×65.0×56.8	鉄釘	褐色	0	
SK-05	第32回	C-5区	楕円形	83.0×68.5×38.6	土師質土器・唐津焼	褐色	0.1	集石より地輪 71-225
SK-06	第34回	C-5区	楕円形	47.5×34.0×25.9	火輪(68-203)・鉄釘	褐色	0.1	
SK-07	第35回	C-5区	隅丸長方形	89.0×57.5×35.4	鉄釘	褐色	0	集石より火輪66-192- 68-206・地輪70-219- 70-220-72-228
SK-08	第37回	C-5区	正な隅丸方形	73.0×60.0×21.4	鉄釘	褐色	34.0	
SK-09	第38回	C-6区	楕円形	82.0×67.0×19.0	上階質土器・鉄釘・毛 拔・不明鉄器・錢貨	黒色	194.1	
SK-10	第40回	C-6区	不明	未検出			17.2	集積された上部の心 内から石山82-176
SK-11	第41回	C-6区	楕円形?	× × 9.8	鉄釘	黒色	2.8	SK11(新)-SK30(古)
SK-12	第42回	C-6区	楕円形	77.0×67.5×19.8	土師質土器・鉄釘・錢 貨	黒色	1.1	SK12(新)-SK37(古)
SK-13	第43回	C-6区	楕円形	140.0×114.5×37.0	上階質土器・錢貨	黒色	182.1	
SK-14	第45回	C-6区	円形	90.0× × 18.5	鉄釘	褐色	4.0	SK38(新)-SK14(古)
SK-15	第46回	C-6区	円形	99.0× × 34.6	鉄釘	黒褐色	0	
SK-16	第47回	C-6区	楕円形	101.5×73.0×28.7	地輪(72-229)・鉄釘・ 錢貨	褐色	0	
SK-17	第48回	C-6区	円形	38.0× × 20.7		黒褐色	10.3	
SK-18	第49回	C-6区	楕円形	82.0×60.0×28.4	十郎官土器・中国青花 ・輪鉢	黒色	7.5	集石より火輪 68-207
SK-19	第51回	C-6区	円形	68.0× × 42.7	唐津焼	褐色	0	
SK-20	第53回	C-4区	不明	未検出			217.1	
SK-21	第53回	C-5区	不明	未検出			58.9	
SK-22	第53回	D-6区	円形	34.5× × 23.1		褐色	70.3	
SK-23	第54回	C-6区	円形	87.0× × 16.9	鉄釘	黒色	45.5	
SK-24	第56回	B-5区	長方形	114.5×78.5×194.7	針金状の鉄製品	に赤い毒刺色	0	庄格幕

第8表 谷ノ奥遺跡第I調査区土坑一覧表

単位(cm)

名 称	探査番号	検出地点	平 面 形	現 様 (上部長軸×横幅×深さ最大)	出 土 潜 物	地 上	性 格	備 考
SK-25	第73区	C-3区	楕円形	106.5×56.0×31.8	牛骨	黒褐色	牛骨	生後5~6ヶ月の仔牛
SK-26	第74区	D-6区	不明	93.0× ×25.0	粉灰	褐色	製炭遺構?	焼土坑
SK-27	第74区	B-4区	円形	80.0× ×43.8	灰	黑色	製炭遺構?	
SK-28	第74区	B-4区	円形	90.0× ×88.9		褐色	墓壙?	上部に墨石
SK-29	第74区	C-6区	不整形	96.5×48.0×86.3		にぼい黄褐色	不明	第1加工段斜面に斜め方向に穿たれる
SK-30	第5区	B-3区	楕円形	136.0×86.0×27.8		灰褐色	不明	
SK-31	第5区	B-C-4区	楕円形	199.5× ×50.0	争大の石3個	にぼい黄褐色	SK-31(新)-1号周溝(古)	
SK-32	第5区	C-4区	小型楕円形	204.0× ×55.1		にぼい黄褐色	SK32(新)-1号周溝(古)-SK-33と切り合う	
SK-33	第5区	C-4区	小型楕円形	227.5×89.0×45.5		にぼい黄褐色	SK-32と切り合う	
SK-34	第5区	C-4区	楕円形	62.0×39.5×24.0		褐色	墓壙?	上部に墨石
SK-35	第5区	C-5区	楕円形	61.5×38.0×23.1		褐色	墓壙?	
SK-36	第41区	C-6区	不明	× ×10.1		黒色	墓壙?	SK11(新)-SK36(古)
SK-37	第42区	C-6区	楕円形	49.0×43.5×12.1		黒色	墓壙?	SK12(新)-SK37(古)
SK-38	第49区	C-6区	楕円形	×53.0×33.3		褐色	墓壙?	SK38(新)-SK44(古)
SK-39	第5区	C-6区	長方形	69.5×65.0×38.5		褐色	墓壙?	上部に墨石
SK-40	第5区	C-6区	円形	75.0× ×54.9	炭化物	黒褐色	墓壙?	
SK-41	第5区	C-6区	円形	39.0× ×19.5		褐色	墓壙?	
SK-42	第5区	C-6区	楕円形	52.0×30.0×13.4		褐色	墓壙?	
SK-43	第5区	C-6区	楕円形	49.5×34.0×32.3		褐色	墓壙?	

第9表 谷ノ奥遺跡第I調査区出土土器観察表

単位(cm)

検出番号	品目	器種	出土地点 土層	胎 焼 成	色調(外) 色調(内)	法 量	調整 手法の特徴	時 期	備 考
10-1	須恵器	壺	谷ノ奥1号埴陶溝	密 良好	灰 灰白色	口径: 12.5	I縁部内外面回転ナデ。	出土1期	
10-2	須恵器	壺	谷ノ奥1号埴陶溝	密 良好	灰 灰黄色		肩部外縁カキメ、底部外 面回転ヘラケズリ、内向 回転ナデ。		
16-6	須恵器	壺	谷ノ奥2号埴陶主体 部上面	1mmの大砂粒 含む。密。 やや不良	灰 灰黄色	口径: 18.2	外縁は底面により区画さ れ、内面に波状文。内 面回転ナデ。	16-7と同一個体	
16-7	須恵器	壺	谷ノ奥2号埴陶主体 部上面	1mmの大砂粒 含む。密。 やや不良	灰 灰黄色		外縁タタキ、内面同心円 当て具底。	16-6と同一個体	
21-10	土師器	高杯	谷ノ奥3号埴陶側 周溝	1~2mmの大 砂粒含む。良	棕 棕色	口径: 17.8	I縁部と环底部の境に段 をもつ。内外面ヨコナデ。		
21-11	土師器	高杯	谷ノ奥3号埴陶側 周溝	2mm以下の砂 粒含む。良	棕 棕色	口径: 18.0	I縁部と环底部の境に段 をもつ。内外面ヨコナデ。	外山朱塗り。 21-12-13と同一個体	
21-12	土師器	高杯	谷ノ奥3号埴陶側 周溝	2mm以下の砂 粒含む。良	棕 棕色		内面ケズリ、外面ハケメ。	外山朱塗り。 21-11-13と同一個体	
21-13	土師器	高杯	谷ノ奥3号埴陶側 周溝	2mm以下の砂 粒含む。良	棕 棕色	底径: 9.5		外面朱塗り。 21-11-12と同一個体	
21-14	須恵器	壺	谷ノ奥3号埴陶側 周溝・埴陶部	1mm以下の砂 粒含む。密。 良好	灰 灰白色	口径: 12.2 器高: 5.5	大井部外縁回転ヘラケズ リ、内面ナデ。その他は 回転ナデ。	出土1期	
21-15	須恵器	壺	谷ノ奥3号埴陶側 周溝	1mm以下の砂 粒含む。密。 良好	灰 灰白色	口径: 12.7 器高: 5.6	天井部外縁回転ヘラケズ リ、内面ナデ。その他は 回転ナデ。	出土1期	
21-16	須恵器	壺身	谷ノ奥3号埴陶側 周溝	密 良好	青 灰黄色	口径: 11.0 器高: 5.5 最大径: 13.6	底部外縁回転ヘラケズリ、 内面ナデ。その他回転ナ デ。		
21-17	須恵器	壺身	谷ノ奥3号埴陶溝	密 良好	灰 灰黄色	口径: 11.8 最大径: 13.9	底部外縁回転ヘラケズリ。 その他の回転ナデ。		
26-37	土師器	壺	谷ノ奥4号埴陶溝	1~2mmの大 砂粒含む。良	棕 明黄褐色	口径: 15.2	内面底部以下ヘラケズリ、 その他のヨコナデ。	退化した複合I期	
26-38	土師器	高杯	谷ノ奥4号埴陶溝	1mmの大砂粒 含む。良	明 明褐色	口径: 18.5	I縁部と环底部の境に段 をもつ。内外面ヨコナデ。		
26-39	須恵器	壺	谷ノ奥4号埴陶溝	密 良好	灰 灰色	口径: 12.0 器高: 5.0	天井部外縁回転ヘラケズ リ、内面ナデ。その他は 回転ナデ。	出土1期	
26-40	須恵器	壺	谷ノ奥4号埴陶溝	3mmの大砂粒 含む。密。 良好	灰 灰白色	口径: 12.5 器高: 5.5	大井部外縁回転ヘラケズ リ、内面ナデ。その他は 回転ナデ。	出土1期	
26-41	須恵器	壺	谷ノ奥4号埴陶溝	密 不良	灰 灰白色	口径: 13.0 器高: 5.6	天井部外縁回転ヘラケズ リ、内面ナデ。その他は 回転ナデ。	出土1期	
28-42	中国青銅	瓶	獨立立柱連絡 (SB-01)P1	織部 良好	オーラブ灰 オーラブ灰	口径: 16.0	内面にオーラブ灰色の 釉薬が施される。	15世紀頃	
33-44	土師質土器	壺	SK-05	1mm以下の砂 粒含む。良	灰 灰白色 にぼい緑色 にぼい緑色	口径: 12.2 器高: 2.6		京都承土師器	
33-45	唐津焼	皿	SK-05	密 良好	オーラブ黃 オーラブ黃	口径: 10.2 器高: 2.8 底径: 4.3	ロクロ成型。内外面にオ ーラブ黄色の釉薬。底土 の痕が残る。	16世紀末 ~17世紀 初頭	
39-52	土師質土器	皿	SK-09	1mm以下の砂 粒含む。良	灰 灰白色 にぼい緑色 にぼい緑色	口径: 13.3 器高: 2.3	底部内外面ナデ。その他 回転ナデ。	京都承土師器	
39-53	土師質土器	皿	SK-09	1mm以下の砂 粒含む。良	灰 灰白色 にぼい黄褐色 にぼい黄褐色	口径: 11.5 器高: 2.4	底部内外面ナデ。その他 回転ナデ。	京都承土師器	
39-54	土師質土器	皿	SK-09	1mm以下の砂 粒含む。良	灰 灰白色 にぼい緑色	口径: 9.6 器高: 1.6	底部外面ナデ。その他回 転ナデ。	京都承土師器	

検討番号	品目	基種	出土地点 土質	施土 焼成	色調(外) 色調(内)	法量	調整・手法の特徴他	時期	備考
39-55	土師質土器	Ⅲ	SK-09	1mm以下の砂 粒含む。 良	に赤い褐色 に赤い褐色	口 径: 9.4 器 高: 1.6	底部外面ナダ、その他回 転ナダ	Ⅰ	Ⅰ部内部に保付 者。焼明瞭
				0.5mm以下の 砂粒含む。 良	に赤い褐色 に赤い黄褐色	口 径: 9.1 器 高: 1.6	底部外面ナダ、その他回 転ナダ		
39-56	土師質土器	Ⅲ	SK-09	1mm以下の砂 粒含む。 良	に赤い褐色 に赤い黄褐色	口 径: 9.1 器 高: 1.6	底部外面回転ナダ、その他回 転ナダ	京都系土師器組	
42-85	土師質土器	Ⅲ	SK-12	1mm以下の砂 粒含む。 良	に赤い黄褐色 に赤い黄褐色	口 径: 9.5	外表面回転ナダ。		
44-94	土師質土器	Ⅲ	SK-13	1mm以下の砂 粒含む。 良	褐色 褐色	口 径: 12.6 器 高: 1.8	底部内外面ナダ、その他 回転ナダ。		京都系土師器組
50-100	土師質土器	Ⅲ	SK-18	1mm以下の砂 粒含む。 良	に赤い褐色 に赤い黄褐色	口 径: 11.9 器 高: 2.4 底 径: 6.3	底部外表面回転ナダ切り、 その他の回転ナダ。		
50-101	土師質土器	Ⅲ	SK-18	0.5mm以下の 砂粒含む。 良	に赤い褐色 に赤い黄褐色	口 径: 11.1 器 高: 2.5 底 径: 5.5	底部外表面回転ナダ切り、 その他の回転ナダ。		底部に焼成前に空 たれた直径7mmの 孔が貫通する。
50-102	土師質土器	Ⅲ	SK-18	2mm以上の砂粒 含む。 良	に赤い褐色 に赤い褐色	口 径: 11.8 器 高: 2.6 底 径: 6.6	底部外表面回転ナダ切り、 その他の回転ナダ。		
50-103	土師質土器	Ⅲ	SK-18	1mm大の砂粒 含む。 良	浅黄色 浅黄色	口 径: 11.4 器 高: 2.6 底 径: 5.7	底部外表面回転ナダ切り、 その他の回転ナダ。		
50-104	土師質土器	Ⅲ	SK-18	3mm以上の砂 粒含む。 良	明灰褐色 浅黄色	口 径: 10.7 器 高: 2.5 底 径: 6.0	底部外表面回転ナダ切り、 その他の回転ナダ。		
50-105	土師質土器	Ⅲ	SK-18	3mm以下の砂 粒含む。 良	に赤い褐色 明灰褐色	口 径: 11.3 器 高: 2.6 底 径: 5.4	底部外表面回転ナダ切り、 その他の回転ナダ。		
50-106	土師質土器	Ⅲ	SK-18	1mm以下の砂 粒含む。 良	浅黄色 浅黄色	口 径: 11.2 器 高: 2.0 底 径: 6.0	底部外表面回転ナダ切り、 その他の回転ナダ。		
50-107	中国青花	Ⅲ	SK-18	緻密 良好	明オホブ灰色 明リーフ灰色	口 径: 8.2 器 高: 2.1 底 径: 2.9	16世紀中 頃に多い タイプ		
52-112	唐津焼	Ⅲ	SK-19	市 や不食	浅黄色 浅黄色	口 径: 13.2 器 高: 3.8 底 径: 5.0	ロクロ剖削。内面に鉛錠 が施される。胎土の白痕 が残る。	16世紀末 -17世紀 初頭	
58-126	土師質土器	Ⅲ	加工段平坦面 C-S区	微妙粒含む。 良	に赤い褐色 に赤い褐色	口 径: 7.2 器 高: 1.7 底 径: 3.9	底部外表面回転ナダ切り、 その他の回転ナダ。		Ⅰ部内部に保付 者。焼明瞭
58-127	土師質土器	Ⅲ	加工段平坦面 C-S区	1mm以下の砂 粒含む。 良	棕色 棕色	口 径: 7.6 器 高: 1.7 底 径: 3.9	底部外表面回転ナダ切り、 その他の回転ナダ。		Ⅰ部内部に保付 者。焼明瞭
58-128	土師質土器	Ⅲ	加工段平坦面 C-S区	微妙粒含む。 良	棕色 棕色	口 径: 7.5 器 高: 1.8 底 径: 3.4	底部外表面回転ナダ切り、 その他の回転ナダ。		Ⅰ部内部に保付 者。焼明瞭
58-129	土師質土器	Ⅲ	加工段平坦面 D-S区	1mm以下の砂 粒含む。 良	棕色 棕色	口 径: 7.4 器 高: 1.7 底 径: 3.6	底部外表面回転ナダ切り、 その他の回転ナダ。		Ⅰ部内部に保付 者。焼明瞭
58-130	土師質土器	Ⅲ	加工段平坦面 C-S区	1mm以下の砂 粒含む。 良	明灰褐色 明灰褐色	口 径: 7.4 器 高: 1.8 底 径: 4.6	底部外表面回転ナダ切り、 その他の回転ナダ。		Ⅰ部内部に保付 者。焼明瞭
58-131	土師質土器	Ⅲ	加工段平坦面 D-S区	微妙粒含む。 良	明赤褐色 明赤褐色	口 径: 7.8 器 高: 1.7 底 径: 4.5	底部外表面回転ナダ切り、 その他の回転ナダ。		Ⅰ部内部に保付 者。焼明瞭
58-132	土師質土器	Ⅲ	加工段平坦面 C-S区	微妙粒含む。 良	棕色 棕色	口 径: 7.2 器 高: 1.3 底 径: 4.1	底部外表面回転ナダ切り、 その他の回転ナダ。		Ⅰ部内部に保付 者。焼明瞭
58-133	土師質土器	Ⅲ	加工段平坦面 D-C-S区	微妙粒含む。 良	粉色 粉色	口 径: 7.8 器 高: 1.5 底 径: 4.7	底部外表面回転ナダ切り、 その他の回転ナダ。		Ⅰ部内部に保付 者。焼明瞭
58-134	土師質土器	Ⅲ	加工段平坦面 C-S区	1mm以下の砂 粒含む。 良	棕色 棕色	口 径: 7.9 器 高: 1.8 底 径: 4.6	底部外表面回転ナダ切り、 その他の回転ナダ。		
58-135	土師質土器	Ⅲ	加工段平坦面 D-S区	微妙粒含む。 良	棕色 棕色	口 径: 7.8 器 高: 1.7 底 径: 3.5	底部外表面回転ナダ切り、 その他の回転ナダ。		

神社名	品目	器種	出土地点 土層	胎土 焼成	色調(外) 色調(内)	法量	調整・手法の特徴	時 期	備考	
58-136	土師質土器	皿	加工段平坦面 C-6区	微妙粒合む。 良	桜色 粉色	底径: 4.1	底部外面回転糸切り。			
58-137	土師質土器	皿	加工段平坦面 C-6区	1mm以下の砂 粒含む。 良	粉色 粉色	底径: 3.4	底部外面回転糸切り。			
58-138	土師質土器	皿	加工段平坦面 D-6区	0.5mm以下の 砂粒含む。 良	粉色 粉色	底径: 4.3	底部外面回転糸切り。			
58-139	土師質土器	皿	加工段平坦面 D-6区	1mm以下の砂 粒含む。 良	粉色 粉色	口径: 10.7 器高: 2.7 底径: 5.4	底部外面回転糸切り、 その他の転ナゲ。			
58-140	土師質土器	皿	加工段平坦面 C-6区	1mm以下の砂 粒含む。 良	浅黄褐色 にぼい桜色	口径: 11.4	内外面回転ナゲ。			
58-141	土師質土器	皿	加工段平坦面 C-6区	1mm以下の砂 粒含む。 やや不良	黄褐色 褐色	口径: 13.6 器高: 2.8	外面ヨコナゲ及びナゲ。	京都系土器皿		
58-142	土師質土器	皿	加工段平坦面 C-6区	1mm以下の砂 粒含む。 良	にぼい黄褐色 にぼい黄色	口径: 14.4	外面ヨコナゲ。	京都系土器皿		
58-143	土師質土器	皿	加工段平坦面 C-5区	1mm以下の砂 粒含む。 やや不良	にぼい桜色 にぼい桜色	口径: 9.6 器高: 1.5	底部内外面ナゲ。その後 回転ナゲ。	京都系土器皿		
58-144	土師質土器	皿	加工段平坦面 C-5区	1mm以下の砂 粒含む。 良	粉色 粉色	口径: 9.6 器高: 1.5	内外面回転ナゲ。	京都系土器皿		
58-145	土師質土器	皿	加工段平坦面 C-5区	微妙粒合む。 良	にぼい桜色 浅黄褐色	口径: 9.2	外面回転ナゲ。	京都系土器皿		
58-146	土師質土器	皿	加工段平坦面 C-6区	微妙粒合む。 良	粉色 粉色	口径: 7.3 器高: 1.3	内外面回転ナゲ。	京都系土器皿		
58-147	土師質土器	皿	加工段平坦面 C-5区	1mm以下の砂 粒含む。 良	灰黄褐色 にぼい桜色	口径: 7.6 器高: 1.5	外面回転ナゲ。	京都系土器皿		
58-148	土師質土器	皿	加工段平坦面 C-5区	1mm以下の砂 粒含む。 良	にぼい桜色 にぼい桜色	口径: 8.6 器高: 1.9	底部外面ナゲ。その後 転ナゲ。	口縁部内面に焼付 着。證明裏		
58-149	土師質土器	皿	加工段平坦面 C-5区	微妙粒合む。 良	にぼい桜色 浅黄褐色	口径: 9.0 器高: 1.6	底部外面ナゲ。その後 転ナゲ。	口縁部内面に焼付 着。證明裏		
58-150	土師質土器	皿	加工段平坦面 C-5区	微妙粒合む。 良	にぼい黄褐色 にぼい黄褐色	口径: 7.9 器高: 1.7	底部外面ナゲ。その後 転ナゲ。	口縁部内面に焼付 着。證明裏		
58-151	土師質土器	皿	加工段平坦面 C-5区	微妙粒合む。 良	にぼい桜色 にぼい桜色	口径: 8.2 器高: 2.0	内外面回転ナゲ。	口縁部内面に焼付 着。證明裏		
58-152	土師質土器	皿	加工段平坦面 C-5区	1mm以下の砂 粒含む。 良	にぼい黄褐色 にぼい黄褐色	口径: 8.2 器高: 1.7	内外面回転ナゲ。	京都系土器皿		
58-153	土師質土器	皿	加工段平坦面 C-5区	1mm以下の砂 粒含む。 良	浅黄褐色 浅黄褐色	口径: 8.2 器高: 2.0	底部外面ナゲ。その後 転ナゲ。	京都系土器皿		
77-232	土器	深	C-3区	1mm以下の砂 粒含む。 良	にぼい粉色 にぼい桜色	口径: 18.0	口縁部内外面ヨコナゲ。			
77-233	土器	高杯	C-3区	1mm以下の砂 粒含む。 良	粉色 明赤褐色	底径: 9.6	底部外面ハケメ、内面シ リヤ。			
78-234	唐津系	罐	C-3区	青 良好	暗赤褐色 暗赤褐色	口径: 32.4	口縁部は外側へ折り返し、 厚く肥大している。内面 には朱墨が刷まれている。	江戸時代		
78-235	中国青花	不明 3層の窓附	C-2区	青白 良好	暗灰 白色、透明白 (窓附)	口径: 7.6	蓋上は灰白 色、透明白 (窓附)	蓋上は無地、唐草文様? 手頃	16世纪前半頃	
78-236	中国青花	不明 3層の窓附	C-3区	青白 良好	暗灰 (窓附)	胎土は灰白色、 透明釉!	口縁部内外面に團紋。			

第10表 谷ノ奥遺跡第I調査区出土金属製品観察表（錢貨・鉄釘を除く）

単位(cm)

測定番号	品目	材質	出土地点	出土地点	通構名	法 量			備考	
						全長	幅	厚さ		
15-3	鉄斧	鉄	B-6区	谷ノ奥2号埴溝内		10.3	刃部幅4.2	刃部厚1.4	(163.9)	
15-4	不明品	鉄	C-6区	谷ノ奥2号埴溝内		14.1	3.2	0.1	(33.1) 56.7	
16-8	刀子	鉄	B-6区	谷ノ奥2号埴溝主体部		9.5	刃部幅1.2	刃部厚0.2	(8.7)	刃溝に布目が残る。
21-18	不明品	鉄	B-5区	谷ノ奥3号埴溝内		7.3	1.7~2.4	0.7~1.3	57.4	
22-19	鉄鎌	鉄	B-5区	谷ノ奥3号埴溝1主体部		11.5	舟幅3.9	舟刃0.9	(33.1)	舟の一部に布目が残る。
22-20	鉄鎌	鉄	B-5区	谷ノ奥3号埴溝1主体部		7.5	舟幅3.0	舟刃0.6	(17.8)	舟の一部に布目が残る。
23-21	刀子	鉄	B-5区	谷ノ奥3号埴溝2主体部		13.6	刃部幅1.8	刃部厚0.3	(35.9)	舟刃の一部に舟刃が残る。
39-75	毛抜	鉄	C-6区	SK-09			刃部幅1.2	刃部厚0.2	3.4	破片
39-76	不明品	鉄	C-6区	SK-09		1.8		0.2	0.3	折り曲げられている。
50-108	輪鉗	鉄	C-6区	SK-18		9.6			(22.2)	
50-109	輪鉗の輪	鉄	C-6区	SK-18	直径3.15			0.25	(3.7)	鍛のため別個体の輪が接着している。
50-110	輪鉗の輪	鉄	C-6区	SK-18	直径3.30			0.2	(3.2)	鍛のため別個体の輪が接着している。
50-111	輪鉗の部材	鉄	C-6区	SK-18		4.5	4.5	0.5	(13.1)	中央に1辺0.65cmの丸孔が穿たれている。
56-125	針金状	鉄	B-5区	SK-24	約4.7		約0.2	0.7		
59-154	不明品	鉄	C-6区	加工段平坦面		7.2	1.0	0.15	5.3	2カ所に方孔が穿たれている。
59-155	毛抜	鉄	D-5区	加工段平坦面		6.75	刃部幅0.8	刃部厚0.1	8.2	
59-156	不明品	鉄	C-5区	加工段平坦面		7.3	2.2	高さ1.1	10.1	なすび形を呈する。
59-157	小柄	鋼	C-6区	加工段平坦面		7.2	1.6	0.7	15.1	
59-158	不明品	鋼	C-5区	加工段平坦面		2.05	直径1.95		11.3	丸径0.9
60-159	椎刀?	鉄	C-5区	加工段平坦面		34.1	2.2	0.45	(101.3)	
79-237	機械鋸治津	鉄	C-3区	通構外		7.7	6.5	2.0	140.5	

() 内は保存処理後の重量。

第11表 谷ノ奥遺跡第I調査区出土鉄釘観察表

単位(cm)

測定番号	部位	出土地点	通構名	法 量				軸部断面形	備 考
				全長	頭部幅	軸部幅	軸部厚		
29-43	頭部	C-5区	SK-04	3.5	1.15	0.45	0.35	2.8	長方形
36-46	頭部	C-5区	SK-07	3.3	0.7	0.3	0.2	1.3	正方形
36-47	頭部	C-5区	SK-07	1.3	0.85	0.35	0.3	0.6	正方形
36-48	先端	C-5区	SK-07	2.45	—	0.3	0.3	1.0	正方形
36-49	先端	C-5区	SK-07	3.7	—	0.35	0.45	2.2	開丸長方形
36-50	先端	C-5区	SK-07	4.2	—	0.5	0.35	3.2	長方形
37-51	先端	C-5区	SK-08	5.0	—	0.5	0.45	4.0	長方形
39-57	ほぼ丸形	C-6区	SK-09	約4.6	0.75	0.35	0.35	4.7	正方形
39-58	頭部	C-6区	SK-09	2.9	0.85	0.3	0.25	3.0	長方形

検査番号	部 位	出土地点	遺構名	法 異					軸部断面形	備 考
				全 長	頭部幅	軸部幅	軸部厚	重量(g)		
39-59	頭部	C-6区	SK-09	2.45	1.1	0.35	0.3	2.2	長方形	
39-60	頭部	C-6区	SK-09	2.5	1.15	0.45	0.4	1.8	長方形	
39-61	頭部	C-6区	SK-09	2.7	1.1	0.7	0.5	2.8	長方形	
39-62	頭部	C-6区	SK-09	2.1	1.0	0.35	0.4	2.6	正方形	
39-63	頭部	C-6区	SK-09	3.3	1.2	0.4	0.35	4.0	正方形	
39-64	頭部	C-6区	SK-09	1.6	1.15	0.4	0.35	1.7	長方形	
39-65	頭部	C-6区	SK-09	1.65	1.1	0.3	0.3	2.0	正方形	
39-66	先端	C-6区	SK-09	1.9	—	0.4	0.4	0.6	正方形	
39-67	先端	C-6区	SK-09	1.3	—	0.3	0.3	0.4	正方形	先端が折れ曲がる。
39-68	先端	C-6区	SK-09	1.8	—	0.35	0.4	0.4	正方形	先端が折れ曲がる。
39-69	先端付近	C-6区	SK-09	2.7	—	0.4	0.4	1.1	正方形	
39-70	先端付近	C-6区	SK-09	2.3	—	0.35	0.3	0.7	長方形	
39-71	先端	C-6区	SK-09	2.35	—	0.3	0.25	0.9	長方形	
39-72	軸部	C-6区	SK-09	2.5	—	0.35	0.4	2.3	長方形	縫により側面体が回轉。
39-73	軸部	C-6区	SK-09	2.3	—	0.4	0.35	1.5	正方形	
39-74	軸部	C-6区	SK-09	2.0	—	0.3	0.4	0.7	長方形	
41-83	頭部	C-6区	SK-11	1.15	0.8	0.35	0.3	0.6	長方形	
41-84	頭部	C-6区	SK-11	1.35	0.9	0.3	0.3	0.8	正方形	
42-85	頭部	C-6区	SK-12	1.9	1.0	0.45	0.4	2.1	長方形	
42-87	先端	C-6区	SK-12	3.3	—	0.3	0.3	1.8	正方形	
42-88	先端	C-6区	SK-12	2.9	—	0.25	0.25	1.6	正方形	先端が折れ曲がる。
46-96	頭部	C-6区	SK-15	3.5	0.8	0.3	0.3	3.6	正方形	
47-97	先端	C-6区	SK-16	1.2	—	0.25	0.25	0.1	橢丸方形	
55-113	頭部	C-6区	SK-18	2.9	0.7	0.35	0.35	2.1	正方形	
55-114	頭部	C-6区	SK-18	2.6	0.9	0.3	0.4	2.9	長方形	軸部が折れ曲がる。
55-115	頭部	C-6区	SK-18	1.5	0.75	0.35	0.4	1.0	長方形	
55-116	頭部	C-6区	SK-18	1.4	0.7	0.35	0.4	1.2	正方形	
55-117	先端	C-6区	SK-18	1.95	—	0.3	0.35	0.5	正方形	
55-118	先端	C-6区	SK-18	2.7	—	0.35	0.3	0.8	長方形	
55-119	先端	C-6区	SK-18	1.95	—	0.3	0.3	0.4	正方形	
55-120	先端	C-6区	SK-18	2.65	—	0.3	0.3	0.4	正方形	
55-121	軸部	C-6区	SK-18	3.8	—	0.3	0.3	1.0	正方形	
55-122	軸部	C-6区	SK-18	4.9	—	0.35	0.35	1.8	正方形	
55-123	軸部	C-6区	SK-18	2.0	—	0.35	0.3	0.7	長方形	
55-124	軸部	C-6区	SK-18	2.0	—	0.25	0.2	1.0	長方形	
79-238	頭部	C-21区	遺構外	3.75	0.95	0.4	0.4	3.8	正方形	

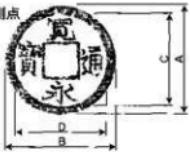
*重量以外の質量はレントゲン写真を参考に計測し、諸の部分は含んでいない。

第12表 谷ノ奥遺跡第I調査区出土銭貨觀察表

単位 (mm)

辨認番号	錢名	初鋳年	時代	出 土 地 点	銘文(A)/直径(B)	内径(C)/外径(D)	錢 厚	重 量(g)	備 考
39-77	祥符通寶	1009	北宋	SK-09墨色土層	24.58 24.50	20.24 19.81	1.17~1.38	2.88	
39-78	元豐通寶	1078	北宋	SK-09墨色土層	23.71 23.83	19.08 19.70	0.95~1.20	1.95	縫のため回着した状態で出土。
39-79	元豐通寶	1078	北宋	SK-09墨色土層	23.37 24.17	18.80 19.37	0.95~1.12	2.17	
39-80	元豐通寶	1078	北宋	SK-09墨色土層	24.35 24.01	17.80 17.81	1.38~1.51	3.99	
39-81	元祐通寶	1086	北宋	SK-09墨色土層	24.15 24.40	19.12 19.46	1.43~1.59	3.50	縫のため回着した状態で出土。
39-82	熙寧元宝	1068	北宋	SK-09墨色土層	24.22 24.35	21.00 20.59	1.09~1.39	3.50	
42-89	聖宋元宝	1101	北宋	SK-12墨色土層	22.73 23.95	18.84 19.31	1.19~1.47	2.08	
42-90	聖宋元宝	1068	北宋	SK-12墨色土層			0.96~1.17	1.02	一部欠損
42-91	聖宋元宝	1068	北宋	SK-12墨色土層		20.14	20.34	1.15~1.42	1.89
42-92	聖宋元宝	1068	北宋	SK-12墨色土層	24.62 24.82	21.92 22.11	1.37~1.57	2.27	縫により変形
42-93	二二二寶			SK-12墨色土層	24.80 24.34	19.15 19.39	1.25~1.45	2.19	銘文不明
44-95	政和通寶	1111	北宋	SK-13墨色土層		19.20	19.90	1.19~1.22	1.18
47-98	淳宋通寶	1038	北宋	SK-16		21.31	20.87	0.84~1.00	1.19
47-99	■四■			SK-16			1.40~1.54	0.09	縫片
61-160	元豐通寶	1078	北宋	C-6区・加工段平坦面	24.76 24.66	19.35 19.35	1.04~1.31	3.06	
61-161	元豐通寶	1078	北宋	C-6区・加工段平坦面	24.92 24.72	19.02 19.21	1.47~1.92	4.09	
61-162	聖宋元宝	1068	北宋	C-6区・加工段平坦面	24.70 25.19	21.56 21.56	0.90~1.06	2個体で 7.25	縫のため回着した状態で出土。
61-163	□□□□			C-6区・加工段平坦面	25.71 25.20	20.59 21.48	1.16~1.32		
61-164	聖宋元寶			C-6区・加工段平坦面			0.83~1.00	0.63	
61-165	祥符元寶	1009	北宋	C-6区・加工段平坦面		19.12	18.30	1.30~1.67	3.36
61-166	祥符元寶	1009	北宋	C-6区・加工段平坦面	24.76 24.83	18.50 18.50	1.04~1.20	2.90	
61-167	祥符元寶	1009	北宋	C-6区・加工段平坦面	24.91 24.89	18.47 18.17	1.16~1.42	2個体で 5.22	縫のため回着した状態で出土。
61-168	天禧元寶			C-6区・加工段平坦面		19.84 19.62	0.83~1.19		
61-169	治平元宝	1064	北宋	C-6区・加工段平坦面		23.55 19.21	19.40 1.38~1.54	3.35	
61-170	熙聖元宝	1094	北宋	C-6区・加工段平坦面		19.02	23.40 19.82	1.29~1.44	2.50
61-171	祥符通寶	1009	北宋	C-6区・加工段平坦面	24.07	19.70 19.70	1.06~1.22	2.08	
61-172	祥符通寶	1009	北宋	C-6区・加工段平坦面	23.18 23.12	18.48 18.48	0.96~1.17	2.31	
61-173	咸平元宝	998	北宋	C-6区・加工段平坦面	24.12 23.16	18.78 18.87	1.04~1.20	1.21	
61-174	咸平元宝	998	北宋	C-5区・加工段平坦面	24.71 24.77	19.65 19.00	1.19~1.52	2.58	
61-175	寛永通寶	1697	江戸	C-6区・加工段平坦面	23.12 23.12	18.70 18.70	1.14~1.30	2.90	新寛永
79-239	寛永通寶	1697	江戸	C-3区	23.00 23.00	19.80 19.80	1.02~1.22	2.67	新寛永

各部測定

□…判別不能
■…欠損のため小判

※永井久美男「中世の出土銭一出土銭の調査と分類一」

兵庫埋蔵銭調査会 1994年

「8. 古銭の計測」(9 ~ 10 頁)を参考に作成。

第13表 谷ノ奥遺跡第I調査区玉類観察表

単位(cm)

標印番号	品目	材質	出土地点	出土遺物名	色調	法 無				備考
						長さ	最大厚	幅	面積	
16-9	白玉	滑石	谷ノ奥2号墳主体部	灰白色		5.62	3.32	1.25	5.32	0.12
23-22	碧玉	水晶	谷ノ奥3号墳第2主体部	無色・透明		8.30 (長さ) 16.32	0.95~2.70		7.78	1.98
23-23	小玉	ガラス	谷ノ奥3号墳第2主体部	淡藍色・不透明		6.45~7.10	5.90	1.35	4.16~4.99	0.42 平面は丸い円形
23-24	小玉	ガラス	谷ノ奥3号墳第2主体部	淡紅色・不透明		7.21~8.31	3.85	1.42~1.65	6.67~5.51	0.55 平面はやや円形
23-25	小玉	ガラス	谷ノ奥3号墳第2主体部	淡藍色・不透明		6.56~7.46	4.18	1.34~1.57	4.80~5.11	0.31 平面は正方形
23-26	小玉	ガラス	谷ノ奥3号墳第2主体部	淡藍色・不透明		6.03~6.17	4.72	1.17~1.27	3.64~3.80	0.26 平面は正方形
23-27	小玉	ガラス	谷ノ奥3号墳第2主体部	藍色・やや不透明		2.89	2.48		0.81	2.33 0.03
23-28	小玉	ガラス	谷ノ奥3号墳第2主体部	水色・透明		2.99	2.50		0.98	2.21 0.03
23-29	小玉	ガラス	谷ノ奥3号墳第2主体部	水色・透明			2.08			鏡片
23-30	小玉	ガラス	谷ノ奥3号墳第2主体部	藍色・やや不透明		2.68	1.88	0.42	1.91	0.01
23-31	小玉	ガラス	谷ノ奥3号墳第2主体部	藍色・やや不透明		2.56	1.94	0.46	1.90	0.01
23-32	小玉	ガラス	谷ノ奥3号墳第2主体部	藍色・やや不透明		3.00	2.00	0.67	2.36	0.02
23-33	小玉	ガラス	谷ノ奥3号墳第2主体部	藍色・やや不透明		2.42	1.42	0.75	2.04	
23-34	小玉	ガラス	谷ノ奥3号墳第2主体部	藍色・やや不透明		2.51	1.39	0.92	1.80	3点で 0.01
23-35	小玉	ガラス	谷ノ奥3号墳第2主体部	藍色・やや不透明		2.59	1.74	0.57	1.89	

第14表 谷ノ奥遺跡第I調査区出土石器観察表(玉類・五輪塔を除く)

単位(cm)

標印番号	品目	石材	出土地点	出土遺物名	法 無				備考
					長さ	幅	厚さ	重量(g)	
15-5	玉磨石	結晶片岩	B-6区	谷ノ奥2号墳周溝内	10.2	1.3~2.4	0.8	25.9	
24-36	石刀	黒曜石	B-5区	谷ノ奥3号墳塗内 黒褐色土層	2.1	1.6	0.25	0.8	
62-176	挽臼	凝灰岩	C-6区	加工段手坦面	直径29.4			11.0	5100 下の破片
80-240	磨製石斧	安山岩	C-3区		8.4	刃厚約4.9	2.4	136.4	
80-241	玉磨石	結晶片岩			2.8	1.7	0.7	5.9	
80-242	石刀	貝岩	B-3区		11.0	2.7	0.7	28.6	
80-243	石刀	凝灰岩	C-4区		23.8	7.1~8.9	7.1~8.9	2000	

第15表 谷ノ奥遺跡第I調査区出土五輪塔(空風輪)観察表

単位(cm)

標印番号	出土地点	最大長 く長さ	物を除 く(A)	空輪径 (B)	周輪径 (C)	流れ幅 (D)	比例度(A:C:B:D)	重量 (kg)	柄タイプ	5去分類	石材
64-177	C-7 加工段平面	25.5	21.2	16.5	15.4	13.6	8.0 1.21:1:1.13:0.59	7.96	円錐形	A 1	凝灰岩
64-178	C-6 加工段平面	27.8	23.5	15.9	15.5	13.2	6.3 1.20:1:1.17:0.48	6.35	円柱形	A 1	白色凝灰岩
64-179	D-5 加工段平面	27.2	22.4	17.0	17.4	14.0	6.6 1.21:1:1.24:0.47	8.06	円錐形	A 1	凝灰岩
64-180	D-5 加工段平面	26.2	22.1	16.7	16.2	14.2	7.5 1.18:1:1.14:0.53	7.15	円錐形	A 1	凝灰岩
64-181	C-5 加工段平面	26.0	21.6	14.3	13.8	11.3	6.3 1.27:1:1.22:0.56	5.32	円柱形	A 1	凝灰岩
64-182	C-5 加工段平面	22.9	19.0	14.3	13.6	11.4	7.3 1.28:1:1.19:0.64	4.49	円錐(楕円形)	A 1	凝灰岩
65-183	C-5 加工段平面	24.5	20.6	17.4	15.7	13.8	7.0 1.26:1:1.14:0.51	5.57	円錐(断面梢円形)	A 1	凝灰岩
65-184	C-D-5 加工段平面	23.9	19.8	15.8	13.9	12.4	6.5 1.27:1:1.12:0.52	4.65	円錐形	A 1	凝灰岩
65-185	C-D-5 加工段平面	24.8	19.5	15.8	15.5	13.2	6.9 1.20:1:1.17:0.52	6.28	円柱形	A 1	凝灰岩
65-186	C-6 加工段平面	26.3	21.3	14.8	14.6	11.5	6.6 1.29:1:1.22:0.57	5.43	円錐形	A 2	凝灰岩
65-187	C-6 加工段平面	28.3	24.1	15.7	14.4	10.7	6.2 1.47:1:1.35:0.58	7.40	円錐形	A 2	凝灰岩
65-188	C-6 加工段平面	29.9	23.4	14.8	13.2	11.0	7.2 1.35:1:1.20:0.65	6.28	円柱形	A 2	凝灰岩
65-189	C-5 加工段平面	21.1	18.8	16.7	14.5	13.4	6.3 1.25:1:1.08:0.47	5.85	円錐(楕円形)	B	砂岩
65-190	D-5 加工段平面	22.9	20.7	16.1	15.0	14.2	7.4 1.13:1:1.06:0.52	5.36	円錐(断面梢円形)	B	砂岩
65-191	C-6 加工段平面	21.5	18.9	14.3	13.2	11.8	6.1 1.21:1:1.12:0.52	4.59	円錐形	B	砂岩

第16表 谷ノ奥遺跡第I調査区出土五輪塔(火輪)観察表

単位(cm)

標印番号	出土地点	上面幅	下面幅	高さ	柄穴平面形	柄穴上部幅	柄穴深さ	幅:高さ	重量(kg)	5去分類	石材
66-192	C-SK SK-97上	83×9.5	21.6×23.2	11.1	方形	6.5×7.9	3.7	10:5.1	7.95	C 1	凝灰岩
66-193	C-SK 加工段平面	7.3×10.0	23.3×25.1	15.8	円形	6.4	4.6	10:6.2	11.94	C 2	凝灰岩
66-194	C-SK 加工段平面	7.5×8.7	25.9×27.1	16.4	隅丸方形	5.6×5.8	4.5	10:6.1	12.72	C 3	凝灰岩
66-195	C-SK 加工段平面	10.5×10.5	30.8×31.0	18.1	円形	7.9	4.3	10:5.9	20.73	C 1	白色凝灰岩
66-196	D-SK 加工段平面	11.7×12.2	25.7×26.3	18.1	不規形	7.5~8.0	5.5	10:6.9	16.85	C 3	凝灰岩
67-197	C-SK 加工段平面	11.5×12.5	27.5×28.0	15.0	直端円形	7.6	6.3	10:5.4	15.30	C 3	凝灰岩
67-198	C-SK 加工段平面	10.5×11.0	23.9×24.6	13.2	隅丸方形	6.9×6.9	4.8	10:5.4	10.20	C 3	凝灰岩
67-199	D-SK 加工段平面	11.4×11.5	22.8×23.0	16.2	円形	8.0	4.5	10:7.1	10.40	C 3	凝灰岩
67-200	C-TSK 加工段平面	10.0×10.5	25.2×25.9	12.3	円形	7.0	4.5	10:5.0	10.63	C 3	凝灰岩
67-201	D-SK 加工段平面	10.5×11.1	25.0×25.8	15.0	隅丸方形	7.2×7.8	4.6	10:6.0	12.37	C 3	凝灰岩
67-202	C-SK 加工段平面	9.5×9.7	23.0×24.1	14.5	隅丸方形	6.8×6.8	4.6	10:6.0	11.53	C 3	凝灰岩
68-203	C-SK SK-96内	10.5×11.5	24.8×24.9	14.9	椭円形	7.6×8.4	4.2	10:6.0	11.83	C 3	凝灰岩
68-204	C-SK 加工段平面	7.0×8.0	21.4×21.8	13.3	円形	5.8	4.2	10:6.2	7.48	C 3	凝灰岩
68-205	C-TSK 加工段平面	8.0×8.3	20.0×22.5	12.7	椭円形	6.5×7.4	5.2	10:5.5	7.51	C 3	凝灰岩

単位(cm)

標識番号	出土地点	上面幅	下面幅	高さ	納穴平面形	納穴上端幅	納穴深さ	幅:高さ	重量(kg)	S表分類	石材
68-206	C-5区 SK-07上	9.6×10.4	26.4×27.4	10.6	ほぼ円形	7.6	3.4	10:3.9	8.90	D	砂岩
68-207	C-6区 SK-18上	10.5×12.5	26.0×26.0	10.4	円形	7.4	2.1	10:4.0	7.13	D	砂岩
68-208	D-6区 加工段平坦面	9.1×10.0	24.5×24.6	10.0	円形	7.4	3.5	10:4.1	6.05	D	砂岩

第17表 谷ノ奥遺跡第I調査区出土五輪塔(水輪)観察表

単位(cm)

標識番号	出土地点	上面幅	下面幅	最大径	高さ	最大径の位置(%)	上面の平均径:高さ	重量(kg)	S表分類	石材
69-209	C-5区 加工段平坦面	16.2~16.6	13.9	21.7	10.2	57.8 or 42.2	10:6.7	6.28	F	凝灰岩
69-210	D-5区 加工段平坦面	15.5~16.6	16.5	23.2	13.0	53.8 or 46.2	10:7.9	7.95	F	凝灰岩
69-211	D-6区 加工段平坦面	16.3	19.8	24.5	13.5	46.6 or 53.4	10:7.5	9.47	F	凝灰岩
69-212	D-5区 加工段平坦面	15.6~17.0	15.3~16.6	23.2	12.9	53.4 or 46.6	10:7.7	7.61	F	凝灰岩
69-213	C-6区 加工段平坦面	17.0~17.5	14.5~17.5	25.5	15.1	51.6 or 48.4	10:8.6	9.70	F	凝灰岩
69-214	C-5区 加工段平坦面	17.0~17.5	19.5	28.2	16.5	53.1 or 46.9	10:8.9	14.96	F	凝灰岩
70-215	D-5区 加工段平坦面	10.0~12.0	11.0~14.0	24.2	16.8	51.7 or 48.3	10:12.9	10.83	E	凝灰岩
70-216	C-6区 加工段平坦面	17.0~17.5	11.5~13.0	29.2	18.9	53.9 or 46.1	10:12.3	17.55	E	凝灰岩
70-217	D-5区 加工段平坦面	16.5~17.0	13.7	23.6	17.0	54.7 or 45.3	10:11	10.72	E	砂岩
70-218	C-5区 加工段平坦面	14.0	14.1	19.5	14.1	52.4 or 47.6	10:10	5.56	E	砂岩

第18表 谷ノ奥遺跡第I調査区出土五輪塔(地輪)観察表

単位(cm)

標識番号	出土地点	上面幅	下面幅	高さ	脚部幅:高さ	重量(kg)	S表分類	石材
70-219	C-5区 SK-07上	25.0×25.1	25.0×25.3	21.4	10:8.1	23.09	G 1	白色凝灰岩
70-220	C-5区 SK-07上	20.7×21.0	20.0×22.0	17.9	10:8.0	15.11	G 1	凝灰岩
71-221	D-6区 加工段平坦面	20.3×21.2	19.0×20.0	16.4	10:7.8	13.42	G 1	凝灰岩
71-222	C-6区 加工段平坦面	23.5×23.6	20.0×22.5	19.6	10:7.6	21.25	G 1	凝灰岩
71-223	C-6区 加工段平坦面	約25.5×26.5	25.5×26.0	20.3	10:7.5	23.22	G 1	凝灰岩
71-224	C-6区 加工段平坦面	約26.0×26.0	25.5×26.5	18.9	10:6.9	22.93	G 2	凝灰岩
71-225	C-7区 SK-05上	21.7×22.2	23.0×23.0	14.9	10:6.4	14.22	G 2	凝灰岩
71-226	C-7区 加工段平坦面	23.9×25.0	23.0×25.0	18.0	10:6.7	19.98	G 2	凝灰岩
72-227	C-5区 加工段平坦面	19.3×21.7	17.5×18.5	17.5	10:7.9	10.90	H 1	砂岩
72-228	C-5区 SK-07上	22.4×22.8	21.0×22.2	17.4	10:7.5	15.25	H 1	砂岩
72-229	C-6区 SK-16内	21.6×21.8	20.0×22.0	16.4	10:7.5	12.79	H 1	砂岩
72-230	D-6区 加工段平坦面	27.0×	25.5×	26.5	10:10	18.25	H 1	砂岩
72-231	C-5区 加工段平坦面	約22.0×22.0	21.5×22.5	14.9	10:6.5	10.45	H 2	砂岩

第19表 谷ノ奥遺跡第II調査区出土土器観察表

単位(cm)

調査番号	品目	基層	出土地点	高士土層	色調(外) 色調(内)	法量	調整・手造の特徴他	時期	備考
84-1	圓文土器	深鉢	T-1・T-2レンチ 灰色砂壁上 面	1mm人の砂粒 多く含む。 良	浅黄色 にぶい黄褐色	口径: 25.9	内外間に板か二枚貝による条 痕。	縄文時代 晚期	外面に煤付苔。
84-2	圓文土器	不明	T-2トレンチ 灰色砂壁V上 面	3mm人の砂粒 多く含む。 良	暗赤褐色 灰褐色		内外面ナデ。	不明	
85-3	弥生土器	甕	F-5区 砂壁層上面	2mm以下の砂 粒多く含む。 やや不良	にぶい黄褐色 褐灰色	口径: 22.0	摩擦が著しい。頭部外面に擦 痕に虫食等。	弥生時代 中期後半	
85-4	弥生土器	甕	F-7区 砂壁層	1mm人の砂粒 含む。 やや不良	にぶい褐色 にぶい黄褐色	口径: 18.2	口縁部ヨコナデ。端部は削減 され凹線文。頭部外面に擦痕 に虫食等。	弥生時代 中期後半	
85-5	弥生土器	甕	F-5区 砂壁層上面	2mm以下の砂 粒多く含む。 良	にぶい褐色 浅黄色	口径: 17.2	頭部外面ハケメ、内面ナデ。 口縁端部は削除され2条の凹 痕。	弥生時代 中期後半	
85-6	弥生土器	甕	F-6区 砂壁層上面	質砂粒含む。 やや不良	にぶい赤褐色 にぶい褐色	口径: 13.2	口縁部内面摩滅。外面に擦痕 線文。	弥生時代 後期中葉	草田2期
85-7	弥生土器	甕	F-5区 砂壁層上面	2mm以下の砂 粒多く含む。 良	にぶい褐色 明褐灰色	口径: 15.2	口縁部内面ミガキ?。外面に 擦痕線文。	弥生時代 後期中葉	草田2期
85-8	弥生土器	甕	F-6区 砂壁層上面	1mm人の砂粒 多く含む。 良	褐灰色 にぶい褐色	口径: 14.2	口縁部内面ヨコナデ。外面に 擦痕線文。	弥生時代 後期後半	草田3期
85-9	弥生土器	甕	F-6区 砂壁層上面	1mm以下の砂 粒含む。 やや不良	褐灰色 灰黃褐色	口径: 19.4	口縁部内面ヨコナデ。外面に 5条の擦痕線文を2段に施す。	弥生時代 後期後半	早山3期
85-10	弥生土器	甕	F-6区 砂壁層上面	1mm以下の砂 粒含む。 やや不良	にぶい黄褐色 にぶい褐色	口径: 15.4	口縁部内面ヨコナデ。外面に 擦痕線文。	弥生時代 後期後半	草山3期
85-11	弥生土器	器台	F-7区 砂壁層	1mm人の砂粒 を含む。 良	にぶい褐色 にぶい黄褐色		内面ミガキ。外面に擦痕線文。 外側の一部に赤色顔料が認め られる。	弥生時代 後期中葉	草田2期
85-12	弥生土器	高环?	F-3区 砂壁層	2mm以上の砂 粒多く含む。 やや不良	浅黄褐色 浅灰褐色	口径: 19.7	内外面摩滅	不明	
85-13	弥生土器	甕・更類		1mm以下の砂 粒含む。 良	黑色 にぶい黄色	底径: 9.0	外面に底方向のミガキ。	不明	
85-14	弥生土器	不明		1mm人の砂粒 多く含む。 良	暗赤褐色 褐灰色	口径: 13.6	内外面にミガキ	不明	

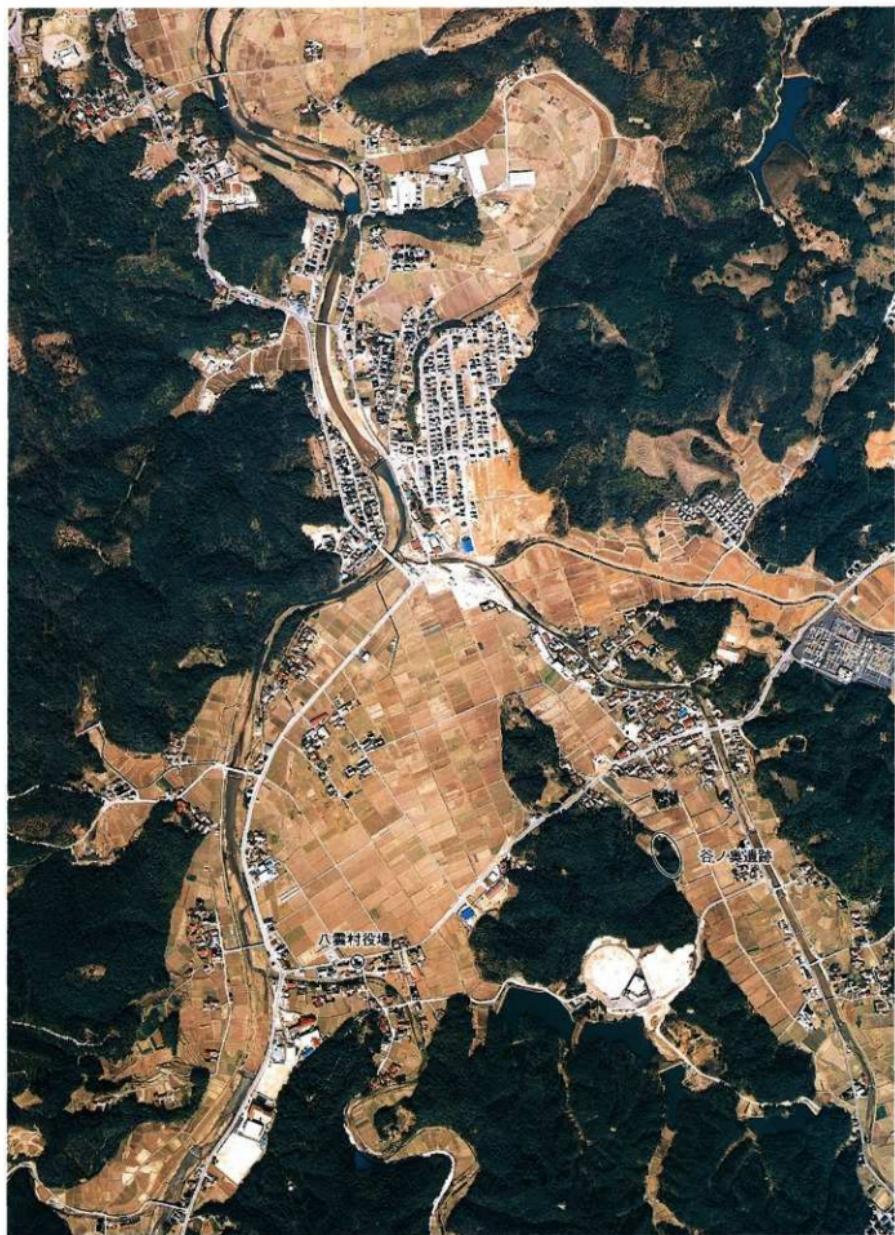
第20表 谷ノ奥遺跡第II調査区出土石器観察表

単位(cm)

調査番号	品目	石材	出土地点	高士土層	法量				備考
					長さ	幅	厚さ	重量(g)	
86-15	打製石斧	I 流紋岩	G-7区	砂壁層上面	17.9	8.7	2.6	484.9	
86-16	石鏃	安山岩			2.1	1.4	0.4	0.7	

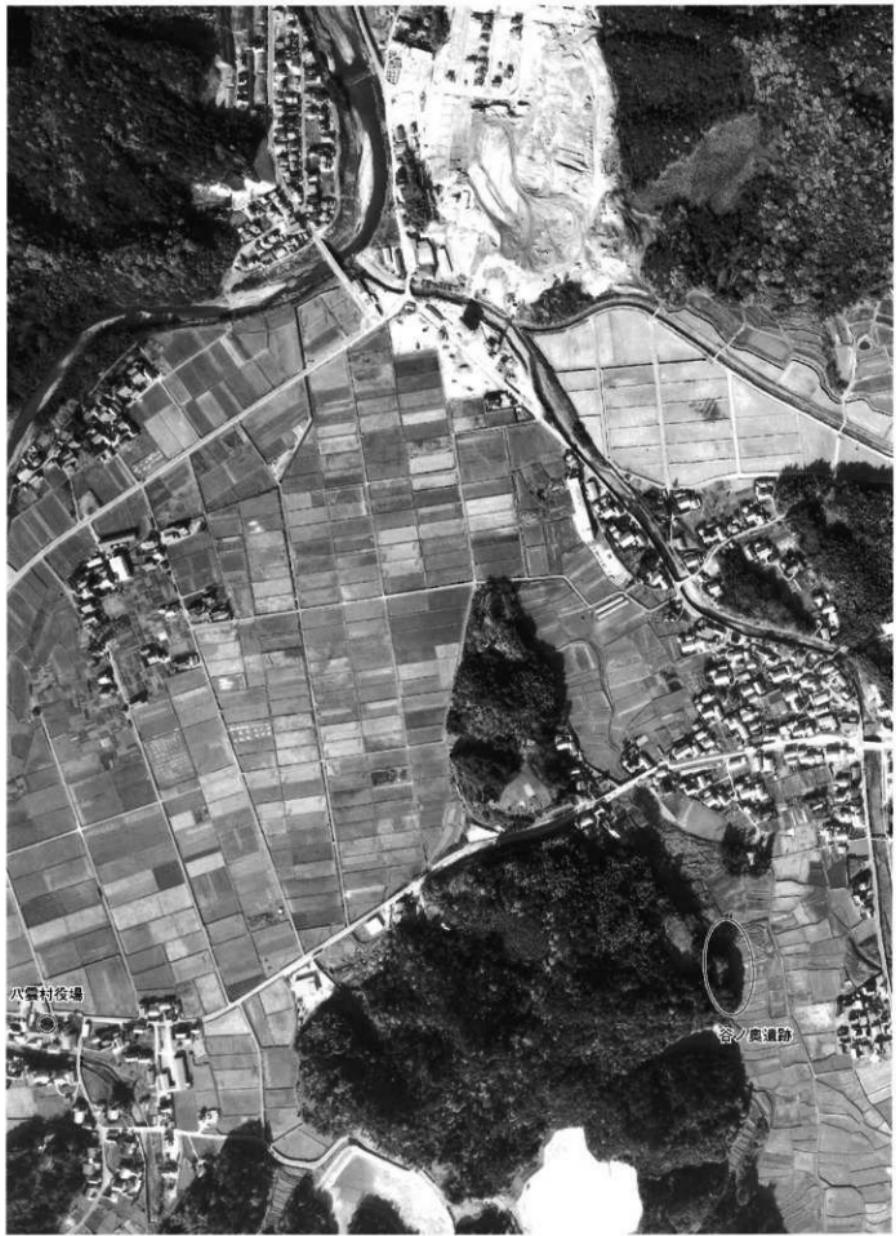
図 版

数字は図面番号に対応



遺跡周辺空中写真（平成 3 年撮影）

図版2



遺跡周辺空中写真（昭和58年撮影）

図版3 (第I調査区)



発掘調査前の谷ノ奥遺跡（南東より）



発掘調査後の谷ノ奥遺跡第I調査区（空中写真）

図版4 (第I調査区)



発掘調査後の谷ノ奥遺跡第I調査区（北東より）



現在の谷ノ奥遺跡周辺（南より）

図版5 (第I調査区)



SK-02 全景(東より)



SK-03 全景(北東より)

図版6 (第I調査区)



谷ノ奥1号墳全景(北より)



谷ノ奥1号墳土層堆積状況(南東より)

図版7 (第I調査区)



発掘調査前の谷ノ奥2号墳（北より）



谷ノ奥2号墳全景（北より）

図版 8 (第 I 調査区)



谷ノ奥 2号墳主体部全景 (西より)



谷ノ奥 2号墳主体部検出状況 (西より)

図版9 (第I調査区)



谷ノ奥2号墳埴丘土層断面(北西—南東軸)

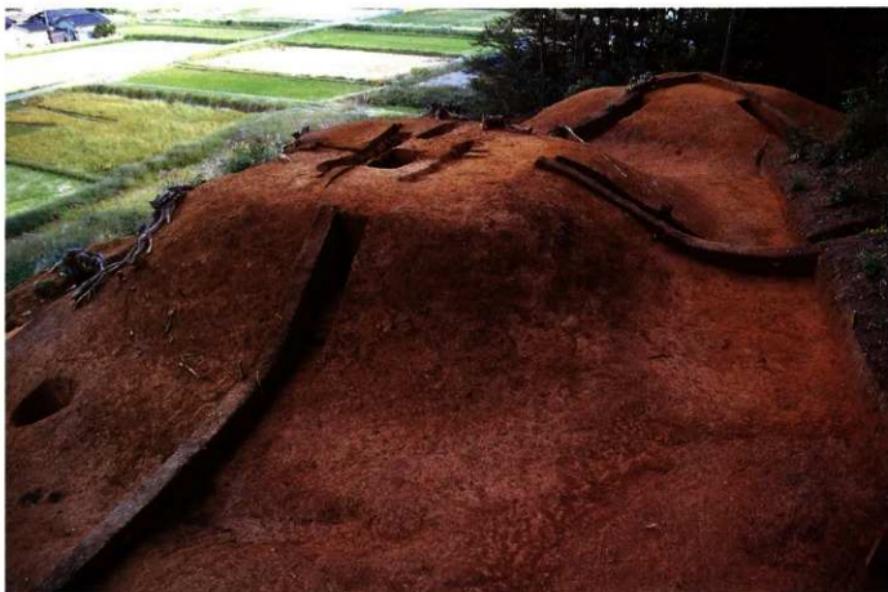


谷ノ奥2号墳盛土除去後の状況(北より)

図版10 (第I調査区)



発掘調査前の谷ノ奥 3号墳(北西より)



谷ノ奥 3号墳全景(北西より)

図版11 (第I調査区)



谷ノ奥 3号墳主体部全景(北より)



谷ノ奥 3号墳第1主体部遺物出土状況(北より)

図版12 (第 I 調査区)



谷ノ奥 3号墳第2主体部遺物出土状況（南より）



谷ノ奥 3号墳周溝内遺物出土状況（北東より）

図版13 (第I調査区)



谷ノ奥 3号墳墳丘土層断面(西一東軸)



谷ノ奥 3号墳盛土除去後の状況(北より)

図版14 (第Ⅰ調査区)



谷ノ奥 4号墳周溝内遺物出土状況（北東より）



SB-01・杭列全景（西より）

図版15 (第I調査区)



加工段平坦面河原石・五輪塔検出状況（北より）



加工段平坦面に造られた土塚墓群（北東より）

図版16 (第I調査区)



河原石・五輪塔除去後の加工段平坦面(北より)



加工段平坦面の発掘作業風景(南東より)

図版17 (第I調査区)



五輪塔出土状況 (SX-01 付近)

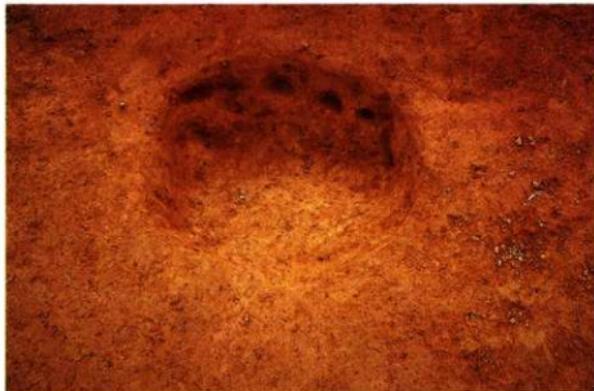


土師質土器出土状況 (第58図128)

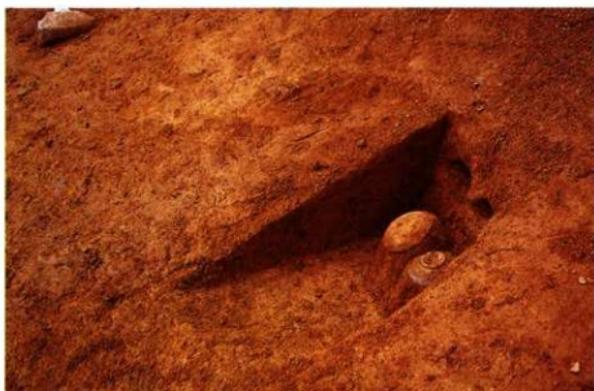


青銅製品出土状況 (第59図154)

図版18 (第I調査区)



SK-05 全景 (東より)



SK-05 遺物出土状況 (北東より)



SK-07 全景 (北より)

図版19（第I調査区）



図版20 (第I調査区)



SK-12 全景 (東より)



SK-12 遺物出土状況 (北東より)

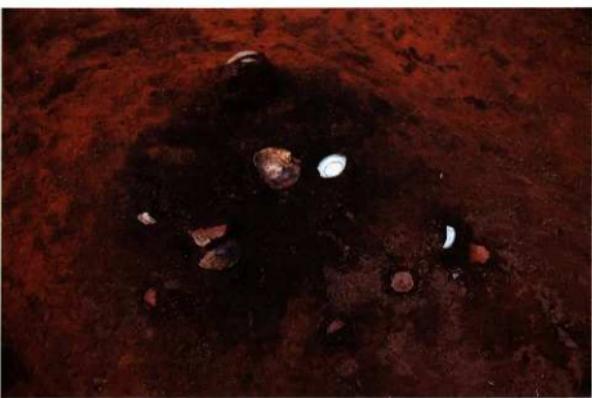


SK-13 全景 (北西より)

図版21 (第I調査区)



SK-18 全景 (北東より)



SK-18 遺物出土状況 (南東より)

図版22 (第I調査区)



SK-18 上の集石 (北東より)

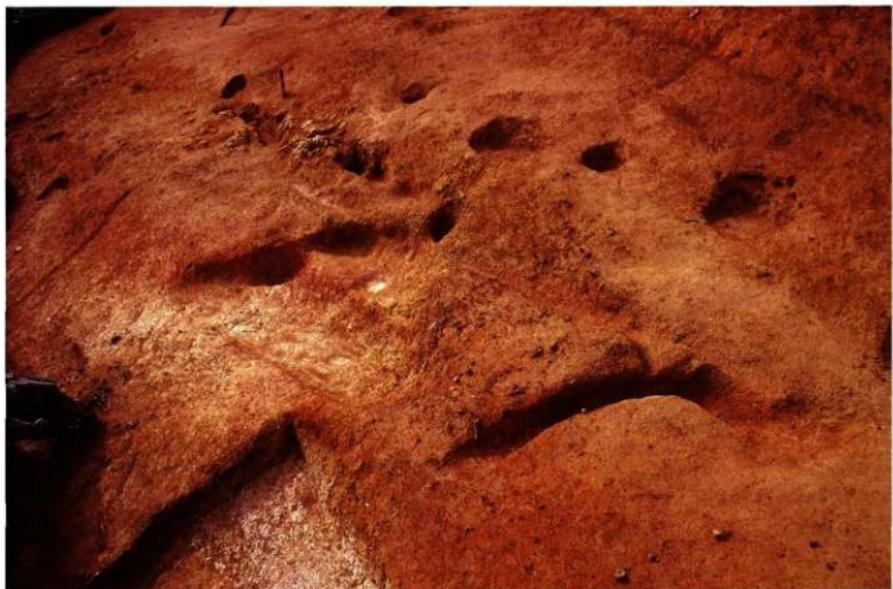


SK-24 全景 (北より)



SK-24 上の集石 (北より)

図版23 (第I調査区)



SX-01 全景（北東より）



SX-01 土層堆積状況（南東より）

図版24（第Ⅱ調査区）



発掘調査前の谷ノ奥遺跡第Ⅱ調査区（南より）



発掘調査後の谷ノ奥遺跡第Ⅱ調査区（南より）

図版25 (第Ⅱ調査区)



谷ノ奥遺跡第Ⅱ調査区土層堆積状況(南西より)



谷ノ奥遺跡第Ⅱ調査区遺物出土状況(第85図8)